

と姥は絲を繰るやうな話しぶり。心のどかに口をまはして、自分も又お茶参つた。しばらく往來もなかつたのである。

八

「……おう、宰八か。お爺、在所へ歸るだら、此さ一個、産神様へ届けてくんな。丁どはい、其の荷車は幸だ、と言はつしやる。」

見ると、お前様、嘉吉めが、今申した其の體でござりましょ。

同じ産神様氏子夥間ぢや。承知なれど、私はこれ、手が此の通り、思ふやうに荷が着けられぬ。御身たちあんばいよう直さつしやい、荷の上へ載せべい、と爺どのが云ひますとの。

何お爺い、其ま、上へ積まつしやい、と早や二人して、嘉吉めが天窓と足を、引立てるではござりませぬか。

爺どのが、待たつしやい、鶴谷様のお使ひで、綿を大いこと買うて來たが、醬油樽や石油罐の下積になつては悪かんべいと、上荷に積んであるもんだ。喜十郎旦那が許で、ふつくりと入れさつしやる綿の初穂へ、其の酒浸しの怪物さ、押ころばしては相成んねえ、柔々積方も直さつしやい、と利かぬ手の拳を握つて、一力味方みましけ。

七面倒な、恚うすべい、と荒稼ぎの氣短徒ぢや。お前様、上かゞりの繩の先を、嘉吉が胴中へ結へ付けて、車の輪に障らぬまでに、横づけに縛りました。

賃錢の外ぢや、落しても大事ない。然らば急いで歸らつしやれ。しやんくんと手を拍いて、賭博に勝つたものも、負けたものも、飲んだ酒と差引いて、誰も損はござりませぬ。可い機嫌のそり節、尻まで捲つた脛の向く方へ、ぞろ／＼散つたげにござります。

爺どのは、どつこいしよ、と横木に肩を入れ直いて、てんぼうの片手押しは、胸が力でござります。人通りが少いで、露にひろがりました濱晝顔の、ちら／＼と咲いた上を、ぐいと曳出して、それから、がた／＼。

大崩まで葉山からは、だら／＼の瓜先上り。後はなぞへに下り道。車がはずんで、ごろ／＼と、私が此の茶店の前まで参つた時ぢや、と……申します。

やい、枕をくれ、枕をくれ、と嘉吉めが喚くげな。

何吐すぞい、此の野郎、贅澤べいこくなてえ、狐店の白ツ首と間違へてけつかるさうな、とぶつぶつ口叱言を申しましての、爺どのが振向きもせず、ぐん／＼曳いたと思はつしやりまし。」

宮迷草

「何か、夢でも見たらうかね。」

「夢處でござりますか、お前様、直ぐに縊殺されさうな聲を出して、苦しい、苦しい、鼻血が出

るわ、目がまふわ、天窓を上へ上げてくれ。やい、何うするだ、さあ、殺さば殺せ、漕がば漕げ、と未だ夢中で、嘉吉めは船に居る氣で居ります、よめ。

胴中の繩が弛んで、天窓が地へ擦れ〜に、倒になつて居りますさうな。こりや尤ぢや、なう、たつての苦惱。

酒が上つて、醒めずに居たりや本望だんべい、俺ら手が利かねえだに、最些とだ辛抱せろ、とぐら〜と揺り出しますと、死ぬる、死ぬる、助け船引と火を吹きさうに喚いた、となう。

此の中ではござりませぬ、

と姥は葦簀の外を見て、

「廂の蔭ぢやつたげにござります。浪が届きませぬばかり。低い三日月様を、漆見たやうな高い鬚からはづさつせえまして、眞白なのを顔に當てて、團扇が衣服を掛けたげな、影の涼しい、姿の長い、裾の薄蒼い、慄然とするほど美しらしいお人が一方。すら〜道端へ出さつせて、

(……………)

爺どのを呼留めて、是は罪人か——と問はしつけえよ。

食物も代物も、新しい買物ぢや。縁起でもない事の。罪人を上積みにして何、爲べい、是れ々で

ござる。と云ふと、可哀相に苦しからう、と團扇を取つて、薄い羽のやうに、一文字に、横に口へ啣へさしつた。

其時は、爺どのの方へ背を向けて、顔を恚う斜つかひに、

と法師から打背く、と俤の其の薄月の、婦人の風情を思遣ればか、葦簀をはづれた日のかげりに、姥の頸が白かつた。

荷物の方へ、する〜と膝を寄せて、

「其處で？」

「はい、両手を下げて、白い其の両方の掌を合はせて、がつくりとなつた嘉吉の首を、四五本目の輻の邊で、上へ支けて持たつせえた。おもみが掛つたか、姿を絞つて、肩が細りしましたげなよ。」

九

「介抱しよう、お下ろしな、と言はつしやる。

其の位な荒療治で、寝汗一つ取れる奴か。打棄つて置かつせえ。面倒臭い、と顛巻しめた頭を掉つて云うたれば、何處まで行く、と聞かしつけえ。

途中さま／＼の隙さへで、爺どのもむかつばらぢや、秋谷鎮座の明神様、俺等が産神へ届け物だ、とつツきり饒舌ると、

(受取りませう、此處で可いから。)

(お前様は?)

(あ、明神様の侍女よ)と言はつしやつた。

月に浪が懸りますやうに、さら／＼と、風が吹きますと、揺れながら此の葦簀の蔭が、格子縞のやうに御袖へ映つて、雪の膚まで透通つて、四邊には影もない。中空を見ますれば、白鷺の飛ぶやうな雲が見えて、ざつと一浪打ちました。

爺どのは慄然として、はい、はい、と柔順になつて、繩を解くと、すりこけての、嘉吉のあの圖體が、どたりと荷車から。貴女は擡げた手を下へ、地の上へ着けるやうに、嘉吉の頭を下ろさつせえた。

足をばた／＼の、手によい／＼、輻も蹴はつしさうに悶きますわの。

(あ、お前は最う可いから。)邪魔ものやうにおつしやつたで、爺どのは心外ぢや……

何の、心外からずとも、いけずな親仁でござりますがの、ほ、ほ、ほ、

「否、いや、私が聞いただけでも、何か、恚う故と邪慳に取扱つたやうで、對手が其の酔漢を勞

ると云ふだけに、黙つては居られませんか。何だか寢覺が悪いやうだね。」

「え、串戯にも、氏神様の知己ぢやと言はつしやりましたに、嘉吉を荷車に縛りましたのは、明神様の同一孫兒を、繼子扱ひにしましたやうで、貴女へも聞えが悪いござりますので。

綿の上積一件から荷に奴を縛つたは、爺どのが自分したではない事を、言譯がましく饒舌りますと、(可いから、お前は彼方へ)と、恚うぢやとの。

(可かあねえだ。もの、理合を言はねえ事にや、ハイ氣が濟みましねえ。お前様も明神様お知己なら聞かつしやい。老筆の手ぼう爺に、若いものの酔漢の介抱が何、出来べい。神様も分らねえ、こんな、くだま野郎を勞つて遣らつしやる御慈悲深い思召で、何でこれ、私等婆様の中に、小兒一人授けちやくれさつしやらぬ。其も可い、無い子だねなら斷念めべいが、提灯で火傷をするのを、何で、黙つて見てござつた。私が手ぼうでせえ無くば、おなじ車に結へるちゆうて、恚う、けんどんに、倒にや縛らねえだ。初対面のお前様見さつしやる目に、えら俺が非道なやうで、寢覺が悪い)と顛巻を掉立てますと、なう。

(早く、お歸り)と、繼穂がないわの。

(いんにや、理を言はねえぢや)とまだ早や一概に捏ねようとはしましたら……

(おいでよ)と、お前様ね。

團扇で顔を隠さしたなり、背後へ雪のやうな手を伸して、荷車ごと爺どのを、推遣るやうにさつせえた。お手の指が白々と、恠う輻の上で、絲車に、はい、綿屑がかつたげに、月の光で動いたらばの、ぐるぐるすると輪が廻つて、爺どのの背へ、荷車が、乗被さるではござりませぬか。」

「お、お、」

と、法師は目を睜つて固唾を呑む。

「吃驚龜の子、空へ何と、爺どのの手を泳がせて、自分の曳いた荷車に、ぐわら／＼背後から押出されて、わい、というた切、一呼吸に村の取着き、あれから、此の街道が鍋づる形に曲ります、明神様、森の石段まで、ひとりでに驅出しましたげな。」

尤も見さつしやります通り、道はなぞへに、向へ低くはなりますが、下り坂と云ふ程ではなし、其の疾いこと。一なだれに迄つたやうで、漸と石段の下で、うむ、とこたへて踏留まりますと、はずみのついた車めは、がた／＼と石ころの上を空廻りして、躍つたげにござります。

見上げる空の森は暗し、爺どののは、身震ひをしたと申しますがの。」

十

「利かぬ氣の親仁ぢや、お前様、月夜の遠見に、纏つたものの形は、葦簧張の柱の根を壓へて置きます、お前様の背後の、其の石礎か、私が立掛けて置いて歸ります、此の床几の影ばかり。

大崩壊まで見通しになつて、貴女の姿は、蜘蛛巣ほども見えませぬ。其をの、透かし／＼、山際に附着いて、薄墨引いた草の上を、蹠音を盗んで引返しましたげな。」

嘉吉を何う始末さつしやるか、其を見届けよう、と云ふ、爺どのの了簡でござります。

荷車はの、明神様石段の前を行けば、御存じの三崎街道、横へ切れる畔道が在所の入口でござりますで、其處へ引込んだものでござります。人氣も穩なり、積んだものを見たばかりで、鶴谷様御用、と札の建つたも同一ぢやで、誰も手の障へ人はござりませぬで。

爺どののは、這ふやうにして、身體を隠して引返したと言ひましけ。能う姿が隠されう、光つた天窓と、顛卷の茜色が月夜に消えるか。主や其處で早や、貴女の術で、活きながら鉄の紅い月影の蟹に成つた、とあとで村の衆にひやかされて、え、措けやい、氣味の悪い、と目をばちくり、泡を吹いたでござりますよ。

笑うて遣らつしやりませ。いけ年を仕つて、貴女が、去ね、とおつしやつたを止せば可いことでござります。」

法師は恠くと聞いて眉を擧め、

「笑ひ事ではない。何かお爺様に異状でもありましたか。」
「お目こぼしでござります、」

と姥は謹んだ、顔色して、

「爺どのはお庇と何事もござりませんで、今日も鶴谷様の野良へ手傳ひに参つて居ります。」

「ぢや、其の嘉吉と云ふのばかりが、變な目に逢つたんだね。」

「其も心からでござります。はじめはお前様、貴女が御親切に、勿體ない……お手づから薫の高い、水晶を噛みますやうな、涼しいお薬を下さつて、水ごと残して置きました、……此の手桶から、……」

と姥は見返る。捧げた心か、葦簀に挟んで、常夏の花のあるが下に、日影涼しい手桶が一個、輪の上に、——大方其時以來であらう——注連を張つたが、まだ新しい。

「水も汲んで、く、めてお遣り遊ばした。嘉吉の我に返つた處で、心得違ひをしたために、主人の許へ歸れずば、是を代に言譯して、と結構な御寶を。……」

其がお前様、眞緑の、光のある、美しい、珠ぢやつたげにござります。

爺どのが、潛り込んだ草の中から、其の蟹の目を密と出して、見た時ぢやつたと申します。

「怒う、貴女がお持ちなされました指の尖へ、ほんのりと蒼く映つて、白いお手の透いた處は、」

大な螢をお撮みなさりましたやうぢやげな。

貴女のお身體に附屬して居てこそぢやが、やがて、はい、其の光は、嘉吉が賽ころを振る掌の中へ、消えましたとの。

其から、抜かつしやりましたものらしい、少し俯向いて、え、矢張、顔へは團扇を當てたまんまで、お髪の黒い、前の方へ、軽く簪をお挿なされて、お草履か、雪駄かの、其なりに、はい、すらくと、月と一所に女浪のやうに歩行かつしやる。

是で又爺どのは悚然としたげな。なう、如何な事でも、明神様の知己ぢや言はしつたは申戯で、大方は、葉山あたりの誰方のか御別荘から、お忍びの方と思はしつけがの。

今行かつしやるのは反對に秋谷の方ぢや。……はてな、と思ふと、變つた事は、其ばかりではござりませぬよ。

嘉吉の奴がの、あらう事か、慈悲を垂れりや、何とやら。珠は掴む、酒の上ぢや、はじめは唯、御恩返しぢやの、お名前を聞きたいの、唯一目お顔の、とこだはりましけ。柳に受けて歩行かつしやるで、機織場の姉やが許へ、夜さり、畦道を通ふ時の高聲の唄のやうな、眞似もならぬ大口利いて、果は増長此の上なし、袖を引いて、手を廻して、背後から抱きつきをる。

爺どのは冷汗掻いたげな。や、それでも召ものの裾に、草鞋が引か、りましたやうに、するす

ると嘉吉に抱かれて、前さまに行かつしやつたさうなの、お前様、飛んでもない、
「怪しからん事を——又したもんです。」
と小次郎法師は苦り切る。

十一

姥は分別あり顔に、

「一目見たら、其の御容子だけでなりと、分りさうなものでござります。

貴女が神にせよ、又人間にしました處で、嘉吉づれが口を利かれます御方ではござりませぬ。
然うでなくとも、そんな御恩を被つたでござりますもの。拜むにも、後姿でなうては罰の當りま
す處、悪黨なら、お前様、發心の爲處を。

根が悪徒ではござりませぬ、取締りのない、唯ばうと、一夜酒が沸いたやうな奴殿ぢや。薄も、
蘆も、女郎花も、見境はござりませぬ。

髪が長けりや女ぢや、と合點して、さかりのついた犬同然、珠を頂いた御恩なぞも、新屋の姉
えに、藪の前で、牡丹餅半分分けて貰うた了簡ぢやで、なう、食物も下されば、お情も下されう
ぐらるに思うて、こびりついたでござります。

辨天様の御姿にも、蠅がたかれば、お鬱陶しい。

通りがかりに唯見ては、草がくれの路と云うても、早に枯れた、岩の裂目とより見えませぬ
が。」

姥は腰を掛けたまゝ。さて、乗出すほどの距離でもなかつた——

「直き其の、向う手を分け上りますのが、山一ツ秋谷在へ近道でござりまして、馬車こそ通ひま
せぬけれども、私などは夜さり店を了ひますると、お菓子、水菓子、商物だけを風呂敷包、ト背
負ひまして、片手に薬罐を提げたなりで、夕焼にお前様、影をのびく長々と、曲つた腰も、樂
樂小屋へと歸りますかの。」

貴女は其處へ。……お裾が靡いた。

是は不思議、と爺どのが、肩を半分乗出す時ぢや、お姿が波を離れて、山の腹へすらりと高う
なつたと思ふと、はて、何を嘉吉がしくさりましたか。

屹と振向かつしやりました様子ぢやつけ、お顔の團扇が翻然と翻つて、斜に浴びせて、嘉吉の
横顔へびしりと來たげな。

きやつ！ と云ふと刎返つて、道ならもの小半町、膝と踵で、抜いた腰を引摺るやうに、其
癖、怪飛んで遁げて來る。

爺どのは爺どので、息を詰めた汗の處へ、今のきやあ！で轉倒して、わつ、と云うて山の根から飛出す處へ、胸を頭突に来るやうに、ドンと嘉吉が打附つたので、兩方へ間を置いて、此の街道の真中へ、何と、お前様、見られた圖でござりますか。

二人とも尻餅ぢや。

(何、何うした野郎、)と小腹も立つ、爺どのが恐怖紛れに、がならつしやると、早や、變でござりましたげな、きよるん、とした眼の見据ゑて、私が爺の宰八の顔をじろり。

(ば、ば、ば、)

(え、！)

(怪物！)と云ふかと思ふと、ひよいと立つて、又ばたくと十足ばかり、驅戻つて、うつむけに突んのめつたげにござりまして、なう。

爺どのは二度吃驚、起ちかけた膝が又がつくりと地面へ崩れて、ほつと太い呼吸さついた。くわつと成つて浪の音も聞えませぬ。其で居て——寂然として、海ばかり動きます耳に響いて、秋谷へ近路の其の山づたひ。鈴蟲が音を立てると、露が溢れますやうな、佳い聲で、そして物凄う、

(此處は何處の細道ぢや、

細道ぢや。

天神さんの細道ぢや、

細道ぢや。

少し通して下さんせ、下さんせ。)

とあはれに寂しく、貴女の聲で聞えました。

其の聲が遠くなります、山の上を、薄綿で包みますやうに、雲が白くかゝりますと、音が先へ、颯あ——とたよらない雨が、海の方へ降つて来て、お聲は山のうらかけて、遠くなつて行きますげな。

前刻見た兔の毛の雲ぢや、一雨来ようと思つた癖に、こりや心ない、荷が濡れよう、と爺どのは驅けて戻つて、ぐわつたり車を曳出しながら、村はづれの小店から先づ聲をかけて、嘉吉めを見せにやります。

何か、其の唄のお聲が、なう、十年五十年も昔聞いたやうにもあれば、かう云ふ耳にも、響くと云ひます。

遠慮すると見えまして、餘り委しい事は申しませぬが、嘉吉はそれから、あの通り氣が變になりました。

宮迷草
さあ、界限は評判で、小兒どもが誰云ふとなく、何時の間やら、其の唄を……」

(此處は何處の細道ぢや、

細道ぢや。

秋谷邸の細道ぢや、

細道ぢや。

少し通して下さんせ、

下さんせ。

誰方が見えても通しません、

通しません。)

「あの、かう唄ふではござりませんか。

當節は、もう學校で、かあゝ鴉が鳴く事の、池の鯉が鯀を食ふ事の、と間違ひのないお前様、ちやんと理の詰んだ歌を教へさつしやるに、其を皆が唄はいで、今申した——

(此處は何處の細道ぢや、

秋谷邸の細道ぢや。)

とあはれな、寂しい、細い聲で、口々に、小兒同士、顔さへ見れば唄ひ連れるでござりますが、近頃は久しい間、打絶えて聞いたこともござりませぬ——此の唄を爺どのが其晩聞かした、と云ふ話以來、——誰云ふとなく流行りますので。

其も、なう元唄は、

(天神様の細道ぢや、

少し通して下さんせ、

御用のない人通しません、)

確か、かうでござりませう。其を、

(秋谷邸の細道ぢや、

誰方が見えても通しません、

通しません。)

とひとりでに唄ひます、の。まだ其ばかりではござりません。小兒たちが日の暮方、其處らを遊びますのに、厭な眞似を、まあ、何うでござりませう。

宮迷草
てんぐが芋蕒の葉を振りまして、目の玉二つ、ロ一つ、穴を三つ開けたのを、ぬつぺりと、かう顔へ被つたものでござります。大いの中から小さいのから、其の蒼白い筋のある、細ら長い、

狐とも狸とも、姑獲鳥、とも異體の知れぬ、中にも蟲喰のござります葉の汚點は、癩か、痘痕の幽霊。面を並べて、ひよろ／＼と蔭日向、藪の前だの、谷戸口だの、山の根なんぞを練りながら今の唄を唄ひますが、三人と、五人づゝ、一組や二組ではござりませんで。

悪戯が蒿じて、此の節では、唐黍の毛の尻毛を下げたり、あけびを口に啣へたり、茄子提灯で闇路を辿つて、日が暮れるまでうろつきますわの。

氣に成るのは小石を合せて、手ん手に四ツ竹を鳴らすやうに、カイカイカチカチと拍子を取つて、唄が段々身に染みましますに、皆が家へ散際には、一人がカチ／＼石を鳴らして、

(今打つ鐘は、)

と申しますと、

(四ツの鐘ぢや)

と一人がカチカチ、五ツ、六ツ、九ツ、八ツと數へまして……

(今打つ鐘は、)

七ツの鐘ぢや。)

と云ふのを合圖に、

(そりや魔が魅すぞ！)

と哄と囃して、消えるやうに、残らず居なくなるのでござりますが。

何とも厭な心持で、うそ寂しい、丁ど盆のお精霊様が絶えず其處らを歩行かつしやりますやうで、氣の滅入りますことと云うては、穴倉へ引入られさうでござります。

活潑な唱歌を唄へ。あれは何だ、と學校でも先生様が叱らしやりますさうなが、それで留めますほどならばの、學校へ行く生徒に、蜻蛉釣るものも居りませねば、木登りをする小僧もない筈

——一向に留みませぬよ。

内は内で親たちが、厳しく叱言も申します。氣の強いのは、おのれ、凸助……いや、鼻びつしやり、芋蕒の葉の凹吉め、細道で引捉まへて、張撲つて懲さう、と通りものを待構へて、恚う透かして見ますがの、脊の高いのから順よく並んで、同一やうな芋蕒の葉を被つて居るけに、衣もの縞柄も氣の所爲か、逢魔が時に茫として、庄屋様の白壁に映して見ても、どれが孫やら、悴やら、小女童やら分りませぬ。

おなじやうに、憑物がして、魔に使はれて居るやうで、手もつけられず、親たちがうろ／＼しますの。村方一同寄ると障ると、立膝に腕組するやら、平胡坐で頬杖つくやら、變ぢや、希有ぢや、何でもたゞ事であるまい、と薄氣味を悪がります。

中でも、ほつと溜息ついて、氣に掛けさつしやつたのが、鶴谷喜十郎様。

と丁寧ていねいに、又名またな告つてつて、姥うばは四邊よつたを見たのである。

十三

さて十年ねんの馴染なじみのやうに、擦寄すりよつて聲こゑを密ひそめ、

「童唄わらべうたを聞きかつしやりまし——秋谷あきや邸ぢの細道ほそみちぢや、誰方どなたが見みえても通とほしません——と、の、それ、」

小次郎こじらう法師ほしの頷うなづくのを、合點かてんさせたり、と熟じつと見て、姥うばはやがて打領うちうなづき、

「……でござりませう。先まづ、此この秋谷あきやで、邸やしきと申まをすれば——そりや土藏どざう、白壁造しろかべづくり、瓦屋根かはらやねは、御方おかた一軒けんではござりませぬが、太閤たいかう様さまは秀吉ひでよし公こう、黄門くわうもん様さまは水戸みと様さまでなう、邸やしきは鶴谷つるやに歸きした

もの。
處ところで一軒けんは御本宅ごほんたく、こりや村むらの草分くさわけでござりますが、最もう一軒けん——喜十郎きじゅうらう様さまが隠居所いんきよしょにお建たて

なされた、御別荘ごべつさうがござりましたの。

お金かねは十分じふぶん、通かよひ廊下らうかに藤ふぢの花はなを咲さかせうと、西洋窓せいやうまどに鸚鵡あうひを飼かはうと、見本みほんは直ちき近ちかい處ところにござりました、思召おぼしめし通りぢやけれど、昔氣質むかしかたぎの堅かたい御仁ごじん、我等われら式しき百姓ひやくしやうに、別荘べつさうづくりは相應ふさはしからぬ、とつい此このさきの立石たていし在ざいに、昔むかしからの大庄屋おほしやうやが土臺どたいごと賣物うりものに出だしました、瓦かはらばかりも

小千兩こせんりやう、大黒柱だいこくばしらが二抱ふたかへ。平家ひらやながら天井てんじやうが、高たかい處ところに照々きらくして間敷まぢき十とばかりもござりますのを、牛車うしぐるまに積つんで來きて、背後うしろに大森おほきをひかへて、黒塗くろぬりの門かども立木たちきの奥深おくふかう、巨寺おほでらのやうにお建たてなされて、東京とうきやうの御修業ごしゆげふさきから、御子息ごしそくの喜太郎きたろう様さまが歸かへらつしやりましたのに世よを讓ゆづつて、御夫ごふう婦ひと一先ふひとづ御隠居ごひんきよが濟すみましけ。

去年きょねんの夏なつでござりますが、喜太郎きたろう様さまが東京とうきやうで御最良ごひいきにならつた、然さる御大家ごたいけの嬢様ぢやうさまぢやが、夏休なつやすみに、ぶら／＼病やまひの保養ほやうがしたい、と言いはつしやる。

海邊かいへんは賑にぎやかでも、馬車ばしやが通とほつて埃ほざりが立つ。閑靜かんせいな處ところをお望のぞみ、間敷まぢきは多おほし詔あつらへ向むき、隠居所いんきよしょを三間みまばかり、腰元こしもとも二人ふたりぐらゐる附つく筈はずと、御子息ごしそくから相談さうだんを打ぶたつしやると、隠居いんきよと言いへば世よを避さけたも同様どうやう、又本宅またほんたくへ居直みなほるも億劫おくこまなり、年寄としよりと一所いっしょでは若い御婦人ごふじんの氣きが詰つらう。若いものは若い同士わかどし、本家ほんけの方ほうへお連れ申まをして、土用どよう正月しやうげつ、歌留多うたがらたでも取とつて遊あそぶが可いい、嫁よめも嘸さぞ喜よろこばう、と難有ありがたいは、親おやでなう。

其處そこで、其のお嬢様ぢやうさまに御本家ごほんけの部屋へやを、幾いくつか分わけて、貸かすことになりました。或晚あるばん、腕車くるまでお乗のり込み、天上てんじやうぬけに美うつくしい、と評判ひやうばんばかりで、私等わしらつひぞお姿すがたも見みませなんだが、下男げなん下女げによどもにも口留くちどめして、祕かさしつたも道理だうりぢやよ。

其の嬢様ぢやうさまは落おつこちさうなお腹なかぢやげな。」

「む、孕んで居たかい。そりや怪しからん、其の息子と言ふのが馴染ではないのかね。」
「御推量でござります、其處ぢや、お前様。見えて半月とも経ちませぬに、豪い騒動が起つたのは、喜太郎様の嫁御が又臨月ぢや。」

御本家に飼殺しの親爺仁右衛門、渾名も苦蟲、むづかしい顔をして、御隠居殿へ出向いて、まじりまじり、煙草を捻つて言ふことには、(ハイ、これ、昔から言ふことだ。二人一齊に産をしては、後か、前か、いづれ一人、相孕の怪我がござるで、分別なうては成りませぬ)との。

喜十郎様、凶年にもない腕組をさつせて、(善悪は兎も角、内の嫁が可愛いにつけ、餘所の娘の臨月を、出て行けとは無慈悲で言はれぬ。たゞし廂を貸したものに、母屋を明渡して嫁を隠居所へ引取る段は、先祖の位牌へ申譯がない。私等が本宅へ立歸つて、其の嬢様には此の隠居所を貸すとしよう)——御夫婦、黒門を出さしたのが、又世に立たつしやる前表かの。

鶴谷は再度、御隠居の代になりました。

「息子さんは不埒が分つて勘當かい。」

「聞かつせえまし、喜太郎様は亡くなりましたよ。前後へ黒門から葬禮が五つ出ました。」

「え、え、お前様。」

「誰と誰と、ね？」

「はじめが其の出養生の嬢様ぢや。これが産後でおいとしようならしつた。大騒ぎのすぐあと、七日目に嫁御がお産ぢや。」

夕時が二つはづれて、朝六つから夜の四つ時まで、苦しみ通しの難産でなう。

村中は火事場の騒ぎ、御本宅は寂として、御經の聲やら、咳やら……」

十四

「占者が卦を立てて、こりや死靈の祟がある。此の鬼に負けては成らぬぞ。此の方から逆寄せして、別宅の其の産屋へ、守刀を眞先に露拂ひで乗込めさ、と古袴の股立ちを取つて、突立上りますのに勢づいて、お産婦を褥のま、四隅と兩方、六人の手で密と昇いて、釣臺へ。」

お先立ちが其の易者殿、御幣を、ト襟へさしたものでござります。笹竹の長袋を前半ぢや、小刀のやうに挟んで、馬乗提灯の古びたのに算本を顯しましたので、黒雲の蔽かぶさつた、蒸暑い畔を照し、大手を掉つて参ります。

嫁入道具に附いて来た、藍貝柄の長刀を、柄拂ひして、仁右衛門親仁が擔ぎました。眞中へ、お産婦の釣臺を。其のわきへ、喜太郎様が、帽子かぶりて、蒼くなつて附添つた、背後へ持明院

の坊様が緋の衣ぢや。あとから下男下女どもがぞろ／＼と従きました。取揚婆さんは前へ早や驅抜けて、黒門のお部屋へ産所の用意。

途中、何とも希有な通りものでござりまして、あの螢が又むら／＼と、蠅がなぶるやうに御病人の寝姿に集りますと、おなじ煩うても、美しい人の心かして、夢中で、恚う小兒のやうに、手で取つちや見さしつけ。

上へ手を上げさつしやるのも、御容體を聞くにつけ、空をつかんで悶えさつしやるやうで、目も當てられぬ。

其でも祟りに負けるなど、言うて、一生懸命、仰向かした枕をこぼれて、然まで瘡せも見えぬ白い頬へかゝる髪を先を、確乎白齒で噛ましたたが、お馴染ぢや、私が藪の下で待つて、御新造様しつかりなさりまし、と釣臺に縄つたれば、アイと、細い聲で云うて莞爾と笑はしつた。橋を渡つて向うへ通る、暗の晩の、榛の木の下あたり、螢の數の宙へいかいことちら／＼して、常夏の花の佛立つのが、貴方の顔のあたりぢや、と目を瞑つて、おめでたを祈りましたに……」

聲も寂しう、

「お寺の鐘が聞えました。」

「南無阿彌陀佛。」

「お可哀相に、初産で、其の晩、なう。」

厭な事でもござります。黒門へ着かして、産所へ据ゑよう、としますとの、それ、出養生の嬢様の、お産の床と同一ぢや。(あ、青い鬚巻をした方が、寝てでござんす、些と傍へ)と……まあ、難産の嫁御が然う言はしつた。

其奴に、負けるな、押潰せ、と構はず褥を据ゑましたが、夜露を受けたが悪かつたか、最うお醫者でも間に合はず。

(あなたも……口惜い)と恍惚して、枕に袴と喰つかしつて、うむと云ふが最期で、の、身二ツになりはならしつたが、産聲も聞えず、兩方ともそれなりけり。

餘りの事に、取逆上せさしたものと見えまして、喜太郎様は其の明方、裏の井戸へ身を投げたはしつた。

井戸替もしたなれど、不氣味ぢやで、誰も、はい、其の水を飲みたがりませぬ處から、井桁も早や、青芒にかくれましたよ。

七日に一度、十日に一度、仁右衛門親仁や、私が許の宰八——少いものは初から恐ろしがつて寄つきませぬで——年役に出かけては、雨戸を明けたり、引窓を繰つたり、日も入れ、風も通したなれど、此の間の其の、なう、嘉吉が氣が違ひました一件の時から、い、年をしたものまで、

黒門を向うの奥へ、木下闇を覗きますと、足が縮んで、一寸も前へ出はいたしませぬ。
簪の蒼い光つた珠も、大方瑩であらう、などと、ひそく風説をします處へ、芋蕒の葉に目口
のある、小さいのがふら／＼歩行いて、其のお前様、

(秋谷邸の細道ぢや、)

誰方が見えても……)

でござりませう。人足が絶えるとなれば、草が生えるばかりぢや。ハテ黒門の別宅は是非に
及ばぬ。秋谷邸の自家だけは、人足が絶やしたうないものを、何うした時節か知らぬけれど、鶴
谷の壽命が来たのか、と喜十郎様は、かさね／＼おつむりが眞白で。おふくる様も好いお方、お
いとしい事でございます。

お、お、つい長話になりました、そこちこ刻限、あ、可厭な芋蕒の葉が、唄うて歩行く
時分になりました。」

と姥は四邊を眊した。浪の色が蒼くなつた。

寂然として、果は目を瞑つて聞入つた旅僧は、夢ならぬ顔を上げて、葭簀から街道の前後を視
めたが、日脚を仰ぐまでもない。

「身に染む話に聞惚れて、人通りが最う影法師ぢや。世の中には種々な事がある。お婆さん、お

庇で澤山學問をした、難有う、どれ……」

十五

「そして、御坊様は、これから何處まで行かつしやりますよ。」

包を引寄せる旅僧に連れて、姥も腰を上げて尋ねると、

「鎌倉は通越して、藤澤まで今日の内に出ようと云ふ考へだつたが、最う、是ぢや葉山で灯が點
かう。」

「お、然う言や、森戸の松の中に、ちら／＼と灯が見える。」

「よう御存じでございますの。」

「未だ俗の中に知つて居ます。其處で鎌倉を見物にも及ばず、東海道の本筋へ出ようと云ふ考へ
ぢやつたが、早や遅い。

修行が足りんで、樹下、石上、野宿も辛し、」

と打微笑み、

「鎌倉まで行きませうよ。」

「それは／＼、御不都合な、つい話に實が入りまして、まあ、飛だ御足を留めましてござりま

す。

「いや、何ういたして、忝い。私は尊いお説教を聴問したやうな心持ちぢや。何、嘘ではありません。」

見なさる通り、行脚とは言ひながら、氣散じの旅の面白さ。蝶々蜻蛉の道連には墨染の法衣の袖の、發心の涙が乾いて、おのづから果敢ない浮世の露も忘れる。

何時となく、佛の御名を唱へるのにも遠ざかつて、前刻も、お前ね。

實は此處に來しなであつた。秋谷明神と云ふ、其の森の中の石段の下を通つて、日向の麥畠へ差懸ると、此邊には餘り見懸けぬ、十八九の色白な娘が一人、めりんす友染の襷懸け、手拭を冠つて畑に出て居る。

歩行しながら振返つて、何か、此處等におもしろい事もないか、と徒口半分、檜笠の下から頤を出して尋ねるとね。

はい、浪打際に子産石と云ふのがござんす。これ〜で此處の名所、と土地自慢も、優しく教へて、石段から眞直ぐに、畑中を切つて出て見なさんせ、と指さしを爲てくれました。

如何に石が名物でも、男ばかりで兒が出来るか。何と、姉や、と麥にかくれる島田を覗いて、天狗わらひに冴えて來ました、面目もない不了簡。

嘉吉とかを聞くにつけても、よく氣が違はずに濟んだ事、とお話中に慄氣としたよ。黒門の別荘とやらの、話を聞くと引入られて、氣が沈んで、しんみりと眞心から念佛の聲が出ました。

途中ながらも其の若い人たちの佛名を唱へませう。木賃の枕に目を瞑つたら、尙歴然、と其の人たちの、姿も見えるやうな氣がするから、一層よく念佛が申されようと考へる。

聞かしておくれの、お婆さん、お前は善智識、と云うても可い、私は夜通しでも構はんが。餘り身を入れて話をする——聞く——して居たので、邪魔になつては、と云ふ遠慮か、四五人

此方を覗いては、素通をしたのがあります。

近在の人と見える。風呂敷包を腰につけて、草履穿きで裾をからげた、杖を突張つた、白髪の婆さんの、お前さんとは知己と見えるのが、向うから聲をかけたつけ。お前さんが話に夢中で、氣が着かなんだものだから、其ま、ほく〜去つて了つた。

私も聞惚れて居た處、話の腰を折られては、と知らぬ顔で居たつけよ。

大層お店の邪魔をしました、實に濟まぬ。」

と扇を膝に、兩手で横に支きながら、丁寧ていねいに會釋する。

姥はあらためて右瞻左瞻たが、

「お上人様、御殊勝にござります、御殊勝にござります。難有や、」
と浅からず渴仰して、

「本家が村一番の大長者ちやと云へば、申憎い事ながら、何處を宿ともお定めない、御見懸け申した御坊様ぢや。推しても行つて回向をせう。あゝもせう、慥うもして遣らう、と齋布施をお目當で……」

とずつきり云つた。

「こりや仰有りさうな處、御自分の越度をお明かしなさりまして、路々念佛申して遣らう、と前途をお急ぎなさります飾りの無いお前様。

道中、お髪の伸びたのさへ、却つて貴う拜まれます。何うぞ、其の御回向を黒門の別宅で、近々として進せて下さりませぬか……」

もし、鶴谷でも何のくらの喜びますか分りませぬ。」

十六

鶴谷が下男、苦蟲の仁右衛門親仁。角のある人魂めかして、ぶらりと風呂敷包を提げながら、小川べりの草の上。

「なあよ、宰八、」

「やあ、」

と續いた、手ぼう蟹は、夥間の穴の上を冷飯草履、兩足をしやちこばらせて、舞鶴の紋の白い、萌黄の、是も大包、夜具を入れたのを引背負つたは、民が塗炭に苦んだ、戦國時代の驅落めく。

「何か、お前が出會した——黒門に逗留してござらしやる少え人が、手鞠を拾つたちゆうは何處らだつけえ。」

「直きだ、そうれ、お前が行く先に、猫柳がこんもりあんべい。」

「お、」

「其の根際だあ。帽子のふちも、ぐつたり、と草臥れた形での、其處に、」

と云つた人聲に、葉裏から螢が飛んだ。が、三ツ五ツ星に紛れて、山際薄く、流が白い。

此の川は音もなく、霞のやうに、どんよりと青田の村を這ふのである。

「此處だよ。丁ど、」

と宰八は一寸立留まる。前途に黒門の森を見てあれば、秋谷の夜は此處よりぞ暗くなる、と前途に近く、人の足許が朦朧と、早や其の影が押寄せて、土手の低い草の上へ、襲ひかゝる風情だから、一人が留まれば皆留まつた。

宰八の背後から、最う一人。杖を突いて續いた紳士は、村の學校の訓導である。

「見馴れねえ旅の書生さんぢや、下ろした荷物に、寝べりかゝつて、腕を曲げての、足をお前、草の上へ横投げに投出して、ソレ其處等、白鷺の鶏冠のやうに、川面へほんのり白く、すいくと出て咲いて居ら、晝間見ると桃色の優しい花だ、はて、蓬でなしよ。」

「石竹だつぺい。」

「撫子の一種です、常夏の花と言ふんだ。」

と訓導は姿勢を正して、杖を一つ、くるりと廻はすと、ドボン。

「えゝ！ 驚かなくても宜しい。今のは蛙だ。」

「其の蛙……いんねさ、常夏け。其の花を摘んで何うするだか、一束手ぶしに持ったがね。別にハイ其を視めるでもねえだ。美しい目水晶ばちくりと、川上の空さ碧く光つとる星に向いて、相談打つやうな形だね。」

草鞋がけぢやで、近邊の人ではねえ。道さ迷つたら教へて進ぜべい、と私最う内へ歸つて、婆様と、お客に賣つた澁茶の出殻で、茶漬え搔食ふばかりだもんだで、のつそり其の人の背中へ立つて見て居ると、しばらく経つてよ。

むつくりと起返つた、と思ふとの。……(爺様、あれ〜)

爾時、宰八川面へ乗出して、母衣を倒に水に映した。

「手毬が、手毬が流れる、流れてくる、拾つてくれ、禮をする。」

見ると、成程、泡も立てずに、夕焼が残つたやうな尾を曳いて、其の常夏を束にした、眞丸いのが浮いて来るだ。

(錢金は扱措かつせえ、だが、足を濡らすは、厭な事だ。)と云ふ間も無え。

突然ざぶりと、少え人は衣服の裙を掴んだなりで、川の中へ飛込んだつけ。

押問答に、小半時かゝればとつて、直ぐに突ん流れるやうな疾え水脚では、コレ、無えものを、其處は他國の衆で分らねえ。稻妻を掴へさうな慌て方で、ざぶ〜眞中で追かける、人の煽りで、

水が動いて、手毬は一つくるりと廻つた。岸の方へ寄るでねえかね。

(えら！ 氣の疾え先生だ。然まで欲しけりや算段のうして、柳の枝を折べつしよつても引寄せ取つて遣るだ、見さつせえ、旅の空で、召ものがびしよ濡れた。)と叱言を言ひながら、岸へ来たのを拾はう、と私、えいやつと蹲んだが。

こんな川でも、動揺みにや浪を打つわ、濡れずば榮螺も取れねえ道理よ。私が手を伸すとの、又水に持つて行かれて、手毬は矢張、川の中で、其の人が取らしつげがな。……此處だあ仁右衛門、先生様も聞かつせえ。

と夜具風呂敷の黄母衣越に、茜色の其の顛卷を捻向けて、
「厭な事は、……手毬を拾ふと、其の下に、猫が一匹居たではねえかね。」

十七

訓導は苦笑ひして、

「可い加減な事を云ふ、狂氣の嘉吉以來だ。お前は悪く變なものに知己のやうに話をするが、水潜りをするなんて、猫化けの怪談にも、つひに聞いた事はないぢやないか。」

「お前様もね、當前だあ是れ、空を飛ばうが、泳がうが、活きた猫なら秋谷中私ら知己だ。何も厭な事はねえけど、水ひたしの毛がよれ、前足のつけ根などは、あか膚よ。げつそり骨の出た死骸でねえかね。」

訓導は打棄るやうに、

「何だい、死骸か。」

「何だ死骸か、言はつしやるが、死骸だけに厭なこんだ。金壺眼を塞がねえ。其の人が毬を取ると、三毛の斑が、ぶよ、ぶよ、一度、ぶくりと腹を出いて、目がぎよろりと光ツたけ。其處ら鼠色の汚え泡だらけになつて、どんみりと流れたわ、水とハイ摺々での——其方は岸へ上つて、腰

までつぶ濡れの衣を絞るとつて、帽子を脱いで仰向けにして、其中さ、入れさしつた、傍で見ると、紫もありや黄色い絲もかゝつてある、五色の——手毬は、然まで濡れては居ねえだつけよ。」

「なあよ、宰八、」

「何だえ。」

仁右衛門は沈んだ聲で、

「其の手毬は何うしたよ。」

「今でも其の學生が持つてるかね。」

背後から、訓導も又聞き挟む。

「勿然として消え失せただ。夢に拾つた金子のやうだね。へ、へ、へ、」

とをかしな笑ひ方。

「ふん、」

と苦蟲は苦つたなりで、てく／＼と歩行き出す。

「嘘を吐け、又はじめた。大方、お前が目の前で、しゃぼん球のやうに、ぱつと消えてでもなくなつたらう、不思議さな。」

宮迷草
「違えます、違えますとも！」

仁右衛門の後を打ちながら、

「其の人が、

(爺様、此の里では、今時分手毬をつくか。)

(何でね?)

(小兒たちが、優しい聲、懐しい節で唄うて居る。)

此處は何處の細道ぢや、

秋谷邸の細道ぢや……)

一件ものをの、優しい聲、懐しい聲ぢや云うて、手毬を突くか、と問はつしやるだ。

飛でもねえ、あれはお前様、芋蕘の葉が、と言はうとしたが、待ちろ、藝もねえ、村方の内證

を饒舌つて、恥搔くは知慧でねえと、

(何お前様、學校で體操するだ。おたま杓子で球をすくつて、ひるてんの飛つこをすればちゆッ

て、手毬なんか突きつこねえ)と、先生様の前だけんど、私一ツ威張つたよ。)

「何だ、見ともない、ひるてんの飛びつことは。テニスだよ、テニスと言へば可い。」

「かね……私また西洋の雀踊か、と思つたけ、まあ、可え。」

「些とも可かあない。」

と訓導は唾をする。

「それにしても、奥床しい、誰が突いた毬だらう、と若え方問はつしやるだが。

のつけから見當はつかねえ、けんど、主が袂から瀧のやうに水が出るのを見るにつけても、何

とかハイ勘考せねばなんねえで、其の手毬を持つて見た、」

と黄母衣を一つ揺上げて、

「濡れちや居ねえが、ヒヤリとしたでね、可い鹽梅よ、引込んだのは手棒の方、」

へ、と又獨りで可笑がり、

「此方の手で、ハイ海へ落ちさつしやるお日様と、黒門の森に掛つたお月様の眞中へ、高く恚う

透かして見つけ。

しやぼん球ではねえよ。眞圓な手毬の、影も、草に映つたでね。」

「それが又何うして消えた、馬鹿な！」

と勢込む、つき反らした杖の尖が、ストーンと蟹の穴へ狭つたので、厭な顔をした訓導は、抜き

びまじ一足飛ぶ。

宮迷草

「まあ、聞かつせえ。

玉味噌の鑑定とは、ちくと物が違ふでな、幾ら私が捻くつても、何處のものだか當りは着かね

え。

(霞のやうな小川の波に、常夏の影がさして、遠くに……(細道)が聞える處へ、手毬が浮いて……三年五年、旅から旅を歩いたが、又こんな嬉しい里は見ない。)

と、つぶ濡の衣を垂れる雫さへ、身體から玉がこぼれでもするほどに若え方は喜ばつしやる。」

十八

「——(此の上誰か、此の手毬の持主に逢へるとなれば、爺さん、私は本望だ、野山に起臥して旅をするのも其の爲だ。)

と、話さつしやるでの。村を賞められたが憎くねえだし、又それまでに思はつしやるものを、唯今りましたねえで放擲しては、何か私、氣が濟まねえ。

其處で、草原へ蹲み込んで、信にはなさりますめえけど、と嘉吉に蒼い珠授けさした……」

「の、事を話したらばの。先生様の前だけんど、嘘を吐け、と天窓からけなさつしやりさうな少え方が、

(お、其の珠と見えたのも、大方星ほどの手毬だらう。と、あの又碧い星を視めて云ふだ。け

ちりんも疑はねえ。

(なら、未だ話します事がござります、)と序に黒門の空邸の話をすると。

(川は其の邸の、庭か背戸を通つて流れはしないか。)

と乗出しけよ。……(流れは見さつしやる通りだ)……」

今もおなじやうな風情である。——薄りと廂を包む小家の、紫の煙の中も繞れば、低く裏山の根にかゝつた、一刷灰色の霽の間も通る。青田の高低、麓の凸凹に従うて、柔かにのんどりした、此の一卷の布は、朝霞には白地の手拭、夕焼には茜の襟、襷になり帯になり、果は薄の裳に成つて、今もある通り、村はづれの谷戸口を、明神の下あたりから次第に子産石の濱に消えて、何處へ灌ぐと云ふこともない。口につけると鹽氣があるから、海潮がさすのであらう。其の川裾のたよりなく草に隠れるにつけて、明神の手水洗にかけた獻燈の發句には、是を霞川、と書いてあるが、俗に呼んで湯川と云ふ。

霞に紛れ、霽に交つて、ほのくくと白く、何時も水氣の立つ處から、言ひ習はしたものらしい。あの、薄煙、あの、霽の、一際夕暮を染めた彼方此方は、遠方の松の梢も、近間なる柳の根も、いづれも此の水の淀んだ處で。畑一つ前途を仕切つて、縦に幅廣く水氣が立つて、小高い礎を朦

隴と上に浮かしたしたのは、森の下闇で、露が餘所よりも判然と濃くかゝつた所爲で、鶴谷が別宅の其の黒門の一構。

三人は、彼處をさして迎るのである。

爰に渠等が傳ふ岸は、一間ばかりの川幅であるが、鶴谷の本宅の邊では、凡そ三間に擴がつて、川裾は早や其邊りからびしよ／＼と草に隠れる。

此處へは、流をさかのぼつて來るので、間には橋一つ渡らねばならぬ。

橋は明神の前、三崎街道に一つ、村の中に一つ。今しがた渠等が渡つて、此處から見える其の村の橋も、鶴谷の手で欄干はついて居るが、細流の水静かなれば、偏に風情を添へたやう。青い山から露の麓へ架け渡したやうにも見え、低い堤防の、茅屋から茅屋の軒へ、階子を横へたやうにも見え、唯ある大家の、物好に、長く渡した廻廊かとも視められる。

灯もやゝ、ちら／＼と青田に透く。川下の其方は、藁屋續きに、海が映つて空も明い。——水の奥になるほど、樹の枝に、茅葺の屋根が掛つて、蓑蟲が峙したやうな小家勝の、それも三つが二つ、やがて一つ、窓の明も射さず、水を離れた夕炊の煙ばかり、細く沖で救を呼ぶ白旗のやうに、風のまに／＼と打磨く。海の方は、暮が遅くて灯が疾く、山の裾は、暮が早く、燈が遅いさうな。

まだ其も、鳴子引けば遠近に便があらう。家と家とが間を隔て、岸を措いても相望むのに、黒門の別邸は、かけ離れた森の中に、唯孤家の、四方へ大なる蜘蛛の如く脚を擴げて、何處までも其の暗い影を畝らせる。

月は、其の上にかゝつて居るのに……

先達の仁右衛門は、早や其の樹立の、餘波の夜に肩を入れた。が、見た目のさしわたしに似ない、帯がたるんだ、ゆるやかな川添の道は、本宅から約八丁と云ふのである。

宰八は言續いで、

「……(外廻りを流れて來るし、何もハイ空家から手毬を落す筈はねえ。そんな猫の死骸なら、彼處へ持つて行つて打棄つた奴があるかも知んねえ、草ぼう／＼だでなう)」と私、話をしただがね。」

十九

「其から其の少え方は、(何うだらう、其の黒門の空家と云のを、一室借りるわけには行くまいか、自炊を遣つて、暫時旅の草臥を休めたい)」と相談打つたが、
ねえ、先生様。

お前様、今の住居は、隣の噂々が小兒い産んで、ぎやあく／＼煩え、何處か貸す處があるめえか、言はるゝで、そんな時黒門さ何うだちゆつたら、あれは、と二の足を踏ましつくな。」

と横ざまに浴せかけると、訓導は不意打ながら、さしつたりで、杖を小脇に引抱き、

「學校へ通ふのに足場が悪くつて、道が遠くつて仕様がなから留めたんだ。」

「朝寝さつしやる所爲だつべい。」

仁右衛門が重い口で。

訓導は教ふる如く、

「第一水が悪い。あの、又眞蒼な、草の汁のやうなものが飲めるものかい。」

「然うかね——はあ、まづ何にしろだ。此方から頼めばとつて、晝間掃除に行くのさへ、厭がります空屋敷ぢや。其處が望み、と仰有るに、お住居下されば其の部屋一ツだけでも、屋根の草が無うなつて、立腐れが保つこんだで、此方は願つたり、叶つたり、本家の旦那も嘸喜びませうが、尋常體の家でねえ。あの黒門を潛らつしやるなら、覺悟して行かつせえ、可うがすか、と念を入れると、

(いや其の位の覺悟は何時でもして居る。)

と落着いたもんだてえば。

はてな、此の度胸だら盜賊でも大將株だ、と私、油断はねえ、一分別しただがね、仁右衛門よ、

「お、よ。」

「前刻、着たつ切で、手毬を拾ひに川ん中さ飛込んだ時だ。旅空かけて衣服を何うするだ、と私頼まれ効もなかつたけえ、氣の毒さもあり、急がずは何とかで濡れめえものを夕立た、と我鳴つた時よ。

(着替は一枚ありますから……)

と見得でねえわ、見得でねえね。極りの悪さうに、人の心を無にしねえで言譯をするやうに言はしつげが、此奴を睨んで、はあ、其處へ私が押惚れただ。

殊勝な、優しい、最愛い人だ。是なら世話をしても仔細あんめえ。第一、あの色白な仁體ぢや

……化……仁右衛門よ。」

「何い、」

「暗くなつたの、」

「彼は、酉刻ぢや。」

「は、南無阿彌阿佛、黒門前は眞暗だんべい。」

「大丈夫、月が射すよ。」

と訓導は空を見て、

「お前、其の手毬の行方は何うしたんだい。」

「其處だてね、まあ聞かつせえ。客人が、其の最愛らしい容子ぢや……化、」

と又言ひ掛けたが、青芒が川のへりに、雑木一叢、畑の前を背屈み通る真中あたり、野末の露を一呼吸に吸込んだかと、宰八唐突に、

「はッくしよ！」

胴震ひで、立縮み、

「風がねえで、えら太い蜘蛛の巣だ。仁右衛門、お前、はあ、先へ立つて、能く何ともねえ。」

「巢、巢處か、己あ樹の枝から這ひか、つた、土蜘蛛を引摺んだ。」

「ひやあ、」

「七日風が吹かねえと、世界中の人を吸殺すものだちゆつけ、半日蒸すと、早や是だ。」

と握占めた掌を、自分で捻開けるやうにして開いたが、恐るゝ透して見ると、

「何ぢや、蟹か。」

水へ、ザブン。

背後で水車の如く杖を振廻して居た訓導が、

「長蛇を逸すか、」

と元氣づいて、高らかに、

「忽見る大蛇の路に當つて横はるを、劍を抜いて斬らんと欲すれば老松の影！」

「え、靜にしてくらつせえ、……もう近えだ。」

と仁右衛門は眞面目に留める。

「おい、手毬は何うして消えたんだな、焦つたい。」

「其だがね、疾え話が、御仁體ぢや。化物が、の、それ、たとひ顔を嘗めればとつて、天窓から

鹽とは言ふめえ、と考へたで、其處で、はい、黒門へ案内しただ。仁右衛門も知つての通り――

今日は又――内の婆々殿が肝入で、坊様を泊めたでの、……御本家から恠うやつて夜具を背負つ

て、私が出向くのは二度目だかな。」

二十

「其の書生さんの時も、本宅の旦那様、大喜びで、御酒は食らぬか。晩の物だけ重詰にして、夜さり又搔餅でも焼いてお茶受けに、お茶も土瓶も持つて行け。

言はつしやつたで、一風呂敷と夜具包を引背負つて出向いたがよ。

へい、お客様前刻は。……本宅でも宜しく申してござりました。お手廻りのものや、何や彼や、いつれ明日お届け申します。一餉ほんのお辨當がはり。お茶と、それから臥らつしやるものばかり。何うぞハイ緩り休まつしやりましと、口上言うたが、着物は既に浴衣に着換へて、燭臺の傍へ……こりやな、仁右衛門や私が時々見廻りに行く時、皆閉切つてあつて、晝でも暗えから要害に置いてあつた。……先に案内をした時に、彼是日が暮れたで、取り敢ず點して置いたもんだね。其のお前様、蠟燭火の傍に、首い傾げて、腕組みして坐つてござるで、氣に成るだ。(何うかさつせえましたか)と尋ねるとの。

此處だ!

と唐突に屹と云ふ。

「え、何か」と、訓導は一足退く。

宰八は委細構はず。

「手毬の消えたちゆうがよ。(爰に確に置いたのが見えなくなつた)と若え方が言はつしやるけ。そうら、始まつたぞ、と私ニツ腰をがつくりとやつたが、縁側へつかまつたあ——どんな風に、失くなつたか、はあ、聞いたらばの。

三ツばかり、どうん、どうん、と屋根へ打附つたものがあつた……大な石でも落ちたやうで、

吃驚して天井を見上げると、彼處から、と言はしつけ。仁右衛門、それ、の、西の鉢前の十疊敷の隅っこ。あの大掃除の検査の時さ、お巡査様が階子さして、天井裏へ瓦斯を點けて這込まつしやる拍子に、洋刀の鎧が上つて倒になつた刀が抜けたで、下に居た饅飴屋の直面をちよん切つて、鼻柱怪我アした、一枚外れて居る處だ。

どんと倒落しに飛んで下りたは三毛猫だ。川の死骸と同じ毛色ぢや、(これは、と思ふと縁へ出て)……と客人の若え方が言はつしやつたで、私は思はず傍へ退いたが。

庭へ下りて、草茫々の中へ隠れたのを、急いで障子の外へ出て見て居る内に、床の間に据ゑて置いた、其の手毬がさ。はい、忽然と消えちゆうは、……此處の事だね。」

「消えたか、落したか分るもんか。」

「はあ、分らねえから、變でがしよ。」

「何も些とも變ぢやない。苟も學校のある土地に不思議と云ふ事は無いのだから。」

「でも、お前様、その猫がね、」

「其も猫だか、鼬だか、それとも鼠だが、知れたもんぢやない。森の中だもの、兎だつて居るか

も知れんさ。」

「其のお前様、知れねえについてでがさ。」

宮迷草

「だから、今夜行つて、僕が正體を見届けて遣らうと云ふんだ。」
「はい、何うぞ、願えますだ。今までも村方で、はあ、そんな事を言つて出向いたもののが、
なあ、仁右衛門。」

無言なり。

「前方へ行つて目をまはしつけ、」

「馬鹿、」

と憤然とした調子で呟く。

きかぬ氣の宰八、紅の鉄を押立て、

「お前様も又、馬鹿だの、仁右衛門だの、坊様だの、人大勢の時に、よく今夜來さしつた。今まではハイつひぞ行つて見ようとも言はねえだつてが。」

「當前です、學校の用を缺いて、そんな他愛もない事にかゝり合つて居られるもんかい。休暇になつたから運動かたく來て見たんだ。」

「へ、お前様なんぞ、疊が刎ねるばかりでも、投飛ばされる御連中だ。」

「何を、」

「私なんぞ臆病でも、其の位の事にや馴れたでの、船へ乗つた氣で押しこらへるだ。どうして〜、」

まだ、お前……」

「宰八よ、」

と陰氣な聲する。

「お、」

「ぬしや又何も向う面になつて、をかしたもののお味方をするにや當るめえでねえか。それでなうてせえ、おりや重いもので押伏せられさうな心持だ。」

と溜息をして云つた。浮世を鎖したやうな黒門の礎を、靄がさそうて、向うから押し擴がつた、

下闇の草に踏みかゝり、茂の中へ吸ひ込まれるや、否や、仁右衛門が、

「わつ、」

と叫んだ。

二十一

「はじめの夜は、唯其の手毬が失せましただけで、別に變つた事件も無かつたでございませうか。」
と、小次郎法師の旅僧は法衣の袖を搔合せ。
障子を開けて縁の端近に差向ひに坐つたのは、少い人、即黒門の客である。

障子も普通よりは幅が廣く、見上げるやうな天井に、血の足痕も扱着いては居らぬが、雨垂が傳つたら墨汁が降りさうな古びやう。巨寺の壁に見るやうな、雨漏の痕の畫像は、煤色の壁に風に吹きさらされた、袖のひだが、浮出た如く、浸附いて、どうやら饅頭の形した笠を被つて居るらしい。顔ぞと見る目鼻はないが、其の笠は鴨居の上になつて、空から疊を蹴下ろすやうな。惟ふに漏る雨の餘り侘しさに、笠欲ししと念じた、壁の心が露れたものであらう——抜群に此の魍魎が偉大いから、其が此の廣座敷の主人のやうで、月影がばら／＼と鱗の如く樹の間を落ちた、廣縁の敷居際に相對した旅僧の姿などは、硝子障子に嵌込んだ、歌留多の繪かと疑はるゝ。

「えゝ、」

と黒門の年若な逗留客は、火のない煙草盆の、遙に上の方で、燈火を摺つて、靜に吸ひつけた煙草の火が、其の色の白い頬に映つて、長い眉を黒く見せるほど室の内は薄暗い。——差置かれたのは行燈である。

「未だ其の以前でした。話すと大勢が氣にしますから、實は宰八と云ふ、爺さん……」

「あゝ、手ぼうの……でございませぬ。」

「然うです。あの親仁にも謂はないで居たんですが、猫と一所に手毬の亡くなります些と、前です。」

此の古館の先づ此處へ坐りましたが、爺さんは本家へ、と云つて参りました。黄昏に唯私一人で、是から女中が来て、湯を案内する、上つて来ます、膳が出る。床を取る、寝る、と段取の極りました旅籠屋でも、旅は住心の落着かない、全く假の宿です……のに、本家でも此處を貸しますのを、承知する事か、しない事か。便りに思ふ爺さんだつて、旅他國で畔道の一面識。自分が望んでではありませんが、家と云へば、此の疊を敷いた——八幡不知。

第一要害が全然解りません。眞中へ立つて彼方此方瞻しただけで、今入つて来た出口さへ分らなくなりましたほどです。

大袈裟に言へば、其こそ、さあ、と云ふ時、遁路の無い位で。夏だけに、物の色は未だ分りませんが、日は暮れるし、貴僧、黒門までは可い天氣だつたものを、急に大粒な雨！と吃驚しますやうに、屋根へ掛りますのが、此の蔽かぶさつた、櫛の葉の落ちますのです。それと知りつゝ、幾度も氣に成つては、縁側から顔を出して植込の空を透かしては見い／＼しました、

と肩を落して、仰ぎ様に、廂はづれの空を覗いた。

「矢張晴れた空なんです……今夜のやうに。」

「しますると……」

旅僧は先祖が富士を見た状に、首あげて天井の高きを仰ぎ、

「此の、時々ばらくと來ますのは、木の葉でございますかな。」
「御覽なさい、星が降りさうですから、」
「成程。其癖音の爲ますたびに、ひやくと身うちへ應へますで、道理こそ、一雨かゝつたと思ひましたか。」

「お冷えなさるやうなら、貴僧、閉めませう。」

「否、蚊を疵にして五百兩、夏の夜は是が千金にも代へられません、却つて陽氣の方がお宜しい。」
と顔を見て、

「しかし、如何にも其時はお寂しかつたでございませう。」

「實際、貴僧、遙々と國を隔てた事を思ひ染みました。此の果に故郷がある、と晝間三崎街道を通りつゝ、考へなかつたでもありませんが、場所と時刻だけに、又格別、古里が遠かつたんです。」

「失禮ながら、御生國は、」

「豊前の小倉で、……葉越と言ひます。」

葉越は姓で、渠が名は明である。

「噫、御遠方ぢや、」

と更めて顔を見る目も、法師は我ながら遙々と海を視める思ひがした。旅の躰が何となく、袖

を壓して、其の單衣の縞柄にも顯れて居たのであつた。

「而して貴僧は、」

「是は申後れました、私は信州松本の在、至つて山家ものでございませう。」

「それぢや、二人で、海山のお物語が出来ますね。」

と、明は優しく、人懐っこい。

二十二

「不思議な御縁で、何とも心嬉しく存じますが、なか／＼お話相手には成りませぬ。唯承りまするだけで、其が然し何より私には結構でございませう。」

と僧は慇懃である。

明は少し俯向いた。瘠せた額に襟狭く、

「其のお話と云ひますのが、實に取留めのない事で、貴僧の前では申すのもお恥かしい。」

「決して、然やうな事はございませぬ。茶店の婆さんは此の邸に悪物の——え、唯聞きました

ばかりでも、成程、浮ばれさうもない、少い佛たちの回向も頼む。就ては貴下のお話も出まして

な。何か御覺悟がおありなさるさうで、熟と辛抱をしてはござるが、怪しい事が重なるかして、

お顔の色も、日毎に悪い。

と申せば、庭先の柿の廣葉が映る所爲で、それで蒼白く見えるんだから、氣にするな、とおつしやるが、お身體も弱さうゆゑに、老寄夫婦で一層のこと氣にかゝる。

晝の内は宰八なり、誰か、時々お伺ひはいたしますが、此頃は氣怯れがして、其さへ不沙汰勝ちやに因つて、私に能くお見舞申してくれ、と云ふ、暮々も其の託でございました。が何か、最初の内、貴方が御逗留と云ふのに元氣づいて、血氣な村の若い者が、三人五人、夜食の惣菜もの持寄り、一升徳利なんぞ提げて、お話對手、夜伽はまだ穩な内、やがて、刃物切物、鐵砲持參、手覚えのあるのは、係羅に鼠の天麩羅を仕掛けて、ぐびぐび飲みながら、夜更けに植込みを狙ふなんと云ふ事がありますさうで？——

婆さんが話しました。

「私は酒はいけず、對手は出来ませんから、皆さんの車座を、よく蚊帳の中から見ては寝ました。一時は随分賑でした。

まあ、入かはり立かはり、十日ばかり續いて、三人四人づゝ參りましたが、此の頃は、ばつたり來なくなりましてんです。」

「と申す事でございますな。え、時に其の入り交り立ち交りにつけて、何か怪しい、」

と言ひかけて偶と見返つた、次の室と隔ての襖は、二枚だけ山のやうに、行燈の左右に峰を分けて、隣國までは灯が届かぬ。

心も置かれ、後髪も引かれた狀に、僧は首に氣を入れて、ぐつと硬くなつて、向直つて、

「其の怪しいものの方でも、手をかへ、品をかへ、怯かす。——何か其の……疊かひとりで持上りますさうでありますが、眞個でございますかな。」

熟と視て聞くと、又俯向いて、

「ですから、お話しも極りが悪い、取留めのない事だと申すんです。」

「は、あ、」

と胸を引いて、僧は寛いだ狀に打笑ひ、

「或は然うであらうかにも思ひましたよ。では、唯村のものが可い加減な百物語。其の實、虚説なのでございますので？」

「否、それは事實です。疊は上りますとも。貴僧、今にも動くかも分りません。」

「え、！ や、それは、」

と思はず、膝を迂らした手で、はたくと壓へると、爪も立ちさうにない上床の固い事。

「是が、動くでございますか。」

「ですから、取留めのない事ではありませんか。」
と静に云ふと、黙つて、やゝあつて瞬して、

「然やう、餘り取留めなくも無いやうでございます。すると、坐つて居るものは如何な儀に相成りませうか。」

「騒がないで、熟として居さへすれば、何事ありません。動くと申して、別に倒に立つて、裏返しになると云ふんぢやないのですから、」

「如何にも。まともにそれぢや、人間が縁の下へ投込まれる事になりますものな。」

「然うですとも。然うなつた日には、足の裏を膠で附着けて置かねばなりません。」

「何ともないから、お騒ぎなさるなと云つても、村の人が肯かないで、壘の此の合せ目が、」

と手を支いて、すつと掌を迂らしながら、

「はじめに、長い三角だの、小さな四角に、縁を開けて、きしきしと合つたり、ぐわらぐわと離れたり、然し、其の疾い事は、稲妻のやうに見えます。」

然うすると最う、わつと言つて、飛ぶやら匆ねるやら、やあ！ と踏張つて両方の握拳で押へつける者もあれば、いきなり三寶火箸でも火吹竹でも宙で振廻す人もある——まあ一人や二人は、屹と其だけで縁から飛出して遁げて行きます。」

二十三

「どたん、ばたん、豪い騒ぎ。其の立騒ぐのに連れて、むくくむくく、と壘を、貴僧、四隅から持上げますが、二隅づつ、どん、どん、順に十疊敷を一時に十ウ、下から握拳を突出すやうです。それ毛だらけだ、わあ女の腕だなんて言ひますが、何、其の壘の隅が裏返るやうに目まぐるしく翻るんです。」

最う然うなると、氣の上つた各自が、自分の手足で、茶碗を蹴飛ばす、徳利を踏倒す、海嘯だ、と喚きませう。

其の立廻りで、何かの拍子にや怪我もします、踏切つたくらるでも、ものがものですから、片足切られたほどに思つて、其がために寝ついたのもあるんださうで。漁師だとか言ひましたつけ。一人、わざく山越えで濱の方から来たんだつて、怪物に負けない禁厭だ、と鱧の針を顛鐵がはりに、手拭に疊込んで、うしろ顛巻なんぞして、非常な勢だつたんですが、猪口の缺の踏抜きで、痛が甚い、お祟だ、と人に負さつて歸りました。

其の立廻りですもの。灯が危いから傍へ退いて、私は其の毎に洋燈を壓へ壓へしたんですがね。坐つてる人が、眞個に轉覆るほど、根太から揺れるのでない證據には、私が氣を着けて居ます

洋燈は、躍りはためく其の疊の上でも、靜として、些とも動きはせんのです。

然し又洋燈ばかりが、笠から始めて、ぐる／＼と廻つた事がありました。やがて貴僧、風車のやうに舞ふ、其の癖、場所は變らないので、あれ／＼と云ふ内に火が眞丸になる、と見て居る内、白くなつて、其に蒼味がさして、茫として、熱と据る、其の厭な光つたら。

映る手なんざ、水へ突込んでるやうに、畝つた此の筋までが蒼白く透過つて、各自の顔は、皆其の熟した眞桑瓜に目鼻がついたやうに黄色く成つたのを、見合せて、呼吸を詰める、とふはふはと浮いて出て、其の晩の座がしらと云ふ、一番強がつた男の膝へ、ふツと乗つたことがあるんですね。

わツと云ふから、騒いぢや怪我をしますよ、と私が暗い中で聲を掛けたのに、猫化だ遣つけろ、と誰だか一人、庭へ飛出して遁げながら喚いた者がある。畜生、と怒鳴つて、貴僧、危いの何のぢやない！

燈と明くなつて舊の通洋燈が見えると、其の膝に乗られた男が——こりや何です、可い加減な年配でした——嘗て水兵をした事があるとか云つて、豫て用意をしたものらしい、ドギ／＼する小刀を、火屋の中から縦に突刺してゐるぢやありませんか。」

「大變で、はあ、はあ、」

「ト思ふと一呼吸に、油壺をかけて突壞したもんだから、流れるやうな石油で、どうも、後二日ばかり弱りました。」

爾時は幸に、當人、手に疵をつけただけ、勢で壞したから、火は其なり、ばつたり消えて、何の事もありませんでした。が、もしやの時と、皆が心掛けて置きました、蠟燭を點けて、跡始末に掛ると、さあ、可訝いのは、今の、怪我で取落した小刀が影も見えないではありませんか。

驚きました。是にや、皆が貴僧、茶釜の中へ紛れ込んで崇るとか俗に言ふ、あの蜥蜴の尻尾の切れたのが、行方知れずに成つたより餘程厭な紛失もの。襟へ入つて居はしないか、むす／＼するの、禪へさ、つちや居らんか、ひやりとするの、袂か、裾か、と立つ、坐る、帯を解きます。

前にも一度、大掃除の検査に、階子をさして天井へ上つた、警官さんの洋劍が、何かの拍子に倒になつて、鏢元が緩んで居たか、すつと拔出したために、下に居たものが一人、切られた事がある座敷ださうで。

外のものとは違ふ。切物は危い、よく探さつしやい、針を使つてさへ始める時と了ふ時には、丁と敷を合はせるものだ。それでもよく紛失するが、疊の目にこぼれた針は、奈落へ落ちて地獄の山の草に生える。で、餓鬼が突刺される。其の供養のために、毎年六月の一日は、氷室の朔日と云つて、少い娘が娘同士、自分で小鍋立ての飯ごとをして、客にも呼ばれ、呼びもしたものに、

あのギラ／＼した小刀が、縁の下か、天井か、承塵の途中か、在所が知れぬ、とあつては濟まぬ。是だけは夜一夜さがせ、と中に居た、酒のみの年寄が苦り切つたので、總立ちになりました。これは、私だつて氣味が悪かつたんです。」
僧は唯目で應へ、目で頷く。

二十四

「洋燈の火でさへ、大概度膽を抜かれたのが、頼みに思つた豪傑は負傷するし、今の話で又變な氣になる時分が、夜も深々と更けたでせう。」

どんな事で、何處から抛り投げまいものでもない。何か、對手の方も斟酌をするか、其とも誰も殺すほどの罪もないか、命に別條は先づ無からうが、怪我は今までも随分ある。

さあ、捜す、と成ると、五人の天窓へ燭臺が一ツです。蠟の繼ぎ足しはあるにして、一時に燃すと翌方までの便がないので、手分けをするわけには行きません。

最う然うなりますとね、一人ぢや先へ立つのも厭がりますから、其處で私が案内する、と背後からぞろ／＼。其の晩は、鶴谷の檀那寺の納所だ、と云ふ悟つた禪坊さんが一人。變化出でよ、一喝で、と云ふ宵の内の意氣組で居たんです。些とお差合ひですな、」

「否、宗旨違ひでございます、」
と吃驚したやうに莞爾する。

「坊さんまじり其の人数で。此が向うの曲角から、突當りのはかりへ、廻縁になつて居ます。ぐるりと其の兩側、兩戸を開けて、沓脱のまはり、縁の下を覗いて、念のため引返して、又便所の中まで探したが、光るものは火屋の缺も落ちては居ません。」

ぢやあ次の室を……」

と振返つて、其の大なる襖を指した。

「と皆が云ふから、私は留めました。」

此處を借りて、一室だけでも廣過ぎるから、來てから未だ一度も次の室は覗いて見ない。恚う云ふ時開けては不可ません。廊下から、廁までは、宵から通つた人もある。轉倒して居る最中、どんな拍子で我知らず持つて立つて、落ちて來ないとも限らんから、念のため捜したものの、誰も開けない次の室へ行つてゐるやうでは、何かが秘したんだらうから、よし有つたに於て、先方に若し其氣があれば、怪我もさせよう、傷もつけよう。さて無い、となると、矢張り氣が濟まんの同一道理。押入も覗け、棚も見ろ、天井も捜せ、根太板をはがせ、と成つては、何十人か、つた處で、とても此の構へうち隅々まで隈なく見盡される譯のものではない。人足の通つた、

ありさうな處だけで切上げたが可いでせう——

其も然うか、愈々魔隠しに隠したのなら、山だか川だか、知れたものではない。

まあ、人間業で叶はん事に、断念めは着きましたか、危険な事には變りはないので。何時切尖が降つて来ようも知れませんが、些とても楯になるものと、皆が同一心です。言合はせたやうに順々に……前へ御免を被りますつもりで、私が釣つて置いた蚊帳へ、總勢六人で、小さくなつて屈みました。

變におしおきでも待つてるやうで尙不氣味でした。然うか、と云つて、夜夜中、外へ遁出すこととは思ひも寄らず、で、がた／＼震へる、突伏す、一人で寝てしまつたのがあります、是が一番可いのです。坊様は口の裏で、頻にぶつ／＼と念じて居ます。

其舌の縫れたやうな、便のない聲を、蚊の唸る中に聞きながら、私がつ／＼しかけた時でした。密と一人が揺ぶり起して、

(聞えますか、)

と言ひます。

(ココだ、ココだ、と云ふ聲が)と、耳へ口をつけて囁くんです。其から、其へ段々、又耳移しに。

(失物はココにある、と云ふお知らせだらう、)

(如何か)と言ふ、ひそ／＼相談。

耳を澄ますと、蚊帳越の障子のやうでもあり、廊下の雨戸のやうでもあり、次の間と隔ての襖際……又柱の根かとも思はれて、カタカタ、カタカタと響く——あの茶立蟲とも聞えれば、壁の中で蝙蝠が鳴くやうでもあるし、縁の下で、蟻が、コトコトと云ふとも考へられる。其が貴僧、氣の持ちやうで、ココ、ココ、ココヨとも、ココト、とも云ふやうなんです。

自分のだけに、手を纏帯した水兵の方が、一番に蚊帳を出しました。

返す氣で、在所をおつしやるからは仔細はない、と坊さんが又這出して、疊に擦附けるやうに、耳を澄ます。と水兵の方は、真中で耳を傾けて、腕組をして立つてなすつたつけ。見當がついたと見えて、目で知らせ合つて、上下で頷いて、其の、貴僧の背後になつてます、

「え！」

と肩越に淵を差覗くが如く、座をずらして見返りながら、

「成程。」

「北へ四枚目の隅の障子を開けますとね。溝へ柄を、其の柱へ、切尖を立掛けてあつたらうではありませんか。」

「其ッ切、危うございますから、刃物は一切厳禁にしたんです。

遊びに来て下さるも可し、夜伽とおつしやるも難有し、序に狐狸の類なら、退治しようも至極御尤だけれども、刀、小刀、出刃庖丁、刃物と言はず、槍、鐵砲、——凡そ然う云ふものは断りました。

私も長い旅行です。随分どんな處でも歩行き廻ります考へで。いざ、と言や、投出して手を支くまでも、短刀を一口持つて居ます——母の記念で、峠を越えます日の暮なんぞ、随分其がために氣丈夫なんですが、謹のために桐油に包んで、風呂敷の結び目へ、緊乎封をつけて置くのです

「矢張、おのづから、其の、拔出でございますか。」

「否、是には別條ありません。盗人でも封印のついたものは切らと言ひます。尤も、怪物退治に持つて見えます刃物だつて、自分で抜かなければ別條はないやうに思はれますね。其に貴僧、騷動の起居に、一番氣がかりなのは洋燈ですから、宰八爺さんに然う云つて、恚うやつて行燈に取替へました。」

「で、行燈は何事も、」

「是だつて上ります。」

「あの上りますか。宙へ？」

時に、明の、行燈の其の皿あたりへ、仕切つて、うつむけに伏せた手が白かつた。

「すう、と恚う、疊を離れて、」

「は、あ、」

とばかり、僧は明の手のかげで、燈が暗くなりはしないか、と危んだ目色である。

「其も手をかけて、壓へたり、据ゑようとしますと、其のはずみに、油をこぼしたり、臺ごとひつくりかへしたりします。障らないで、熟と柔順くしてさへ居れば、元の通りに据直つて、夜が明けます。一度なんざ行燈が天井へ附着きました。」

「天……井へ、」

「下に蚊帳が釣つてありますから、私も存じながら、寝て居たのを慌てて起上つて、蚊帳越にふらふら釣り下つた、行燈の臺を押へようと、うつかり手をかけると、誰か取つて引上げるやうに鴨居を越して天井裏へするりと入ると、裏へ丁と乗つかりました。最う堆い、鼠の塚か、と思ふ煤のかたまりも見えれば、遙に屋根裏へ組上げた、柱の形も見える。」

可訝いな、屋根裏が見えるくらゐぢや、天井の板が何處か外れた筈だが、と不圖氣がつくと、

棧が弛んでさへ居りますまい。

板を抜けたものか知らん、餘り變だ、と貴僧。

茲で心が定まりますと、何の事もない。行燈は蚊帳の外、宵から置いた處に丁とあつて、薄ぼんやり紙が白けたのは、最う雨戸の外が明方であつたんです。

「其の晩は、お一人で、」

「一人で、然も一昨晚。」

「一昨晚？」

と、思はず又ぎよつとする。

「で、何でございますか、其の夜伽連は、最う其以來懲りて來なくなつたんでございますかな。」

「お待ち下さい、トあの、西瓜で騒いだ夜は、たしか其の後でしたつけ。」

何、こりや詰らない事ですけれども、弱つたには弱りましたよ……
確か三人づれで、若い衆が見えました。矢張酒を御持參で。大分お支度があつたと見えて、するめの足を嚙りながら、冷酒を茶碗で煽るやうなんぢやありません。

竹の皮包みから、此の陽氣ちや魚の宵越しは出來ん、と云つて、焼蒲鉾なんか出して。

旨うございましたよ、私もお相伴しましたつけ、

と悠々と迫らぬ調子で、

「宵には何事もありませんでした。可い鹽梅な酔心地で、四方山の話しながら、蝨一ツ飛んぢや來ない。然う言や一體蚊も居らんが、大方其の怪物が餌食にするだらう。其にしちや吝な食物だ——何々、海の中でも親方となると却つて小さい物を餌にする。鯨を見る、しこ鰯だ、なぞと大口を利いて元氣でしたが、やがて酒はお積りになる、夜が更けたんです。

茲でお茶と云ふ處だけけど、茶ぢや理に落ちて魔物が憑け込む。酔醒にいゝもの、と縁側から轉がし出したのは西瓜です。聞くと、途中で畑盗人をして來たんださうで——それぢや却つて、憑込まうではありませんか。」

二十六

「手並を見ろ、狐でも狸でも、此の通りだ、と刃物の禁斷は承知ですから、小刀も持つちや居り

ません、拳固で、貴僧。

小相撲ぐらゐの恰幅のある、節くれだつた若い衆でしたが……」

宮迷草
場所が又悪かつた。——

「前夜、ココココ、と云つて小刀を出してくれたと同一處、敷居から掛けて柱へ其の西瓜を極めて置いて、大上段です。」

ポカリ遣つた。途端に何とも、凄まじい、石油罐が二三十打つかつたやうな音が臺所の方で聞えたんです。

唐突ですから、宵に手ぐすねを引いた連中も、はあ、と引呼吸に魂を引攫れた拍子に——飛びました。其の貴僧、西瓜が、ストーンと若い衆の胸へ刃上つたでせう。

仰向に引くりかへると、又騒動。

それ、肩を越した、え、足へ乗つかる。わあ、！ 裾へ纏はる、火の玉ぢや。座頭の天窓よ、入道首よ、いや女の生首だつて、可い加減な事ばかり。夕顔の花なら知らず、西瓜が何、女の顔に見えるもんです。

追掛けるのか、逃廻るのか、どたばた跳飛ぶ内、ドンドンドンドンと天井を下から土へ打抜くと、ぐわらぐわと棟木が外れる、戸障子が鳴響く、地震だ、と突伏したが、其なり寂として、静になつて、風の音もしなくなりました。

ト屋根に生えた草の、葉と葉が入交つて見え透くばかりに、月が一ツ出て居ます。——今の西瓜が光るのでした。

森は押被さつて居りますし、行燈は固より其の立廻りで打倒れた。何か私どもは深い狭い谷底に居窘まつて、千仞の崖の上に月が落ちたのを視めるやうです。然う言へば、樺の枝に這ひか、つて、慫う、月の上へ蛇のやうに垂か、つたのが、蕙の葉か、と思ふと、屋根一面に瓜畑になつて、鳴子繩が引いてあるやうな氣もします。

した、かな、天狗め、とのぼせ上つて、宵に蚊いぶしに遣つた、杉葉の燃残りを取つて、一人、其の月へ投げつけたものがありました。

もろいの、何の、ぼろろと朽木のやうに其の満月が崩れると、葉末の露と一つに成つて、棟の勾配を迂り落ちて、消えたは可いが、ぼたりぼたりと雫が爲出した。頸と言はず、肩と言はず、降りか、つて來ましたが、手を當てる、とべとりとして粘る。嗅いで試ると、いや、貴僧、悪甘い匂と言つたら。

夜深しに汗ばんで、蒸々して、咽喉の乾いた處へ、其の匂ひ。血腥いより堪りかねて、縁側を開けて、私が一番に庭へ出ると、皆も跣足で飛下りた。

驚いたのは、最う夜が明けて居たことです。山の巔の方は蒼くなつて、麓へ霧が白んで居ました。

宮途草

不思議な處へ、思ひがけない景色を見て、和蘭陀へ流された、と云ふのがあるし、堪らない、

先づ行燈をつけ直せ、と怒鳴つたのが居る。

屋根の其邊だ、と思ふ、西瓜のあとには、烏が居て、コト／＼と嘴を鳴らし、短夜の明けた廣縁には、ぞろ／＼夥しい、褐色と黒いのと、松蟲鈴蟲のやうなのが、うよ／＼して、ざつと障子へ驅上つて消えましたが、西瓜の核が化つたんですつて。

連中は、ふら／＼と二日酔のやうな工合で、茫乎黒門を出て、川べりを歸りました。

橋の處で、枕にかゝつて、ぶか／＼浮いた眞蒼な西瓜を見て、それから夢中で、遁げたさうです。

晝過ぎに、宰八が来て、其の話。

私は其時分までぐつすり寝ました。

此の時をかしかったのは、爺さんが、目覺しに茶を一つ入れて遣るべいつて、小まめに世話をして、住い色に煮花が出来ましたが、生憎西瓜も盗んで来ない。何かないか、と考へて、有る一臺所に糖味噌が、こりや私に、と云つて一々運ぶも面倒だから、と手の着いたのぢやあるが、桶ごと持つて来て、時々爺さんが何かを突込んで置いてくれるんですした。

一人だから食べ切れないで、直きつき過ぎる、と云つて、世話もなし、茄子を薺ごと生のもので漬けてありました。可い漬り加減だらう、と其に氣が着いて、臺所へ出ましたつけ。

(お客様あ、)

(何だい。)

(昨夜凄じい音がしたと言はしつけね、何にも落こちたものはねえね。)

つて言ひながら、やがて小鉢へ、丸ごと五つばかり出して来ました。

薄お納戸の好い色で。

二十七

「青葉の影の射す處、白瀬戸の小鉢も結構な青磁の菓子器に装つたやうで、志の美しさ。

箸を取ると、其の重つた茄子が、あの、薄皮の腹のあたりで、グツ、グツ。

一ツ音を出すと、又一つグツ、最う一つのもググ、ググと聲を立てるんですものね。

變な顔をして、宰八が、

(お客様、聞えるかね。)

(あゝ鳴くとも。)

(ちんぢちやうやうだ、此奴。)

と爺様が鈍豆のやうな指の尖で、一寸押すと、其の壓されたのがグググ、手をかへると又他の

がググ。

心あつて鳴くやうで、何だか上になつた、あの帯の取手まで、小さな角らしく押立つたんです。又飛出さない内に、と思つて、私は一ツ嚙つたですよ。」

「召食つたか。」

と、僧は怪訝顔で、

「それは、お豪い。」

「何聞く方の耳が鳴るんでせうから、何事もありません、茄子の鳴くわけは無いのですから。」

其でも爺さんは苦切つて、少い時にや、随分悪物食したもので、葬ひ料で酒エ買つて、犬の

死骸なら今でも食ふが、茄子の鳴くのは厭だ、と言ひます。

尤も變なことは變ですが、同じ氣味の悪い中でも、對手が茄子だけに、こりやをかしくつて可

かつたですよ。」

「茄子ならば、でございませうが、ものは茄子でも、對手は別にございませう。」

明は俯向いて莞爾した、別に意味のない笑だつた。

「で、そりや晝間の事でございませうな。」

「昨日の午後でした。」

「晝間からは容易でない。」

と半ば呟くが如くに云つて、

「では、昨夜あたりは嘸……」

と聞く方が眉を擧める。

「え、酷うございました、何うせ、夜が寝られはしないんですから、」

「それでお寢れなさるのぢや、貴下、お顔の色が飛だ悪い!……」

茶店の婆さんが申したも、其の事でございませう。

唯今お話を伺ひました。そんなこんなで村の者も行かなくなり、爺様も夜は恐がつて参りませ

んから、貴下の御容子が分らないに因つて、家つきの佛を回向かた、お見舞申してはくれま

いか、と云ふに就いて、推参したのでございませうが、いや、何とも驚きました。

いづれ御厄介に相成らねばなりません、私もどうか唯今の其の茄子の鳴くぐらるな處で、御

容赦が願ひたい。

何處と云つて三界宿なし、一泊御報謝に預る氣で参つたわけで。なか／＼家つきの幽霊、祟、

物怪を濟度しようなどと云ふ道徳思ひも寄らず。實は入道名さへ持ちませぬ。手前勝手、申譯の

ないお詫びに刺つたやうな坊主。念佛さへ碌に眞心からは唱へられんでございまして、御祈禱僧

などと思はれましては、第一、貴下の前へもお恥かしうございますが、如何でございませう。お宿を願ひましても差支へはないでございませうか。いくらか覺悟はして参りましたが、目のあたりお話を伺ひましては、些と二の足でございませうか。」

「一人でも客がありますと、其だけ鶴谷では喜びますさうです。持主の本宅が喜びますものを、誰に御遠慮が入りますものですか。私もお連があつて、どんなに嬉しいか知れませんが。」

「そりや、鶴谷殿はじめ、貴下の思召しは然やうに難有うございまして、別に其の……え、先づ、持主が鶴谷としますと、此の空屋敷の御支配でございませう、——其の何とも異様な、あの、其の、」

「それは私も御同然です。人の住むのが氣に入らないので荒れるのだらうと思ひますが。」

其處なんです、貴僧。逆ひさへしませんければ、疊も行燈も何事もないのですもの。戸障子に不意に火が附いて其處いらめら、燃えあがる事がありましたも、慌てて消す處は破れ、水を掛けた處は濡れますが、其なりの處は、後で見ますと濡れた様子もないのですから。

座敷だつて幾干もあります、貴僧、と不圖心づいたやうに、

「御一所でお煩ければ、隣のお座敷へ入らつしやい。何か正體を見届けようなどと云つては不可

ませんが、鶴谷が許したお客僧が、何も御遠慮には及びませぬ。

但すらりと開かないで、何かが壓へてでも居るやうでしたら、お見合せなさいまし。逆ふと悪いんですから。」

二十八

「なか、逆らひます處ではございません、座敷好みなんぞして可いものでございますか。」

あの襖を振向いて熟と視ろ、とおつしやつたつて、容易にや其方も向けません次第で、御覽の通り、早や固くなつて居ります。

お話につけて申しますが、實は手前も此の黒門を潜りました時は、草に支へて、しばらく足が出ませんでございました。

其と申すが、先づ庭口と思ふ處で、キリキリトーンと、餘程其の大轆轤の、芻釣瓶を汲上げますやうな音がいたす。

尤も曰くづきの邸ながら、貴下お一方は先づ兎も角もいらつしやる。人が住めば水も要らうで、何も釣瓶の音が不思議と云ふでは、道理上、是や無いのでありまするが、婆さんに聞きました心積り、學生の方が自炊をしてお在と云へば、土瓶か徳利に汲んで事は足りる、と何となく思つて

でも居りました所爲か、其の何うも水を汲む音が、馴れた女中衆でありさうに思はれました。唯臺所の方を、何うやら婀娜とした、脊の高い御婦人が、黄昏に忙しい裾捌きで通られたやうな、ものの氣勢もございませう。

何となく賑かな様子が、七輪に、晩のお茶でもふつ／＼煮えて居ようと云ふ、豆腐屋さ——ん、と町方ならば呼ぶ聲のしさうな様子で。

扱は婆さんに試されたか、と一旦は存じましたが、恚う笠を傾けて遠くから覗込みました、勝手口の戸からかけて、棟へ、高く烏瓜の一杯にからんだ工合が、何様、何ヶ月も閉切らしい。

ござつたかな、と思ひながら、擦つたいやうな御門内の草を、密と踏んで入りますと、春さきは嘸綺麗でございませう。一面に紫雲英が生えた、其の葉の中へ傳はつて、断々ながら、一條、蒼すんだ明るい色のものが、這つたやうに浮いたやうに落ちて居ます。上へさした森の枝を、月が漏る影に相違は無ささうなが、何となく婦人の黒髪、其の、丈長く、足許に光るやうで。

變に跨ぎ心地が悪うございませうから、避けて通らうといたしますと、右の薄光りの影の先を、ころ／＼と何か轉げる、忽ち顔が露れたやうでございましてつけ、熟く見ると、兎なんで。

處で其の蛇のやうな光る影も、向かはつて、又私の足の出途へ映りましたが、兎はくる／＼と寝轉びながら、草の上を見附けの式臺の方へ參る。

これが反對だと、舊の潛門へ押出されます處でございまして。強ひて入りますほどの度胸はないので。

式臺前で、私は先づ挨拶をいたしましたでございませう。

主もおはさば聞き召せ、恚くの通りの青道心。何を頼みに得脱成佛の回向いたさう。何を力に、退散の呪詛を申さう。御姿を見せたまはば偏に禮拜を仕る。世にかくれます神ならば、念佛の外

他言はいたさぬ。平に一夜、御住居の筵一枚を貸し給はれ……

——旅僧は爾時、南無佛と唱へながら、漣の如き杉の木目の式臺に立向ひ、恚く誓つて合掌して、やがて笠を脱いで一揖したのであつた。——

「それから、婆さんに聞きました通り、壞れ／＼の竹垣について手探りに木戸を押しますと、直ぐに開きましたから、頻に前刻の、あの、えへん！ えへん！ 咳をしながら——酷くなつて居りますな——芝生を傳はつて、夥しい白粉の花の中を、是へ。お縁側からお邪魔をいたしました。

あの白粉の花は見事です。ちら／＼紅色のが交つて、咲いて居ますが、それにさへ、貴方、法衣の袖の障るのは、と身體をすぼめて來ましたが、今も移香がして、憚多い。

もと花畑であつたのが荒れましたらうか。中に一本、見上げるやうな丈のびた山百合の白いのが、うつむいて咲いて居ました。いや、それにも又慄然としたほどでございませうから。

何事がございませうとも、自力を頼んで、何うの憊うの、と申すやうなことは夢にも考へては居りません。

しかし貴下は、唯今うけたまはりましたやうな可怖い只中に、能く御辛抱なさいます、實に大膽でおいでなさる。

「私くらの臆病なものはありません。……臆病で仕方がないから、成るがまかせに、抵抗しないで、自由になつて居るのです。」

「さあ、其處でございます。其を伺ひたいのが何より目的で参りましたが、何か、其の御研究でもなさりたい思召で。」

「どういたしまして、私の方が研究をされて居ても、此方で研究なんぞ思ひも寄らんのです。」

「それでは、外に、」

二十九

「え、望み——と申しますと、未だ我があります。實は願事があつて、こゝに憊うして、參籠、通夜をして居りますやうなものです。」

「其が貴僧、前刻お話をしかけました、あの手毬の事なんです。」

「あ、其の手毬が、最う一度御覽なさいたいので。」

「否、手毬の歌が聞きたいのです。」

と、うつとりと云つた目の涼しさ。月の夢を見るやうなれば、變つた望み、と疑ひの、胸に起る雲消えて、僧は一膝進めたのである。

「大空の雲を當てに何處となく、海があれば渡り、山があれば越し、里には宿つて、國々を歩行きますもの、詮ずる處、或意味の手毬唄を……」

「手毬唄を。……如何な次第でございます。」

「夢とも、現とも、幻とも……目に見えるやうで、口には謂へぬ——而して、優しい、懐しい、

あはれな、情のある、愛の籠つた、ふつくりした、然も、清く、涼しく、悚然とする、胸を搔撈

るやうな、あの、恍惚となるやうな、まあ例へて言へば、芳しい清らかな乳を含みながら、生れ

ない前に腹の中で、美しい母の胸を見るやうな心持の——唄なんですが、其の文句を忘れたので、

命にかけて、憧憬れて、それを聞きたいと思ひますんです。」

此の數分時の言の中に、小次郎法師は、生れて以來、聞いただけの、風と水と、鐘の音、樂、

あらゆる人の聲、蟲の音、木の葉の囁きまで、稻妻の如く胸の裡に繰返し、猶且つ覺えただけの

經文を、颯と金字紺泥に瞳に描いて試みたが、其かと思ふのは更に分らぬ。

「して、其の唄は、貴下お聞きに成つたことがございませうか。」
「小兒の時に、亡くなつた母親が唄ひましたことを、物心覺えた最後の記憶に留めただけで、何う云ふのか、其の文句を忘れたんです。」
年を取るに従うて、まるで貴僧、物語で見る切ない戀のやうに、其の聲、其の唄が聞きたくツてなりません。

東京の或學校を卒業ますのを待かねて、故郷へ歸つて、心當りの人に尋ねましたが、誰のを聞いても、どんなに尋ねても、其と思ふのが分らんのです。

第一、母親の姉ですが、私の學資の世話をしてくれます、叔母が其を知りません。
唯夢のやうに心着いたのは、同一町に三人あつた、同一年ごろの娘です。

(産んだ其子が男の兒なら、

京へ上ぼせて狂言させて、

寺へ上ぼせて手習させて、

寺の和尚が、

道樂和尚で、

高い縁から突落されて、

箒落し、

小枕落し、)

と、よく私を遊ばせながら、母も少かつた、其の娘たちと、毬も突き、追羽子もした事を現のやうに思出しましたから、其を捜せば、屹と誰か知つて居るだらう、と氣の着いた夜半には、むつくり起きて、嬉しさに雀躍をしたんですが、貴僧、其の中の一人は、未だ母の存命の内に、雛祭の夜なくなりました。それは私も知つて居る——

一人は行方が知れない、と言ひます……

漸と一人、これは、縣の學校の校長さんの處へ縁づいて居ると云ふ。先づ可し、と早速訪ねて参りましたが、町はづれの侍町、小流があつて板塀續きの、邸毎に、むかし植ゑた紅梅が澤山あります。未だ其の古樹がちらほら残つて、眞盛り、臘月夜の事でした。

今貴僧が此へ入らつしやる玄關前で、紫雲英の草を潛る兎を見たとおつしやいました、

「いや、肝心のお話の中へ、お交ぜ下すつては困ります。然うは見えましたもの、まさか恠やうな處へ。或は其の……猫であつたかも知れませんか。」

「背後が直ぐ山ですから、一寸々々見えますさうです、兎でせう。」

が、似た事のありますものです——其時は小狗でした。鈴がついて居りましたつけ。白垢の眞

白なのが、ころ／＼と仰向けに手をじやれながら足許を轉がつて行きます。夢のやうに其のあとへついて、やがて門札を見ると指した家で。

まさか奥様に、とも言へませんから、主人に逢つて、——意中を話しますと——
(夜中何事です。人を馬鹿にした。奥は病氣だからお目には懸れませんか。)
と云つて厭な顔をしました。夫人が評判の美人だけに、校長さんは大した嫉妬深いと云ふ事です。」

三十

「叔母がつく／＼意見をしました。(はじめから彼家へ行くと聞いたら遣るのぢやなかつた——黙つておいでだから何にも知らずに悪い事をしたよ。さきぢや幼馴染だと思ひます、手毬唄を聞くなぞ、と尙よくない、そんな事が世間へ通るかい)と慫うです。
母親の友達を尋ねるに、色氣の嫌疑はをかしい、と聞いて見ると、何、女の兒はませて居ます、其に紅い手絡で、美しく髪なぞ結つて、容づつて居るから可い姉さんだ、と幼心に思つたのが、二つ違ひ、一つ上、亡くなつたのが二つ上で、其の奥さんは一ツ上のださうで、行方の知れないのは、分らないさうでした。

事が面倒になりましたね、其の夫人の親里から、叔母の家へ使が来て、娘御は何も唄なんか御

存じないさうで、え、世間體がございますから以來は、と苦り切つて歸りました。

勿論病氣でも何でもなかつたさうです。

一月ばかり経つて、細かに、いろ／＼手毬唄、子守唄、童唄なんぞ、百幾つと云ふもの、綺麗に美しく、細々とかいた、文が來ました。

しまひへ、紅で、

——嫁入りの果敢なさを唄ひしが唄の中にも澤山におはしまし候——

と、だけ記してありました。……

唯今も大切にして持つては居ますが、勿論、其の中に、私の望みの、母の聲のはありません。

さあ、最う一人……行方の知れない方ですが……

又是が貴僧、家を越したとか、遠國へ行つたとか云ふのなら、幾干か手懸りもあるし、何の不思議もないのですが、俗に申します、神がくしに逢つたんで、叔母はじめ固く然う信じて居ります。

名は菖蒲と言ひました。

一體其の娘の家は、母娘二人、どつちの乳母か、媼さんが一人、と母子だけのしもた屋で、しかし立派な住居でした。其の母親と云ふのは、私は小兒心に、唯齒を染めて居たのと、鼻筋の通つた、恚う面長な、而して帯の結目を長く、下襲か、蹴出しか、褌をぞろりと着崩して、日の暮

方には、時々薄暗い門に立つて、町から見えます、山の方を視ては悄然一人で居ただけ幽かに
覺えて居るんですが、人の妾だとも云ふし、本妻だとも云ふ、何處かの藩侯の落胤だとも云つて、
些とも素性が分りません。

娘は、別に異つたこともありませんが、容色は三人の中で一番佳かつた——然う思ふと、今で
も目前に見えますが。

其の娘です、餘所へは遊びに來ましたけれど、誰も友達を、自分の内へ連れて行つた事はあり
ませんでした。

寄合つて、遊事を。是からおもしろく成らうと云ふ時、不意に母さんがお呼びだ、と其姫さん
が出て來て引張つて歸ることが度々で、急に居なくなる、跡の寂しさと云つたらありません。—
—先の内は、自分でも厭々引立てられるやうにして歸り／＼したものです、一ツは人の許へ自
分は來て、我が家へ誰も呼ばない、と云ふ遠慮か、妙な時に不圖立つちや、獨で歸つて了ふこと
がいくらかあつたんです。

ですから何だか其の娘ばかりは、思ふやうに遊べない、勝手に誘はれない、自由にはならない
處から、遠いが花の香とか云ひます。餘計に私なんざ懐くつて、(昔ちやんお遊びな)が言へない
から、合圖の石をがち／＼叩いては、其の家の前を通つたもんでした。

其が一晩、眞夜中に、十疊の座敷を閉め切つたまゝで、何處へか姿をかくしたさうで。
丑年の事だから、と私が唄を聞きたさに、尋ねた時分……今から何年前だらう、と叔母が指を
折りましたつけ……多年になりますか。」

三十一

「故郷では、未婚の女が、丑年の丑の日に、衣を清め、身を清め……」

唾をのんで聞いた客僧が、

「成程、」

と腕組みして、

「精進潔齋、」

「そんな大した、」

と言消したが、又打領き、

「何うせ娘の子のする事です。然うまでも行きますまいが、髪を洗つて、湯に入つて、而して其
の洗髪を櫛卷きに結んで、笄なしに、紅ばかり薄くつけるのださうです。

それから、十疊敷を閉込んで、床の間をうしろに、何處か、壁へ向いて、其處へ婦の魂を据

ゑる、鏡です。

丑童子、斑の御神、と一心に念じて、傍目も觸らないで、瞻めて居ると、其の丑の年丑の月丑の日の……丑時になると、其の鏡に……前世から定まつた縁の人の姿が見える、と云ふ傳説があります。

娘は、誰も勝手を知らない、其の家で、其の丑待を獨りして、何かに誘はれてふらふらと出たんですつて。……其切になつて居るんですもの。

手のつけやうがありません。

愈となると、尙ほ聞きたい、それさへ聞いたら、亡くなつた母親の顔も見えよう、とあせり出して、山寺にありました、母の墓を揺ぶつて、記の松に耳をあてて聞きました、松風の聲ばかり。

其の山寺の森をくゞつて、里に落ちます清水の、麓に玉散る石を嚙んで、此の齒音せよ、此の舌歌へ、と念じて、戦くばかりで聲が出ない。

うはの空で居た所爲か、一日、山路で怪我をして、足を挫いて寝ることになりました。雑とこれがために、半月悩んで、漸々杖を突いて散歩が出来るやうになりますと、籠を出た鳥のやうに、町を、山の方へ、ひよいくと杖で飛んで、いや不恰好な蛙です——兩側は家續きで、丁ど大崩壊の、あの街道を見るやうに、なぞへに前途へ高くなる——突當りが撞木形になつて、其處が又

通街なんです。私が貴僧、自分の町をやがて其の九分ぐらゐな處まで参つた時に、向うの縦通りを、向つて左の方から来て、此方へ曲りさうにしたが、白地の浴衣を着て其處に立つた私の姿を見ると、フト立停つた美人があります。

扮装などは氣がつかず、洋傘は持つて居たやうでしたつけ、それを翳して居たか、疊んだのを支いて居たか、判然しないが、あゝ似たやうな、と思つたのは、其の行方が分らんと云ふ一人。

唯むかうでも莞爾しました……

其處へ笠を深くかぶつた、草鞋穿きの、獵人體の大漢が、鐵砲の銃先へ淺葱の小旗を結へつてたのを肩にして、鐵の鎖をづらりと曳いたのに、大熊を一回、のさくと曳いて出ました。

山を上に見て、正的に町と町が附つた三辻の、其の附根の處を、横に切つて、左角の土藏の前から、右の角が、菓子屋の、其の葦簀の張出まで、僅か二間ばかりの間を通つたんですから、のさりと行くのも、ほんの頃刻。

熊の背が、イんだ婦人の乳のあたりへ、黒雲のやうにかゝると、其につれて、一所に横向きになつて歩行きました。あとへぞろぞろ大勢小兒が……國では珍らしい獸だからでせう。

右の方へかくれたから、角へ出て見ようと、急足に出よう、とすると、馴れない跛ですから、腕へ臺についた杖を忘れて、躓いて、のめつたので、生爪をはがしたのです。

少時立てませんでした。

彼是して、出て見ると、最う何處へ行つたか影も形もない。

其後、旅行をして諸國を歩行くのに、越前の木の芽峠の麓で見かけた、炭を背負つた女だの、碓氷を越す時汽車の窓からちらりと見ました、隧道を出て、衝と隧道に入る間の茶店に、うしろ向きの女だの、都では矢のやうに行過ぎる馬車の中などに、それか、と思ふのは幾度も見かけたんですが……其の熊の時のほど、印象のよく明瞭に今まで残つてゐるのは無いのです。

内へ歸つて、

(美しき君の姿は、

熊に取られた。

町の角で、町の角で——

跛ひきく追へど及ばぬ。)

もしや手毬唄の中に、怨う云ふのは無かつたでせうか、と叔母に其の話をすると、眞日中に那樣ものを視て、那樣ことを云ふ貴下は、身體が弱いのです。當分外へ出てはなりません、と外出禁制。

以前は、其の形で、正真正銘の熊の膽、と海を渡つて賣りに來たものがあるさうだけれど、今

時はつひぞ見懸けぬ、と後での話……」

三十二

「日が経つてから、叔母が私の枕許で、然までに思詰めたものなら、保養かたく、思ふ處へ旅行して、其の唄を誰かに聞け。

(妹の聲は私も聞きたい。)

と、手函の金子を授けました。今以つて叔母が買いでくれるんです。

國を出て、足かけ五年!

津々浦々、都、村、里、何處を聞いても、あこがれる唄はない。似たのはあつても、其後か、其の前か、中途か、或は其の空間か、何處かに望みの聲がありさうだな……と思ふばかり。また小兒たちも、手毬が下手になつたので、終まで突き得ないから、自然長いのは半分ほどで消えて居ます。

宮迷草
迎も尋常ではいかん、と思つて、最う唯、其の一人行方の知れない、稚ともだちばかり、矢も楯も堪らず逢ひたくなつて來たんですが、魔にとられたと言ふんですもの。高峰へかゝる雲を見ては、鳶をたよりに縋りたし、湖を渡る霧を見ては、落葉に乗つても、追ひつきたい。巖穴の底

も極めたければ、瀧の裏も覗きたし、何か前世の因縁で、めぐり逢ふ事もあらうか、と奥山の庚申塚に一人立つて、二十六夜の月の出を待った事さへあるんです。

唯此の間——名も嬉しい常夏の咲いた霞川と云ふ秋谷の小川で、綺麗な手毬を拾ひました。宰八に聞いた、あの、嘉吉とか云ふ男に、緑色の珠を興へて、月明の村雨の中を山路へか、つ

(此處は何處の細道ぢや、細道ぢや。

天神様の細道ぢや、細道ぢや。)

と童謡を口吟んで通つたと云ふだけで、早や其の聲が聞えるやうで、僧は魅入られた如くに見えたが、溜息を嚙と吐き、

「先づおめでたい、では其の唄が知れましたか。」

「どうして唄は知れませんが、聲だけは、何うやら其の人……否……其のものであるらしい。此の手毬を弄ぶのは、確に其の婦人であらう。其の婦人は何となく、此の空邸に姿が見えるやうに思はれます。……寧ろ私は然う信じて居ます。」

爺さんに強請つて、此處を一室借りましたが、借りた日に最う其の手毬を取返され——私は取返されたと思ふんですね——美しく氣高い、其の婦人の心では、私のやうなものに拾はせるのは無かつたでせう。

或は是を、小川の裾の秋谷明神へ届けるのであつたかも知らない。然うすると、名所だ、と云ふ、浦の、あの、子産石をこぼれる石は、以來手毬の糸が染まつて、五彩燦爛として迸る。此の色が、紫に、緑に、紺青に、藍碧に波を射て、太平洋へ月夜の虹を敷いたのであらうも計られませんが、

と又恍惚となつたが、頸を垂れて、

「其の祟、其の罪です。此の凡ての怪異は。——自分の慾のために、自分の戀のために、途中で其の手毬を拾つた罰だらう、と思ふ、思ふんです。」

祟らば祟れ！ 飽くまでも初一念を貫いて、其の唄を聞かねば置かない。

心の迷か知れませんが。目のあたり見ます、怪しさも、凄さも、もしや、其が望みの唄を、何人かが暗示するのであらうも知れん、と思つて、恚う其の口ずさんで見ると——行燈が宙へ浮きませう。

(美しき君の姿は、

萌黄の蚊帳を、

蚊帳のまはりを、姿はなしに、

通る行燈の俵や。……

勿論、こんなものではありません。又は、

美しき君の庵は、

前の畑に影さして、

棟の草も露に濡れつゝ、

月の桂が茅屋にかゝる。……

些とも似ては居らんです。屋根で鵝鳥が鳴く時は、波に攫はれるのであらうと思ひ、板戸に

馬の影がせば、修羅道に墮ちるか、と驚きながらも、

(屋根で鵝鳥の鳴き叫ぶ、

板戸に駒の影がさす。)

と、現にも、絶えず耳に聞きますけれど、其だと心は領きません。

如何なる事も堪忍んで、何うぞ其の唄を聞きたい、と恚うして參籠をして居るんですが、祟な

らばよし罪は厭はん、

と激しく言ひつゝ、心づいて、悄然として僧を見た。

「但其の、手毬を取返したのは、唄は教へない、と云ふ宣告ぢやあなからうか、と然う思ふと情

ない。

あゝ、お話が八岐に成つて、手毬は……然うです、天井から猫が落ちます以前、私が縁側へ一

人で坐つて居ます處へ、あの白粉の花の蔭から、芋蕨の葉を顔に當てた小兒が三人、ちよろゝ

と出て来て、不思議さうに私を見ながら、犬ころがなつくやうに傍へ寄ると、縁側から覗込んで、

手毬を見つけて、三人でうなづき合つて、

(其をおくれ。)と言ひます。

(お前たちのか。)

と聞くと、頭を掉るから、

(ぢや、小父さんのだ。)と言ふと、男が毬を、と云ふ調子に、

(わはゝ)と笑つて、それなりに、ちらゝと何處かへ取つて行つたんでした。――

三十三

「何、私かうはさして居させえた處だつて……はあ、お前様二人でかね。」

どっこいしよ、と立つたまゝ、廣縁が高いから、背負つて来た風呂敷包は、腰ぎりに丁ど乗る。
「だら、可いけんども、
と結目を解下ろして、

「天井裏でうはさべいされちや堪んねえだ。」

と聲を密めたが、宰八は直ぐ高調子、

「いんね、私一人ぢやござりませぬえ。喜十郎様が許の仁右衛門の苦蟲と、學校の先生ちゆが、
同士にはい、門前まで來つてえがの。」

あの、樹の下、暗え中へ頭突込んだと思はつせえまし、お前様、苦蟲の親仁が年效もねえ、
新造子が抱着かれたやうに、キヤアと云ふだ。」

「何うしたんです。」

「何か又、」

と、僧も夜具包の上から伸上つて顔を出した。

宰八紅顔巻をかなぐつて、

「こりや、はい、御坊様御免なせえまし。御本家からも宜しくでござりやす。いづれ喜十郎様お
目に懸りますだが、まづ緩りと休まつしやりましとよ。」

私恠う云ふぞんざいもんだで、お辭儀の仕様もねえ。婆様がよつくハイ御挨拶しろと云うてね、
お前様旨がらしつけえ、團子をこつつけて寄越しやした。茶受にさつしやりやし。あとで私が蚊
いぶしを才覺しながら、ぶつゝ澁茶を煮立てますべい。

其よりか、お前様、腹アすかつしやつたらうと思ふで、御本家から又重詰めにして寄越さしつ
た、其奴をぶら下げながら苦蟲が、右のお前様、キヤアでけつかる。

門外の草原を、まるで川の瀬さ渡るやうに、三人がふらゝよちゝ、モノ小半時かゝつたが、
藝もねえ、えら遅くなつて濟んましねえ。」

「何とも御苦勞、」

と僧は慇懃に頭をさげる。

「其の人たちは、何うしたのかね。」

と明が尋ねた。

「はい、其さ、其のキヤアだから、お前様、どうした仁右衛門と、云ふと、苦蟲が、面さ澁くし
て、(あゝ、厭なものを見た。おらが鼻の尖を、ひいらゝ、あの生白けた芋の葉の長面が、ニタ
ニタ笑えながら横に飛んだ。精靈棚の瓢箪が、ひとりでにぼたりと落ちて、御先祖の戒とは思
はねえで、酒を留めねえ己だけど、それにや蔓が枯れたちゆう道理がある。風もねえに芋の葉

が宙を歩行くわけはねえ。あゝ、厭だ、總毛立つ、内へ歸つて夜具を被つて、づっしり汗でも取らねえでは、煩ひさうに頭も重い。と縮むだね。

例の小兒が驅出したらう、と然う言ふと、尙悪い。あの聲を聞くと堪らねえ。あれ、あれ、石を鳴らすのが、谷戸に響く。時刻も七ツぢや、と蒼くなつて、風呂敷包打置いて、ひよろ／＼歸るだ。

先生様、ではお前様、其の重箱を提げてくれさせえ、と私が頼むとね。

(厭だ)と云つけい。

(はてね、何故でがす。)

此處さ、お客様の前だけんど、氣にかけて下せえますなよ。

(軍歌でもやるならまだの事、子守や手毬唄なんかひねくる様な奴の、辨當持つて堪るものか)と吐くでねえか。

奴は朋友に聞いた、と云ふだが、いづれ怪物退治に來た連中からだんべい。

お客様何でがすか、お前様、子守唄拵へさつしやるかね。袋戸棚の障子へ、書いたもの貼つ置かつしやるのは、もの、其かね。

明は恥ぢたる色があつた。

「こしらへるのぢやない、聞いたのを書き留めて置くんです。數があつて忘れるから、」

「はあ、私は又、こんな恐怖え處に落着いて居さつしやるお前様だ。

怨敵退散の貼御符かと思つたが。

何か、ハイ、わけは分んねえがね、悪く言つたのがグツと癩に障つたで、

(なら可うがす、客人のものは持つて貰えますめえ、が、お前様、學校の先生様だ。可し、私あ

ハイ、何も教へちや貰はねえだで、師匠ぢやねえ、同士に歩行くだら朋達だつぺい。蟹の宰八が手ンぼうの助力させえ。)

と極めつけたさ。

帽子の下で目を据ゑたよ。

(貴様のやうな友達持たん、失敬な)と云つて引返したわ。何か託け、根は臆病で遁げただよ。見さつせえ、韋駄天のやうに木の下を驅出して、川べりの遠くへ行く仁右衛門親仁を、

(お、い、お、い、)

と茶番の定九郎を極めやあがる。」

其夜に限つて何事もなく、靜かに。……寝ようと云ふ時、初夜過ぎた。

宰八が手燭に送られて、廣縁を折曲つて、遙かに廻廊を通つた僧は、雨戸の並木を越えたやうで、故郷には蚊帳を釣つて、一人寂しく友が待つ思がある。

「此處かい。」

「其を左へ開けさつせえまし、入口の板敷から二ツ目のが、男が立つて遣るのでがす。行抜けに北の縁側へも出られませう、お前様歸りがけに取違へてはなんねえだよ。

二三年此方、向うへは誰も通抜けた事がねえで、當節柄ぢや、迷込んでは何處へ行くか、ハイ方角が着きましねえ。」

「最う分りましたよ。」

「可かあねえ、私、此處に待つとるで、燈をたよりに出て來さつせえ。」

私も、此の障子の多いこと續いたのに、めらめら破れのある工合が、ハイ一ツ一ツ白濁のやうで、一人で立つてる氣はしねえけど、お前様が坊様だけに氣丈夫だ。えら茶話がもてて、何度も土瓶をかわかしたで、入かはつて私もやらかしますべいに、待つてるだよ。」

僧は戸を開けながら、只、聲をかけて、

「御免下さい。」

と、びたりと閉めた。

「あ、あ、氣味の悪い。誰に挨拶さつせるだ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。はて、急に變なことを考へたぞ。其處さ一面の障子の破れ覗いたら何が見えべい——南無阿彌陀佛、あ、南無阿彌陀佛、……やあ、蠟燭がひらひらする、何處から風が吹いて來るだ。これえ消したが最後、立處に六道の辻に迷ふだて。南無阿彌陀佛、御坊様、まだかね。」

「一寸、」

「ひやあ、」

僧は半ば開いて、中に鼠の法衣で立ちつ、

「一寸燭を見せておくれ。」

「え、お前様、前へ戸を開けて置いてから何か言はつしやれば可い。板戸が音聲を發したか、と吃驚しただ、はあ、何だね。」

「入口の、此の出窓の下に、手水鉢があつたのを、入りしなに見て置いたが、廣いので暗くて分らなくなりました。」

「あ、手、洗はつしやるのかね、
と手燭ばかりを、づいと出して、」

「鉢前にや、夜が明けたら見させえまし、大した唐銅の手水鉢の、此の邸さ曳いて来る時分に
牛一頭か、つた、見事なのがあるけど、今開ける気はしましねえ。……」

え、そよら、そよらと風だ。

其、其の鉢にや水があれば可いがね、無くば座敷まで我慢させえまし、土瓶の残を注いで進
せる。」

「ありますく。」

ざつと音をさして、

「冷い美しい水が、満々とありますよ。」

「嘘を吐くもんでエねえ。何美しい水があんべい。井戸の水は眞蒼で、小川の水は白濁りだ。」

「ぢやあ燭で見る所爲だらうか、」

「而して、はあ、何なみくともあるもんだ。」

「否、縁切こぼれるやうだよ。あ、葉越さんは綺麗好きだと見える。眞白な手拭が、
と言ひかけて少刻黙つた。」

今年より卯月八日は吉日よ

尾長蛆蟲成敗ぞする

「此處に倒にはつてあるのは、これは誰方がお書きなすつた、」

「……南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛……」

「あ、佳いおてだ。」

と大和尚のやうに落着いて、大きく言つたが、やがて些と慌しげに小さな坊さまになつて急いで
出た。

「え、疾く出させえ、私最う押堪へて、座敷から庭へ出て用たすべい。」

「眞個に誰が書いたんだね、女の手だが、」

と掛手拭を賞めた癖に、薄汚れた畳んだのを自分の袂から出して居る。

「南無阿彌陀佛、ソ、それは、それ、此の次の、次の、小座敷で亡くならしつけえ、何處かの嬢
様が書いて貼つただとよ、直き其處だ、今ソんな事あ何うでも可え。頭から、慄然とするだに、」

「然うかい、あ、私も今、手を拭かうとすると、眞新しい切立の掛手拭が、冷く濡れて居たので
ヒヤリとした。」

「や、と横飛びにどたりと踏んだが、其の登音を忍びたさうに、腰を浮かせて、同一處を踏踉蹌

跟する。

三十五

「然うふらくさしちや燈が消えます。貸しなさい、私が其の手燭を持たうで。」

「頼んます、はい、何うぞお前様持たつせて、序に其の法衣着させえた姿から、光明赫耀と願えてえだ。」

僧は燭を取つて一足出たが、

「お爺さん、」
と呼んだのが、驚破事ありげに聞えたので、手んぼうならぬ手を引込め、不具の方と同一處で、掌をあけながら、据腰で顔を見上げる、と皺面ばかりが燭の影に眞赤になつた。——此の赤親

仁と、青坊主が、廊下はづれに物言ふ状は、鬼が囁くに異ならず。

「え、」
「何處か呻吟くやうな聲がするよ。」

「藝もねえ、威かして何うさつせる。」
「聞きなさい、それ……」

「う、う、う、」

と厭な聲。
「爺さん、お前が呻吟くのかい。」

「否、」
と變な顔色で、鼻をしかめ、

「ふん、難産の呻吟聲だ。はあ、御新姐が唸らしつけえ、姑獲鳥になつて鳴くだあよ。もの、奥の小座敷の方で聞えべいがね。」

「奥も小座敷も私は知らんが、障子の方ではないやうだ。便所かな、」
「ひえ、今、お前様が入らつしたばかりでねえかね、」

「然れば、」
と斜めに聞澄まして、

「お、庭だ、庭だ、雨戸の外だ。」
「はあ、」

と宰八も、聞定めて、吻と息して、
「先づ構外だ、此の雨戸がハイ鐵壁だぞ。」と、ぐいと壓へて又踏張り、

「野郎、入つて見やがれ、野郎、活佛さまが附いてござるだ。」
「佛では尙打棄つては措かねない、人の聲ぢや、お爺さん、明けて見よう、誰か苦んで居るやうだよ。」

「これ、静かにさつせえ、術だ、術だてね。もの其術で、背負引き出して、お前様天窓から鹽よ。私は手足引振いで、月夜蟹で肉がねえ、と遣らうとするだ。ほつてもない、開けさつしやるな。早く座敷へ行きますべい。」

「あれ、聞きなさい、助けてくれ……と云ふではないか。」

「へ、疾いもんだ。人の氣を引きくさる、坊様と知つて慈悲で釣るだね、開けまいぞ。」

と云ふ時……判然聞えたが、しはがれた聲であつた。

「助けてくれ……」

「……………」

「……………」

「宰八よう、——」

と、葎がぐれに蟲の聲。

手ぼう蟹ふるへ上つて、

「ひやあ、苦蟲が呼ぶ。」

「何、蟲が呼ぶ？」

「え、仁右衛門の聲だ。南無阿彌陀佛、ソ、ソレ見さつせえ。宵に門前から遁歸つた親仁めが、今時分何しに此處へ來るもんだ。見ろ、畜生、さ、さすが畜生の淺間しさに、其處までは心着かねえ。へい、人間様だぞ。おのれ、荒神様がついてござる、猿智慧だね、打棄つて置かつせえまし。」

と雨戸を離れて、肩を一つ揺つて行かうとする。廣縁のはづれと覺しき彼方へ、板敷を離る、こと二尺ばかり、消え残つた燈籠のやうな白紙がふらりと出て、眞四角に、燈が歩行き出した。

「はッあ、」

と退つて、僧に背を摺寄せながら、

「經文を唱へて下せえ、入つて來たわ、南無まいだ、なんまいだ。」

僧も爪立つて、浮腰に透かして見たが、

「行燈だよ、餘り手間が取れるから、座敷から葉越さんが見においでだ。さあ、三人となると私も大きに心強い——此處は開くかい。」

「え、これ、開けてはなんねえちゆうに、」

「だつて、あれ、あれ、助けてくれ、と云ふものを。鬼神に横道なし、と云ふ、情に抵抗ふ刃はない筈、」

樞をかた／＼、ぐつと、さるを上げて、づん、かたりと開ける、袖を絞つて蔽ひ果さず、燈は颯と夜風に消えた。が、吉野紙を蔽へる如き、薄曇りの月の影の、隈ある暗き葎の中、底を分け出でて、打傾いて、其の光を宿して居る、目の前の飛石の上を、四つに這廻るは、そも如何なるものぞ。

三十六

聲を聞いたより形を見れば、尙確實に、飛石を這つて呻いて居たのは、苦蟲の仁右衛門であつた。

月明に、正しく其と認めが着くと、同一疑の中にも幾干か與易く思つた處へ、明が行燈を提げて來たので、益々力づいた宰八は、二人の指圖に、思切つて庭へ出たが、最う其までに漕ぎ着ければ、露に濡れる分は厭はぬ親仁。

さや／＼と葎を分けて、おおい何うした、と摺寄ると、あゝ、宰八か助けてくれ。此の手を引張つて、と拜むが如く指出した。左の腕を、ぐい、と掴んで、黙にしては毛が少ねえ、おゝ／＼

正真正銘の仁右衛門だ、よく化けた、とまだそんな事を云ひながら、肩にかけて引立てると、飛石から離れるのが泥田を踏むやうな足取りで、せい／＼呼吸を切つて、しがみつくので、咽喉がしまる、と呟きながら、宰八も疾く埒を明けたさに、委細構はず／＼引摺つて縁側に来る間に、明は最う一枚、雨戸を開けて待構へて、氣分は何う？ まあ、此方へ、と手傳つて引入れた、仁右衛門の右の手は、竹槍を握つて居たのである。

是は、と驚くと、仔細ござります。水を一口、と云ふ舌も硬ばり、唇は土氣色。手首も冷たく只戦きに戦くので、とも角も座敷へ連れよう……何しろ危いから、慫う云ふものはと、竹槍は明が預る。

引そいた切先の鋭いのが、法衣の袖を掠つたから、背後に立つた僧は慌てて身を開いて、行燈は手前が、と是が先へ立つ。

さあ負され、と蟹の甲を押し向けると、否、それには及ばぬ、と云つた仁右衛門が、僧の裾を啣へた體に、膝で摺つて縁側へ這上つた。

あとへ、竹槍の青光りに艶のあるのを、柄長に取つて、明が続く。

背後で雨戸を閉めかけて、おぢい、腰が抜けたか、弱い男だ、と何うやら風向が可ささうなので、宰八が嘲けると、うんにや足の裏が血だらけぢや、歩行と痕がつく、と這ひながら云つたの

で——イヤ其音の夥しさ。ぐわらりと閉め棄てに、明の背へ飛隕つた。——眞先へ行燈が、坊さまの裾あたり宙を歩行いて、血だらけた、と云ふ苦蟲が馬の這身、竹槍が後を壓へて、暗がりを蟹が通る。……廣縁を此の體は、扱々尋常事ではない。

やがて座敷で介抱して、漸々正氣づくると、仁右衛門は四邊を呷し、あまたたび口籠りながら、相濟みましねえ、お客様、御出家、宰八此方には尙の事、四十年來の知己が、餘り氣心を知らんやうで、面目もない次第ぢや。

御主人鶴谷様の此の別宅、近頃の怪しさ不思議さ。餘りの事に、これは一分別ある處と、三日二夜、口も利かずにまじく勘考した。はて巧んだり！ 適切此奴大詐欺に極まつた。汝等が謀つて、見事に妖怪邸に爲了せる。棄て置けば狐狸の棲處、然もないまでも乞食の宿、焚火の火沙汰も不用心、給金出しても人は住まず、持餘しものになるのを見濟まし、立腐れの柱を根こぎに、瓦屋根を踏倒して、股倉へ搔込む算段、圖星々々。這！ 明神様の託宣——と眼玉で睨んで見れば、どうやら近頃から逗留した渡りものの書生坊、悪く優しげな顔色も、繪草紙で見た自來也だぞ、盜賊の張本ござんなれ。晩方來せた旅僧めも、其の同類、茶店の婆も怪しいわ。手引した宰八も抱込まれたに相違ない。道理こそ化物沙汰に輪を掛ける。待て待て狂人の眞似何でもない事、嘉吉も一升飲まされた——巫山戯た奴等、何處だと思ふ。秋谷村には甘え柿と、苦蟲あるを

知んねえか、と故と臆病に見せかけて、宵に遁げたは眞田幸村、やがてもり返して盜賊の巢を乗取る了簡。

いつものやうに黄昏の軒をうろつく、嘉吉奴を引捉へ、確と親元へ預け置いたは、屋根から天蠶絲に鉤をかけて、行燈を釣らせぬ分別。

豫て謀計を喋合せた、同じく晩方遁げる、と見せた、學校の訓導と、其筋の諜者を勤むる、狐店の親方を誘うて、此の三人、十分に支度をした。

二人は表門へ立向ひ、仁右衛門は唯一人、怪しきものは突殺さう。狸に化けた人間を打殺すに仔細はない、と竹槍を引そばめて、木戸口から庭づたひに、月あかりを辿り辿り、雨戸をあてに近づいて、何か、手品の種がありはせぬか、と透かして屋根の周圍をぐるりと見ると。……

三十七

鳥が一羽歴然と屋根に見えた。あゝ、あの下邊で、産婦が二人——定命とは思はれぬ無残な死にやうをしたと思ふと、屋根の上に、姿が何やら。

此の姿は、葎を分けて忍び寄つたはじめから、目前に朦朧と映つたのであつたが、立つて丈長き葉に添ふやうでもあり、寝て根を潜るやうでもあるし、浮き上つて葉尖を渡るやうでもあつた。

で、大方仁右衛門自分の身體と、竹槍との組合せで、月明には、そんな影が出来たのだらう、と怪しまなかつたが、其の姿が、不圖屋根の上に移つたので。

唯見ると、肩のあたりの、すら／＼と優しいのが、如何に月に描き直されたればとて、鉞を擔いだ骨組にしては餘りにしをらしい、と心着くと柳の腰。

其細腰を此方へ、背を斜にした裾が、脛のあたりへ瓦を敷いて、細くしなやかに搔込んで、蹴出したやうな袂先が、中空なれば遮るものなく、便なさうに、然も軽く、軒の蜘蛛の圍の大きなのに、はらりと乗つて、水車に霧が懸つた風情に見える。背筋の靡く、頸許のほの白さは、月に預けて際立たぬ。其の月影は朧ながら、濃い黒髪は縁を束ねて、森の影が雲かと落ちて、其の俤をうらから包むだ、向うむきの、や、中空を仰いだ状で、二の腕の腹を此方へ、雪の如く白く見せて、靜に鬢の毛を撫でて居た。

白魚の指の尖の、ちら／＼と髪を潛つて動いたのも、思へば見えよう道理はないのに、的切耳が動いたやうで。

驚破、獸か、人間か。何れ此の邸を踏倒さう屋根住居してござる。おのれ、見る、と一足退つて竹槍を引抜き、鳥を差いた覺えの骨で、スーッ！ 突出した得物の尖が、右の袖下を潛るや否や、踏占めた足の裏で、ぐ、ぐ、ぐ、と聲を出したものがあつた。

地が急に柔かく、ほんのりと暖かに、ふつくりと綿を踏んで、下へ沈みさうな心持。他愛なく膝節の崩れるのに驚いて、足を見る、と白粉の花の上。

と思つたが其は遠い。此のふつくりした白いものは、南無三寶仰向けに倒れた女の胸、膨らむ乳房の眞中あたり、鳩尾を、土足で踏んで居ようでないか。

仁右衛門ぶる／＼となり、据眼に熟と見た、白い咽喉をのけ様に、苦痛に反らして、黒髪を亂したが、唇を洩る齒の白さ。草に鼻筋の通つた顔は、忘れもせぬ鶴谷の嫁、初産に世を去つた御新姐である。

親仁は天窓から氷を浴びた。

恐しさ、怪しさより、勿體なさに、慌てて踏んで居る足を除けると、我知らず、片足が、又ぐツと乗る。

うむ、と呻かれて、ハツと開くと、舊の足で踏みかける。顛倒して慌てるほど、身體のおしに重みがかゝる、と其の度に、ぐ、ぐ、と泣いて、口から垂々と血を吐くのが、咽喉に懸り、胸を染め、乳の下を颯と流れて、仁右衛門の蹠に生暖う垂れかゝる。

あツと腰を抜いて、手を支くと、其の黒髪を搔摑んだ。

御免なせえまし、御新姐様、御免なせえまし、と夢中ながら一心に詫びると、踏躪られる苦惱

の中から、目を開いて、じろくくとする瞳が動く、口も動いて、莞爾する、……其の唇から血が流れる。

足は膠で附けたやう。

同一處を蝨く處へ、宰八の聲が聞えたので、救助を呼ぶさへ呻吟したのであつた。

恠くて、手を取つて引立てられた——宰八が見た飛石は、魅せられた仁右衛門の幻の目に、即ち御新姐の胸であつたのである、足も未だ粘々する、手は此の通り血だらけぢや、と戦いたが、行燈に透かすと夜露に曝れて白けて居た。

「我折れ何とも、六十の親仁が天窓を下げる。宰八、夜深ぢやが本宅まで送つてくれ。片時も此の居まはり三町の間に居りたくない、生命ばかりはお助けぢや。」

と言つて、誰にするやら仁右衛門はへたくすとお辭儀をした。

其處で、表門へ廻つた二人は、と皆連立つて出て見ると、訓導は式臺前の敷石の上に、べたんとして居た。狐籠籠の亭主は見えず。……後で知れたが其は一散に通じた、と言ふ。

何を見て驚いたか、渠等は頭を掉つて語らない。が、一人は緋の袴を穿いた官女の、目の黒い、

耳の尖がつた凄じき女房の、薄曇の月に袖を重ねて、木戸口に佇んだ姿に見たし、一人は朱の面した大猿にして、尾の九ツに裂けた姿に見た、と誰傳ふるとなく、程經つて仄に洩れ聞える。――

三十八

二人寝には樂だけれども、座敷が廣いから、蚊帳は式臺向きの二隅と、障子と、襖と、兩方の鴨居の中途に釣手を掛けて、十疊敷の其の三分の一ぐらゐるを——大庄屋の夜の調度——淺縁を垂れ、紅麻の裙長く曳いて、縁側の方に枕を並べた。

一日、朝から雨が降つて、晝も夜のやうであつた其の夜中の事——と語り掛けて、明はすやすやと寝入つたのである。

熟れ其も、怪しき事件の一つであらう。……あはれ、此の少き人の、聞かぬが如くんば連日の疲勞も然こそ、今宵は友として我茲に在るがため、幾分の安心を得て現なく寝入つたのであらう、と小次郎法師が思ふにつけても、蚊帳越に瞻らるゝは床の間を背後にした灰白々とある行燈。

樂書の文字もないが、今にも墨を離れさうで、裾が伸びるか、燈が出るか、蚊帳へ入つて來さうでならぬ。

然う云へば、搔き立てもしないのに、明の寝顔も、又悪く明るい。
「貴下、寝冷をしては不可せん。」

寝苦しいか、白やかな胸を出して、鳩尾へ踏落して居るのを、瘦せた胸に障らないやうに、密つと引掛けたが何にも知らず、先づ可かつた。——仁右衛門が見た御新姐のやうに、此の手が觸つて血を吐きながら、莞爾としたら何うせう。

然う思ふと寝苦しい、何にも見まい、と目を塞ぐ、と塞ぐ後から、睫がぱちちと音がしやうに開いて了ふのは、心が冴えて寝られぬのである。

搔卷を引被れば、衾の袖から襟かけて、大な洞穴のやうに覺えて、足を曳いて、何やらするすると引入れさうで不安に堪へぬ。

すぼりと脱いで、坊主天窓をぬいと出したが、是は又、ばあ、と云つてニタリと笑ひさうで、自分の顔ながら氣味の悪さ。

其處で屹となつて、襟を合せて、枕を仕かへて、氣を沈めて、
「衆怨悉退散、」

と仰向けのまゝ、呪すと、いくらか心が静まつたと見えて、旅僧はつい、うとくとしたかと思ふと、ぼたり、と何か枕許へ來たのがある。

が、雨垂とも、血を吸膨れた蚊が一ツ倒れた音とも、未だ聞定めないで現で居ると、又ぼたり……頓て、ぼたんと落ちたるが、今度は確に頬にかつた。

漸と冷いのが知れて、掌で撫でると、冷りとする。身震ひして少し起きかけて、旅僧は恐る燈の影に透したが、幸に、血の点滴ではない。

扱は雨漏りと思ふ時は、蚊帳を傳つて雫するばかり、はらりと降り灌ぐ。
耳を澄ますと、屋根の上は大雨であるらしい。

浮世にあらぬ假の宿にも、これほど侘しいものはない。けれども、雨漏りにも旅馴れた僧は、押黙つて小止を待たうと思つたが、益々雫は繁くなつて、搔卷の裾のあたりは、びしよくと、勿上つて繁吹が立ちさう。

屋根で、鵝鳥が鳴いた事さへあると聞く。家ごと霞川の底に沈んだのでなからうか。……トタんに額を打つて、鼻頭に浸んだ、大粒なのに、むつくと起き、枕を取つて搔遣りながら、立膝で、じり、と寄つて、肩まで捲れた寝衣の袖を引伸ばしながら、

「もし、大分漏りますが、もし葉越さん。」
と呼んだが答へぬ。

目敏さうな人物が、と驚いて手を翳すと、薄の穂を揺るやうに、すやくと呼吸がある。

「あゝ、よく寝られた。」

と熟と顔を見ると、明の、眦の切れた睫毛の濃い、目の上に、キラ／＼とした清い玉は、同一

雨垂れに濡れたか、あらず。……

來方は我にもあり、但御身は髪黒く、顔白きに、我は頭蒼く、面の黄なるのみ。同一世の孤兒

よ、と覺えずはふり落ちた法師自身の同情の涙の、明の夢に届いたのである。

四邊を見ると、此の人目覺めぬも道理こそ。雨の雫の、絲の如く亂れかゝるのは、我が身體ばかりで、明の床には、夜をあさる蚤も居らぬ。

南無三寶、魔物の唾ぢや。

三十九

例の、其の幻の雨とは悟つたものの、見す／＼ひやりとして濡るゝのは、笠なしに山寺から豆腐買ひに里へ遣られた、小僧の時より辛いので、堪りかねて、蚊帳の裾を引被いで出たが、さて

何處を居所とも定まらぬ一夜の宿。

消えなむとする旅籠屋の行燈を、時雨の軒に便る心で。

僧は燈火の許に膝行り寄つた。

寝衣を見ると、何處も露ほども濡れては居らぬ。先づ頬のあたりから腕を拭かうとしたほどだつたに……固より寢床に雨垂の音は無い。

其の腕を長く、つき反らして擦りながら、

「衆怨悉退散。」

と又念じて、静と心を沈めると、此の功德か、蚊の聲が無くなつて、寂として静まり返る。

又餘りの静さに、自分の身體が消えて了ひはせぬか、と云ふ懸念がし出して、押瞑つた目を夢から覺めたやうに恍惚と、然も圓に開けて、眞直な燈心を視透かした時であつた。

驟然と映つて、行燈へ、中から透いて影がさしたのを、女の手ほどの大な蜘蛛、と咄嗟に首を縮めたが、あらず、非ず、柱に觸つて、やがて油壺の前へこぼれたのは、木の葉であつた、青楓

の。僧は思はず手で拾つた。が其の正しく木の葉であるや、然らずや、確めようとしたのか、何か、其は渠にも分りはせぬ。

ト續いて、颯と影がさして、横繁吹に乗つたやうにさらりと落ちる。

我にもあらず、又もや其を拾つた時、先のを、

「一枚、」

と思はず算へた。

「二枚、」

とあとを數へ果さず、三枚目のは、貝ほどの榎の葉で、ひら／＼と燈を掠めて來た、影が大きい。

「三枚、」

と口の裡で呟くと、早や四枚目が、ばさ／＼と行燈の紙に障つた。

「四枚、五枚、六枚、七枚、」

と數へる内に、拾ひ上げた膝の上は、早や隙間なく落葉に埋もる。

空を仰ぐと、天井は底がなく、暗夜の深山にある心地。

お、此の森を峠にして、こんな晩、中空を越す通魔が、魔王に、磔と捧ぐる、關所の通證券

であらうも知れぬ。膝を拂つて衝と立つて、木の葉のはら／＼と揺れるに連れて、ぶる／＼と渠

は身震ひした。

「えへん！」

と揉潰されたやうな掠れた咳して、何かに目を轉じて、心を移さうとしたが、風呂敷包の、御

經を取出す間も遅し。さすがに心着いたのは、障子に四五枚、かりそめに貼つた半紙である。

是は此處へ來てからの、心覚えの童謡を、明が書留めて朝夕に且つ吟じ且つ詠むるものだ、と

宵に聞いた。

立つたまゝ寄つて見ると、眞先に目に着いたのが濃い墨で、

落葉一枚、

僧は更に悚然とした。

落葉一枚、

二枚、三枚、

十とかさねて、

落葉の數も、

ついて落いた君の年、

君の年――

振返ると、未だ其處に、掃掛けて廢したやうに、蒼きが黒く散々である。

懐かしや、花の常夏、

霞川に影が流れた。

其の佛や、佛や――

紙を通して障子の彼方に、ほの白い其の佛か……何うやら透いて見えるやうで、固くなつた耳

の底で、天の高さ、地の厚さを、あらゆる限り、深く、遙に、星の座も、龍宮の燈も同一遠さ、と思ふ邊、黄金の鈴を振る如く、唯一聲、コロリン、と琴が響いた。

コロリン！

と字が動いたやう。續けて――

琴の音が………

と記して有つた。

四十

客僧は思案して、心を落着け、衣紋を直して、さて、中に佛像があるので、床の間を借りて差置いた、荷荷を今解き始めたが、深更の此の舉動は、木曾街道の盜賊めく。

不淨よけの金欄の切にくるんだ、たけ三寸ばかり、黒塗の小さな御厨子を捧げ出して、袈裟を机に折り、其の上へ。

元來此の座敷は、京ごのみで、一間の床の間の傍に、高い袋戸棚が附いて、傍は直ぐに縁側の、戸棚の横が満月形に庭に望んだ丸窓で、嵌込の戸を開けると、葉山繁山中空へ波をかさねて見え

るのが、今は焼けたが故郷の家の、書院の構へに肖で、懐しいばかりでない。是も此處で望の達せらるゝ兆か、と床しい、と明が云つて、直ぐに此の戸棚を、卓子擬ひの机に使つて、旅硯も据ゑてある。椅子がはりに脚榻を置いて……

周圍が広いから、水差茶道具の類も乗せて置く。

其處で、此の男の旅姿を見た時から、丁と心づもりをしたさうで、深切な宰八爺いは、夜の具と一所に、机を背負て来てくれたけれども、其は使はないで、床の間の隅に、埃は据ゑず差置いた。心に叶つて逗留もしようなら、用ゑて書見をなさいまし、と夜食の時に言つてくれた。

其の机を、今爰へ。

御厨子を据ゑて、扱て何處へ置直さうと四邊を視た時、蚊帳の中で、三聲ばかり、太く明が魘された。が……此方の胸が痛んだばかりで、揺起すまでもなく、幸に又靜になつた。

障子を開けて、縁側は自分も通るし、一方は庭づたひに入つた口で、日頃は兎に角、別に今夜は何事もない。頻に氣になるのは、大掃除の時のために、一枚はづれる仕掛けたと云ふ、向うの天井の隅と、其の下に開けた事のない隔ての襖の合せ目である。

「吾が佛守らせたまへ。」

と祈念なし、机を取つて、押戴いて、屹と見て、其方へ、と座を立たうとする。

途端であつた。

「しばらく。」

つしん、地の底へ響く聲がした。

明が呼んだか、と思ふ蚊帳の中で、又烈しく魔されるので、呼吸を詰めて、

「……………」

色を變へる。

襖の陰で、

「客僧しばらく——唯今其へ參るものがござる。往來を塞ぐまい。押して通るは自在ぢやが、佛像のゑに遠慮をいたす。いや、御身に向うて、害を加ふる仔細はない。」

唯見ると襖から承塵へかけた、雨じみの魍魎と、肩を並べて、其の頭、鴨居を越した偉大の人物。眉太く、眼圓に、鼻隆うして口の角なるが、頬肉豊に、あつぱれの人品也。生びらの帷子に引手の如き漆紋の着いたるに、白き襟をかさね、同一色の無地の袴、折目高に穿いたのが、襖一杯にぬつくと立つた。ゆき短な右の手に、疊んだまゝの扇を取つて、温顔に微笑を含み、動き出でつ、ともなく客僧の前へのつしと坐ると、氣に壓された僧は、犇と茶斑の大牛に引敷かれたる心地がした。

はつと机に、突俯さうとする胸を支へて、

「誰だ。」

と言つた。

「六十餘州、罷通るものぢや。」

「何と申す、何人……………」

「到る處の悪左衛門、」

と扇子を構へて、

「唯今、秋谷に罷在る、即ち秋谷悪左衛門と申す。」

「悪……………」

「悪は善悪の悪でござる。」

「お、悪…………魔、人間を呪ふものか。」

「否、人間をよけて通るものぢや。清き光天にあり、夜鴉の羽うらも輝き、瀬の鮎の鱗も光る。限なき月を見るにさへ、捨小舟の中にもせず、峰の堂の縁でもせぬ。夜半人跡の絶えたる處は、却つて茅屋の屋根ではないか。」

然るを、故と人間どもが、迎へ見て、損はるゝは自業自得ぢや。」

「真日中に天下の往來を通る時も、人が来れば路を避ける。出會へば傍へ外れ、遣過ごして背後を參る。が、屢々見返る者あれば、煩はしさに隠れ終せぬ、見て驚くは其奴の罪ぢや。」

如何に客僧、未だ拙者を疑はるゝか。

と莞爾として、客僧の坊主頭を、やがて天井から瞰下しつゝ、

「恠くても尙、我等が此の宇宙の間に罷在るを怪まるゝか。うむ、疑ひに睜られたな。睜いた其の瞳も、直ちに瞬く。」

凡そ天下に、夜を一目も寝ぬはあつても、瞬をせぬ人間は決してあるまい。悪左衛門をはじめ夥間一統、即ち其の人間の瞬く間を世界とする——瞬くと云ふ一秒時には、日輪の光によつて、御身等が顔容、衣服の一切、睫毛までも寫し取らせて、御身等其の生命の終る後、幾百年にも活けるが如く傳へらるゝ長き時間のあるを知るか。石と樹と相打つて、火をほとばしらすも瞬く間、又其の消ゆるも瞬く間、銃丸の人を貫くも瞬く間だ。

總て一度唯一人の瞬きする間に、水も流れ、風も吹く、木の葉も青し、日も赤い。天下に何一つ消え失するものは無うして、唯其の瞬間、其の瞬く者にのみ消え失すると知らば、我等が世に

あることを怪むまい。」

と悠然として打領き、

「其處でぢや、客僧。」

たとひ其の者の、自から招く禍とは言へ、月の忽ち雲に隠れて、世の暗くなるは怪まず、行燈の火の不意に消ゆるに喚き、天に星の飛ぶを訝らず、地に瓜の躍るに絶叫する者どもが、われら一類が爲す業に怯かされて、其の者、心を破り、氣を傷け、身を損へば、おのづから引いて、我等修業の妨となり、従うて罪の障となつて、實は大に迷惑いたす。」

と、やゝ歎息をするやうだつたが、更めて、又言つた。

「時に、此の邸には、當月はじめつ方から、別に逗留の客がある。同一境涯にある御仁ぢや。われら附添つて眷屬ども一同守護をいたすに、元來、人足の絶えた空屋を求めて便つた處を、唯今眠り居る少年の、身にも命にも替ふる願あつて、身を賭物にして、推して草叢に足痕を留めた以來、兎角人出入騒々しく、かたゝく妨げに相成るから、われら承つて片端から追拂ふが、弱つたは此の少年ぢや。」

顔容に似ぬ其の志の堅固さよ。唯お伽めいた事のみ語つて、自から其の愚さを恥ぢて、客僧、御身にも話すまいが、や、此の方實は、もそつと手酷い試をやつた。

或は大磐石を胸に落し、我其上に踏跨つて咽喉を緊め、五體に七筋の蛇を絡はし、牙ある蜥蜴に嚙ませてまで呪うたが、頑として退かず、悠々と歌を唄ふに、我折れ果てた。
よつて最後の試み、として唯た今、少年に人を殺させた——即ち殺された者は、客僧、御身ぢやよ。

と、じろく／＼と見るのである。
覺悟しながら戦いて、

「此處は、此處は、此處は、冥土か。」

と目ばかり働く、其の顔を見て、でつぶりとした頬に笑を湛へ、くつく／＼忍笑ひして、

「いや、別條はない。が、丁ど此の少年の、乃し魔された時、客僧、何と、胸が痛かつたらう。」
ツキリと應へて、

「お、」
「即ち少年が、御身に毒を飲ませたのだ。」
「……………」

「別でない。それ／＼其の戸袋に載つた朱泥の水差、其に汲んだは井戸の水ぢやが、久しい埋井ぢやに因つて、水の色が眞蒼ぢや、まるで透通る草の汁よ。」

四十二

客僧等が茶を参つた、爺が汲んで来た、あれは川水。其の白濁がまだしむ、と他の者は其を用ゐる、が此の少年は、前に猫の死骸の流れたのを見たために、得飲まずして此の井戸のを仰ぐ。
今も言ふ通りだ。殺さぬまでに現責に苦しめ呪ふがゆる、生命を縮めては相成らぬで、毎夜少年の氣着かぬ間に、振袖に緋の扱帯した、面が狗の、召使に持たせて、われら祕藏の濃緑の酒を、瑠璃色の瑠璃の壺から、回生劑として、其の水にした、らし置くが習ぢや。」

「少年は味うて、天與の靈泉と舌鼓を打つて居る。」

我ら、乃し少年の魂に命じて、即ち其の酒を客僧に勧め飲ましむる夢を見させたわ。

(唯一口試みられよ、爽な涼しい芳しい酒の味がする。)と云ふに因つて、客僧、御身は獨更ら猶豫ふ、手が出ぬわ。」

と又微笑み、

「毒味までしたれば、と少年は、ぐと飲み／＼、無理に勧める。然までは、とうけて恐る／＼干すと、や、あつて、客僧、御身は苦悶し、煩亂し、七轉八倒して黒き血のかたまりを吐くぢや。」
客僧は色眞蒼である。

「驚いて少年が介抱する。が、最う叶はぬ、臨終と云ふ時、
(吾は僧なり、身を殺して仁をなし得れば無上の本懐、君其の素志を他に求めて、疾く此の恐ろ
き魔所を遁れられよ。)

と遺言する。是ぞ、われらの誂ぢや。

蚊帳の中で、少年の魔されたは、此の夢を見た時よ、喃。

是ならば立退くであらう、と思ふと、あゝ、埒あかぬ。客僧、御身が假に落入るのを見る、と
涙を流して、共に死なうと決心した。

葛籠に秘め置く、守刀をキラリと引抜くまで、襖の蔭から見定めて、

(あゝ、しばらく、)

と留めたは、さて、殺しては相済まぬ。

是によつて、われら守護する逗留客は、御自分の方から、此の邸を開いて、もはや餘所へ立退
くぢやが。

其の以前、直々に貴面を得て、客僧に申談じたい儀があると謂はるゝ。

客は女性でござるに因つて、一應拙者から申入れる。ために是へ罷出た。

秋谷悪左衛門取次を致す、

と高らかに云つて、穩和に、

「お逢ひ下されうか、如何、」

と云つた。

僧は思はず、

「は、」と答へる。

聲も終らず、小山の如く膝を揺げ、向け直したと見ると、

「ござらつしやい！」

破鐘の如き其の大音、哄と響いた。目くるめいて魂遠くなるほどに、大魔の形體、片隅の暗

がりへ吸入まれたやうにすつと退いた、が遙に小さく、凡そ螢の火ばかりになつて、然も其衣の

色も、袴の色も、顔の色も、頭の毛の總髪も、鮮麗に尙目に映る。

「御免遊ばせ。」

向うから襖一枚、颯と蒼く色が變ると、雨浸の鬼の繪の輪郭を、亂れたまゝの輪に残して、ほ

んのり桃色が其の上に浮いて出た。

唯見ると、房々とある艶やかな黒髪を、耳許白く梳つて、櫛巻にすなほに結んだ、顔を俯向け

に、撫肩の、細く袖を引合はせて、胸を抱いたが、衣紋白く、空色の長襦袢に、朱鷺色の無地の

羅を襲ねて、草の葉に露の玉と散つた、淺緑の帯、薄き腰、弱々と絲の艶に光を帯びて、乳のあたり、肩のあたり、其の明りに、朱鷺色が、淺葱が透き、膚の雪も幽に透く。

黒髪かけて、襟かけて、月の雫がかゝつたやうな、裾は捌けず、しつとりと爪尖き軽く、もの居て腰を捧げて進む如く、底の知れない座敷をうしろに、果なき夜の暗さを引いたが、歩行くともなく立寄つて、客僧に近寄る時、何時の間にか襖が開くと、左右に雪洞が二つ並んで、敷居際に差向つて、女の膝ばかりが控へて見える。其のいづれかが狗の顔、と思ひをめぐらす暇もない。

僧は前にゐんだのを差覗くやうに一目見て、

「わッ、」

とばかりに平伏した。實にこそ其の顔は、爛々たる銀の眼一雙び、毗に紫の隈暗く、頬骨のこけた頤蒼味がかり、淺葱に窩んだ唇裂けて、鐵漿着けた口、石榴の舌、耳の根には針の如き鋭き牙を嚙んで居たのである。

四十三

「お、自分の顔を隠したさ。貴僧を威す心ではない、戸外へ出ます支度のまゝ……まあ、お恥

かしい。」

と、横へ取つたは白鬼の面。端麗にして威嚴あり、眉美しく、目の優しき、其の顔を差俯向け、しとやかに手を支いた。

「は、は、はじめまして、」

と、しどろになつて會釋すると、面を上げた寂しい頬に、唇紅う莞爾して、
「前刻、憚へ行らつしやいます、廊下でお目に懸りましたよ。」

客僧も、今はなか／＼に胴据りぬ。

「貴女は何誰でございます。」

と尋ねたが、其時は略其誰なるかを知つて居るやうな氣がしたのである。

美女は棲を深う居直つて、蚊帳を透して打傾く。

萌黄が迫つて、其の衣の色を薄く包んだ。

「此の方の、母さんのお知己、明さんとも、お友達……」

と口を結んだが愁を帯びた。

此方は、じり／＼と膝を向けて、

「あ、貴女が、」

「あの、其に就きまして、貴僧にお願いがございますが、どうぞお聞き下さいまし。」
と又蚊帳越しに打視め、

「お最愛しい、澤山お寢れ遊ばした。罪も報もない方が、こんなに艱難辛苦して、命に懸けても唄が聞きたいとおつしやるのも、母さんの戀しさゆゑ。

其の唄を聞かうくと、お思ひなさいます心から、此頃では身も世も忘れて、まあ、私を懐しがつて、迷つて戀におなりなすつた。

其の唄は稚い時、此の方の母さんから、口移しに教はつて、私は今も、覚えて居る。

慥うまで、お憧れなさるもの、一寸一目お目にかつて、お聞かせ申たうござんすけれど、今顔をお見せ申しますと、お慕ひなさいます御心から、前後も忘れて夢見るやうに、袖に搦んで手に縋り、胸に額を押當てて、母よ、姉よ、とおつしやいますもの。

どうして貴僧、摺抜けられよう、突離されよう、振切られませう、私は引寄せます、抱緊めま

す。
と血を分けぬ、男と女は、天にも地にも許さぬ掟。

私たちには自由自在——何の道浮世に背いた身體が、其では外に願ひのある、私の願の邪魔になります。假令其とても、棄身の私、唯最惜さ、可愛さに、氣の狂ひ、心の亂れるに随せま

も、覺悟の上なら私一人、自分の身は厭ひはしませぬ。

厭はぬけれど……明さんが然うすると、私たちと同一やうな身の上になりますもの……

其も最う、此の頃のお心では、明さんは本望らしい——本望らしい、
と然も懸想したらしく胸を抱いたが、鼻筋白く打背いて、

「あれ——御覽なさいまし。慥う言ふ中にも、明さんの母さんが、花の梢と見紛ふばかり、雲間を漏れる高樓の、虹の欄干を乗出して、叱りも睨みも遊ばさず、兒の可愛さに、鬼とも言はず、私を拜んで居なさいます。お美しい、お優しい、あの御顔を見ましては、戀の血汐は葉に染めても、秋のあの字も、明さんの名に憚つて聲には出ませぬ。

一言も交はさずに、唯御顔を見ればかりでさへ、最愛しさに覺悟も弱る。私は夫のござんす身體。他の妻でありながらも、母さんをお慕ひ遊ばす、其お心の優しさが、身に染む時は、戀となり、不義となり、罪となる。

實の産の母御でさへ、一旦此の世を去られし上は——幻にも姿を見せ、乳を吞ませたく添寝もしたい——我が兒最惜む心さへ、天上では戀となる、其の忌憚で、御遠慮遊ばす。

況して私は他人の事。

餘計な御苦勞かけるのが御不便さ。決して私は明さんに、在所を知らせず隠れて居たのに、つ

い膝許の稚いものが、粗相で手毬を流したのが悪縁となりました。
彼方も私も身を苦しめ、心を傷めて居りましたが、お生命の危いまでも、此處をおたち遊ばさぬゆゑ、私わきへ参ります。

餘りお心が可傷しい、然るまでに思召す其の毬唄は、其の内時節が参りますと、自然にお耳へ入りませう！

其は今、私が此の邸を退きますと、最う隅々まで家中が明るなる。明さんも思ひ直して、又ここを出て旅行立ちをなさいませう。

早や今でも沙汰をする、此の邸の不思議な事が、界限へ擴がりますと、——近い處の、別荘にあの、お一方……」

四十四

「病の後の保養に来ておいでなさいませ、それはく美しい、餘所の婦人が、氣輕な腰元の勸めるまゝ、徒然の慰みに、あの宰八を内證で呼んで、(鶴谷の邸の妖怪變化は、皆私が手傳ひの人と一所に、憂晴らしにしたいつら遊戯、聞けば、怪我人も澤山出来、嘉吉とやら氣の違つたものもあるさうな、つい心ない、氣の毒な、皆の手當を能くするやうに)……」

と白銀黄金を澤山授ける。

さあ、此の事が世に聞えて、ぱつと風説の立ますため、病人は心が引立ち、氣の狂つたのも安心して治りますが、免れられぬ因縁で、其の令室の夫と云ふが、旅行さきの海から歸つて、其の風聞を耳にしますと——此が世にも恐ろしい、嫉妬深い男でござんす。——

爾の變化沙汰のある間、其處に籠つた、と云ふ旅の少年……

此の明さんと、御自分の令室が、的切不義に極つた、と最早其の時は言譯立たず。鶴谷の本宅から買ひ受けて、而して此の空邸へ、其の令室をとち籠めませう。

貴僧。

其美しい令室が、人に羞ぢ、世に恥ぢて、一室處を閉切つて、自分を暗夜に封じ籠めます。

而して、日が経つに従つて、見もせず聞きもせぬけれど、浮名が立つて濡衣着た、其の明さんが何となく、慕はしく、懐かしく、果は戀しく、憧憬れる。切ない思ひ、激しい戀は、今、私の心、又明さんの、毬唄聞かうと狂ふばかりの、其の思と同一事。

一歳か、二歳か、三歳の後か、明さんは、またも國々を廻り、廻つて、唄は聞かずに、此の里へ廻つて来て、空家懐し、と思ひませう。

然うなる時には、令室の、戀の染まつた靈魂が、五色かゞりの手毬となつて、霞川に流れもし

よう。明さんが、思ひの丈を吐く息は、冷たき煙と立のぼつて、中空の月も隠れませう。二人の情の火が重り、白き炎の花となつて、襖障子も燃えませう。日、月でもなし、星でもなし、灯でもない明に、臆て顔を合はせませう。

邸は世界の暗だのに。……此の十畳は暗いのに。……

明さんの迷つた目には、煤も香を吐く花かと映り、蜘蛛の巢は名香の薫が靡く、と心時めき、此世の一切を一室に縮めて、而して、海よりも尙廣い、金銀珠玉の御殿とも、宮とも見えて、令室を一目見ると、唄の女神と思ひ崇めて、跪き、伏拜む。

長く冷たき黒髪は、玉の緒を揺る琴の絲の肩に懸つて響くやう、互の口へ出ぬ聲は、膚に波立つ血汐となつて、聞えぬ耳に調を通はす、幽に觸る手と手の指は、五ツと五ツと打合つて、水晶の玉の擦れる音、戦く裳と、震へる膝は、漂ふ雲に乗る心地。

あゝ是こそ、我が母君……と絶り寄れば、乳房に重く、胸に軽く、手に柔かく腕に撓く、女は我を忘れて、抱く――

我兒危い、目盲ひたか。罪に落つる谷底の孤家の灯とも辿れよ、と實の母君の大空から、指さし給ふ星の光は、電となつて壁に閃めき、分れよ、退けよ、とおつしやる聲は、とゞろに棟に鳴渡り、涙は降つて雨となる、情の露は樹に灌ぎ、石に灌ぎ、草さへ受けて、曉の旭の影には瑠璃、

紺青、紅の雫ともなるものを。
罪の世の御二人には、唯可恐しく、凄じさに、却つて一層、犇々と身を寄せる。

其のあはれさに堪へかねて、今ほども申しました、兒を思ふさへ戀となる、天上の規を越えて、掟を破つて、母君が、雲の上の高樓の、玉の欄干にさしかはす、桂の枝を引寄せて、其に絶つて御殿の外へ。

空に浮んだおからだ、下界から見る月の中から、此の世へ下りる間には、雲が倒に百千萬千、一億萬丈の瀧となつて、唯どう〜と底知れぬ下界の霄へ落ちて居る。あの、其の上を、唯一條、霞のやうな御裳でも、撓に揺れる一枝の桂をたよりになさる危さ。

おともたちの上臈たちが、不圖一人見着けると、俄に天樂の音を留めて、はら〜と立かゝつて、上へ桂を繰り上げる。引留められて、御姿が、又もとの、月の前へ、薄色のお召物で、筭がキラ〜と、星に映つて見えませう。

座敷の暗から不意に其を。明さんは、手を取合つたは仇し婦、と氣が着くと、襖も壁も、大紅蓮、跪居る疊は針の筵。袖には蛇、膝には蜥蜴、目の前見る地獄の状に、五體は忽ち氷となつて、慄然として身を退きませう。が、最う其の時は婦人の一念、大鐵槌で碎かれても、引寄せた手を離しませうか。

胸の思は火となつて、上手が書いた金銀ぢらしの錦繪を、炎に翳して見るやうな、面も赫と、胡粉に注いだ臙脂の目許に、紅の涙を落すを見れば、又此の戀も棄てられず。恐怖と、恥羞に震ふ身は、人膚の温かさ、唇の燃ゆるさへ、清く涼しい月の前の母君の有様に、懐しさが劣らずなつて、振切りもせず、また猶豫ふ。

思餘つて天上で、せめて此の聲きこえよと、下界の唄をお唄ひの、母君の心を推量つて、多勢の上蔭たちも、妙なる聲をお合せある——唄は爾時聞えませう。明さんが望の唄は、其の自然の感應で、胸へ響いて、聞えませう。」

と、神々しいまで面正しく……

僧は合掌して聞くのであつた。

而して、其の人、其の時、はた明を待つまでもない、此の美人の手、一度我に觸れなば、立處に其の唄を聞き得るであらうと思つた。

四十五

美人は更めて、

「貴僧、此の事を、唯貴僧の胸ばかりに、よくお留め遊ばして、おつしやつてはなりません。是

は露ほども明かさずに、今の處、明さんを、よしなに慰めて上げて下さいまし。

日頃のお苦みに疲れてか、まあ、すやくとよく寝て、」

と、するくと寄つた、姿が崩れて、ハタと両手を疊につくと、麻の薫が發として、肩に萌黄の姿つめたく、薄紅が布目を透いて、

「明ちゃん……」

と崩るゝ如く、片頬を横に接けむとしたが、屹と立退いて、袖を合せた。

僧を見る目に涙が宿つて、

「それではお暇いたしましたませう。稚い事を、貴僧にはお恥かしいが、明さんに一式のお愛相に、手毬をついて見せませう、あの……」

と掛けた聲の下。雪洞の真中を、蝶々のやうに衝と抜けて、切禿で兎の顔した、女の童が、袖に載せて捧げて來た。手毬を取つて、美女は、掌の白きが中に、魔界は然りや、紅梅の大いなる苔と搔撫でながら、袂のさきを白齒で含むと、ふりが、はらりと襪にかゝる。

蕩たけた笑、恍惚して、

「まあ、私ばかり極が悪い、皆さんも來ておつきでないか。」

蚊帳をはらく取巻いたは、桔梗刈萱、美しや、萩女郎花、優しや、鈴蟲、松蟲の——聲々に、

(向うの小澤に蛇が立つて、
八幡長者のをと女、

よくも立つたり、企んだり、

手には二本の珠を持ち、

足には黄金のくつを穿き……)

壁も襖も、もみぢした、座敷はさながら手毬の錦——落ちた木の葉も、ばらばらと、行燈を繞つて操る紅の中を膝つて雪の散るのは、幾つとも知れぬ女の手と手。其の手先が、心なしに一寸一寸觸ると、僧の手首が自然はたくと躍上つた。

(京へのぼせて狂言させて、

寺へのぼせて手習させて、

寺の和尚が道樂和尚で、

高い縁から突落されて、)

と衝と投げ上げて、トンと落して、高くついた。

待てよ。古郷の涅槃會には、膚に抱き、袂に捧げて、町方の娘たち、一人が三ツ二ツ手毬を携へ、同じやうに着飾つて、山寺へ来て突競を戯れる習慣がある。少い男は憚つて、鐘撞堂から覗

きつ、其の遊戯に見惚れたが……巨利の黄昏に、大勢の娘の姿が、遙に壁に掛つた、極彩色の涅槃の繪と、同一状に、一幅の中へ縮まつた景色の時、本堂の背後、位牌堂の暗い疊廊下から、一人水際立つた妖艶いのが、突きはせず、手鞠を袖に抱いたまゝ、すら／＼と出て、卵塔場を隔てた几帳窓の前を通る、と見ると、最う誰の蔭になつたか人数に紛れて了つた。其だ、此の人は、否、其の時と寸分違はぬ——

と僧は心に——大方明も鐘撞堂から、此の状を、今視めて居る夢であらう。何かの拍子に、其の鐘が鳴ると目が覺めよう、と思ふ内……

身動きに、此の美女の鬢の後れ毛、さら／＼と頬に掛ると、其の影やらむ薄曇りに、目ぶちのあたり寂しくなりぬ。

(筈落し小枕落し……)

と綾に取る、と根が揺らいで、さつと黒髪が肩に亂る、。

みだれし風采恥かしや、早是までと思ふらむ。落した手毬を、女の童の、拾つて抱くのも願みず、よろ／＼と立かゝつた、蚊帳に姿を引寄せられ、棲のこぼれた立姿。

屋の棟熟と打仰いで、

「あれ、あれ、雲が亂る、。——花の中に、母君の胸が揺ぐ。お、最惜しの御子に、乳飲まさ

うと思召すか。其とも、私が舉動に、心騒ぎのせらるゝか。客僧方には見えまいが、地の底に棲むものは、晝も星の光を仰ぐ。御姿かたちは、よく見えても、彼處は天宮、此處は地獄、言と云つては交はされない。

美しき夢見るお方、

あれ、彼處に母君在ますぞや。愛惜の一念のみは、魔界の塵にも曇りはせねば、我が袖、鏡と御覽せよ。今、此の瞳に宿れる雫は、母君の御情の露を取次ぎ参らす、乳の滴ぞ、と袂を傾け、差寄せて、差俯き、はら／＼と落涙して、

「まあ、稚兒の昔にかへつて、乳を求めて、……あれ、目を覺す……」

然らば、然らば、御僧。此の人夢の覺めぬ間に、と片手をついて、わかれの會釋。

唯玄關から、庭前かけて、わや／＼ざわ／＼、物音、人聲。

目を擦り、目を睜り、目を拭ひ居る客僧に立別れて、やがて靜々——狗の顔した腰元が、ばたばたと前へ立ち、炎燃ゆ、と緋のちらめく袖口で音なく開けた——兩戸に鏤む星の首途。十四日の月の有明に、片頬を見せた風采、薄雲の下に朝顔の苔の解けた風情して、うしろ髪、打揺ぎ、一度蚊帳を振返る。

「やあ、」

と、蚊帳を拂つて、明が驟然と飛んで絶つた。——

袂を支ふる旅僧と、押揉む二人の目の前へ、此時づか、と顯はれた偉人の姿、雷の中なる林の如く、黄なる帷子、幕を蔽うて、廊へかけて仁王立、大音に、

「通るぞう。」

と一喝した。

「はつ、」

と云ふと、奇異なのは、宵に宰八が一杯——汲んで来て、——縁の端近に置いた手桶が、ひよい、と倒斛斗に引くりかへると、ざぶりと水を溢しながら、アノ手でつか／＼と歩行き出した。

其の後を水が走つて、早や東雲の雲白く、煙のやうな潦、庭の草を流るゝ中に、月が沈んで舟となり、舳を颯と乗上げて、白粉の花越しに、すら／＼と漕いで通る。大魔の袖や帆となりけむ、美女は船の几帳にかくれて、

(此處は何處の細道ぢや、

細道ぢや、

天神様の細道ぢや、

細道ぢや、

頬
白
鳥

少し通して下さんせ……
最切めて懐しく聞ゆ、とすれば、樹立の茂に哄と風、木の葉、緑の瀬を早み……横雲が、あの、横雲が。

場所を云ふと、大方の人に直ぐ其の誰であるかが解らう、且つ事柄が、聞えた伯爵家の世嗣の君に因つて起つたのであるから、假に……何某郡……木の葉村として物語る。

常磐の松の濃い緑も、木の葉と云ふに異りはないが、もの名にすると何となく、風に、時雨に誘はれて、二葉三葉はらりとするやうで物寂いから、人数も少い、此村の、疎在な茅屋にも稱が適ふ。

稱が適ふと言へば、此村の百姓家の一室を借りて、師走の暮だ、と云ふのに、置炬燵へ潛込んで居る男が、釣をするでもなし、玄徳を待つでもなし、禪の法を修するにあらず、昆侖方壺思ひも寄らず、六韜三略を読むでもないから、其處で自から行者不性と號した、是も先づ相應しいが、實は開業醫後期試験準備の最中。

處で、不性行者が部屋借の家は、木の葉村字袋田の何右衛門とか云ふのだけれども、其よりは壘屋の方が分解が早い。主人は壘職で、都合上停車場寄の町近に別世帯、職人三四人も使ふ處か

ら、暮は分けて忙しい。旁々家内申其の方へ手傳に行つて、近頃本家には隠居の爺様萬平と、不性行者ばかり。尤も本家ながら、此の方を壘屋の隠居所と云ふくらゐ、所有の田地は、大抵居廻りの百姓に預けて、耕作の方は、爺様が退屈凌ぎと、御冥加に鋤鋤を持つに過ぎぬ。

粟は疾くに刈入れたし、麥は時かずとも可、暖い土地の事、葱は霜に白根が長く、大根の雪に埋るゝ憂もない。羽目板の曲んだのも隙々に繕ひ果てた、……日が好ければ背戸の水仙の葉でも弄らうと云ふ爺様。

「豪え風でがंसす喃。」

縁でもある事か、土間へ筵を折敷いて、べたんと尻餅をついた形、膝までの股引、千種色のを投出しに、釣瓶を膝へ、踵を空に引抜き、手細工で簞を直して居るのが、吹き荒ぶ風の中に、

と炬燵から不性が氣のない聲で、

「雨になるだらうかね。」

「雪でがんしよ、何でも時候外れの此の暖氣さぢや、吹返しが潮手になるべえ。」

コットンと、才樋で釣瓶の底也。

「あゝ、」

「お前様、こんな陽氣に炬燵ン中さ突入つて、雲が降つたら何うするだね。」

「天窓から引被るよ。」

首つ丈潜込んで、吹くならば吹けだが、風は烈しい。野山を掛けて土の波を煽るが如く、時々ぐらぐらと障子が動く。が、南で暖いから、恚う引籠る分には、然して氣に成らず、隨意よ、外れたら裏山の椿の、崖に連々とある葉に搦んで燃ゆるばかりの早咲を眺めよう、背戸の水仙の香も嗅がう、と仰向けに、太平樂の巻物一卷、長々と手を擴げて居ると、又一陣枕を揺つて、風は床下で躍り上る。

「豪い風だね、」

今度は此方から聲を懸けて、

「曇りやしないかい。」

爺様、才榎の手を留めて、短い髻の、海綿を押着けた如き頤を上げ、背伸びをし、

「はあ、海の方の空へ、鳥の羽のやうな雲が押被さつて、風にはたたく煽つてるだ。空半分は暗えだがね、根なし雲だ、今に吹飛んで了ふべえさ。」

はたと一つ手を拂いて、山を包んだ袋田の奥を透して見て、

「山は晴ちや……が、あゝ、あゝ、風が吹いて吹暗ますで、大い牛が吼えるやうだ。おゝ、頂邊の松の木さ角のやうに振廻す……」

と熟と見込んで、けたましく、

「やあ、旦那、見さつせい。」

一一

「あれ、何うしただ。」

と爺様は、敷込んだ筵の端へついと立つと、吹掛ける風を胸で應へて、

「危い、危い、あゝ、ぐるぐる廻る。やあ、山の根際へ打附つた。突踏める。おつと、尻持をつくめえぞ。どつこい其處だ。えゝ、だらしはねえ、確乎さつせえ。」

腰を伸したり、屈めたり、脛を踏張つて夢中で喚く。

騒ぎが烈しいから、

「何だい、爺さん。」

「何だつて、」と首を据ゑて、

「まあ、見さつせえ。」

「喧嘩か。」

「先づ喧嘩だ。喧嘩でがすがね、相手はねえだよ。」

「相手なし？狂人かい。」

「はッはッ、相手はあるだが形がねえだよ。風と取組んで揉むでがす。あ、無理だ、無理だ。其の畦を突切るなあ——横なぐれを啖つて堪るか。——素人だ……それ見させえ、用水の落口だ。其の畦にや切れ目がある……む、立停まつて思案するかな。」

獨で天窓を掉動かすと、何處かへ丁髷の影がさす、猪首に窘めて、

「引返させえよ。これさ、あ、飛んだぞ。風の勢、身體が宙だ。八艘飛！さて、轉んだ。それだから謂はねえ事ぢやねえ。」

「どんな人だ。爺さん、村の者か。」

「何、洋服を着た男でがんさ。」

「銃獵家かね。」

「いんね、杖を持った少え人だが、突當りの出張りの、庚申塚で舞つてるだよ。岩さ突乗つた難船のやうだ。」

お刺に譯さ分んねえから、田の畦を突切つて、向うの山の裾へ出ようとするだね。海から正面

に吹着ける奴あ、庚申塚へ打着かつて、鍵の手に扶込んで吹溜るだに、其奴を、へえ、胴腹へ打附けるだ、堪りごとあるもんかえ——あれ、見させえ、丸くなつて窘んで了つた。後へも前へも動き得ねえ、何うしるだあ。」

「何しろ、そりや飛んだ目に逢つた。少い人だつて、向う見ずな事をして、怪我でもしなけりや可い。」

此の際炬燵でもあるまい、と土間に有合せの草履を突掛けて面を出すと、ばつと吹く。朝霜が此の暖氣に融けて、地が濕つて居るので、幸ひ砂煙も立たなかつたが、何うしたのか、何處にも其の人の姿は見えぬ。

爺様に聞くと、土間へ下りる間だつた。畦の上に居窘まつて蹲んで居た件の男は、迎も向うまで抜切れず、と断念めたか、づつと立ち、外套の裾を颯と蹴して、取つて返すと、前刻に飛越した用水の落口を又跨ぐ……に片足づつ、では風に應へる身の中心を支へ兼ねたか、越さうとして、一息猶豫ひ、躍上つて礫と荊田の上へ寝た。其まゝむつくと起きはしたが、くるくると廻るが疾いか、榛の木の根を包んだ稲束の蔭へ、今、倒れ込んだ處と言ふ。

成程吹くわ——砂煙を捲かないから、見る目には然までではないが、からつと霽れた空蒼う、底に白味を帯びたのが、千切れくりに、水田の浅い底に、倒に澄切つた。海の上には、一刷け箕

の形した黒雲が、此の袋田の口を、遠く差覗くが如くに山を壓して輪取つて居るが、最う些と廣がつて、田の上へかゝつたら、直ぐに其の水に染んで颯と流れて、一面に暗くなりさうである。又其だけに、際立つて、袋田の奥の山際かけて、村の半ばの朗かさ。眞書間が透明つて、餘り明さに月夜のやう。

三

字の出口の右左に、根を据ゑた山の裾は、犇と兩方對合つて、こんな風の時、海の潮の瀧になつて押浸さうとするのを、防ぎ留めて居るやうで頼母しい。

又本街道は、其の出口を横に通る……西から、東から、山の暮を切つて舞臺へ出る、馬、車、ぼつ／＼時々自轉車、深張をさした婦人、郵便配達、或は脚黒く裳紅に、ちら／＼と過るのも、皆花道を横に切つて山の裾から裾へ入る。——態と土手を下りて、袋田を見舞ふのは殆ど無い。但暮方など、一際街道の人通、馬、車、往來の繁くなる中を、其の花道を貫いて海へ落ちる小川に架けた、近頃新しくなつた——小橋の袂で、ぐい、と轡を廻らして鼻頭を押し向けて、村へ入るのも偶にはあるが、一月も居れば、孰れ馴染の馬士衆。

茲に袋田と云つて、單に口が窄まつて底一つ、中に、田、畑、藁屋、雜木山を装つたばかりの

ものではない。袋田の袋は、海に面したのと連つて、奥に又同一形なのが一落をなして居る——眞中を仕切つた處が、丁度其の庚申塚で、村の形は、恰も連つた小山の間に、斜に留まつた大きな胡蝶に例へられる。

前と奥と、袋田の兩翼、庚申塚は蝶番。

其も時にこそよれ、紫雲英、鼓草が咲満ちて、菜の花の粉が日中に霞む頃、麓に萩の溢る、ほど、夏の夜は、月の青田の羅着た胡蝶にも見られよう。木の葉落ち、草枯れて、痩せ山に岩の尖つた師走の頃日、分けて風には、宛として鳶爪の破れて田に落ちた風情がある。爪の其骨ばかり、物凄く蒼空の下に、ぶる／＼と震へて、目に遮る霧の一重の紙もあらず。

と見る／＼、捻切れるやうに、門畠の葱が棟髪立つて、青白い毛を引撈る、と同時に、田の水が彼方此方礫のやうにばら／＼と逆立ち飛ぶ。岩蔭に干びて残つた、眞赤な鳶の葉の翫るのも、血の繁吹かと疑はる。

「そんなに僵れたり轉んだりぢや、怪我でもしやあしないかな。」

と百年近い古屋根の、藁葺の重量を支へた、門の柱の些と曲んだのに手を掛けながら、伸上つて見遣るにさへ、不用意では押飛ばされさうに吹き頻る。

「何うだかね、石塊は少なし、田の土あ柔だで、然したる事もがんすめえが。」

爺様も氣になるさうで、小さく見ゆる稲束を差覗くやうにして、
「何しろ、あの蔭さ突潜つたま、良暫時出て來ねえだ。」
「行つて見ようか。」

「可訝かんべえ。是がはい、漁師町なら難船だで、直ぐに救助船漕出すが、田畝で風を啖つたに、命綱を投げるでもあんめえさ。」

首ぐつたりで、畦道を行つたり來たりしとればとつて、是やい、性根着けるツて、突如天秤棒で撲しつける譯にや行かねえだ。此方ぢや、へい、的切狐に魅まれた、と睨んだ處で、荒神様は前方にも着いてござる。

お前様も遣らつしやるべえ。用もねえに、其れ何とか爲るとつて、其處等をぶらり〜と歩行き廻るだ。今時の少え人だ、どんな了簡があんべいとも計られねえ。大風に乘つて泳ぐだね、風船乗の下稽古かも分んねえで、虚氣素人了簡で、手を附けてはなりましねえ。」

と呑氣らしい事を眞面目に云ふのも、しやがれて聞ゆるまで、びゆう〜と風が荒ぶ。

「尤も雨が交らないから大した難儀もしなからう。石瓦が飛ぶ程でもないから、怪我もすまいよ。が、あの吹曝しぢや飛出せないから、呼吸をついて居るんだらう、何しろ人子一人通らないね。」
「然れば、出端に私あ居たけど、何時此の前を通つたか、つい氣が着かねえで居たでがすよ。」

——やあ、豪く吹くわ、何うだね、まあ……」

四

見るから風當りの分けて激い庚申塚は、木の根も暴露に、灰色の岩が岩破と缺けて、缺け目が鋭く刻々立つて、向齒を切縛つた偉大なる白髑髏が倒に食込んだ形に見える。草樹が翠の折からでも、白々と残つて、こんな風立つた日は言ふまでもなく、袋の口を習々と吹込む時さへ、其處へ絶えず颯々と當るので、差す枝も振を替へ、草の花も面を背けて、木の葉の影も宿さぬけれど、岩が其の灰汁色である爲に、赫と當る日の光も薄曇つて——屋花の塵く月夜などは、風筋を傳ひ傳ひ、ぐる〜と口を開けながら轉げ歩行く——明星の光が浸んだ時などは、一目の鬼の、白銀の瞳が爛々として睨むに齊しい。

砂も苔も吹浚つて、岩は昨日今日削立ての、埃も据ゑず新しいが、延寶八年とした一基三尺ばかりの石碑が据つて、正面と左右に三體、庚申の猿が三疋居る——所謂袋田の庚申塚。

礎になつた岩の膚の、夢見るやうな自然の段は、昔人がぬかついて、手を支き擦らした痕であらう。向つた者を透見をするか、と目を押へて一體、通るものを熟と見て、嘲笑つて、吃と噴出しさうな口をむすと壓へて一體、行過ぎる者を、天窗を抱へて、見送る如く、兩の耳を塞いで一

體。——是を刻んだ小刀は、雑としたものだけれども、三體宛母親の胎の中で、もんどり打つて躍るが如く、石の上に浮出した、其の浮彫の線ばかりは、日にも月にも影を深く、苔さへ蒸して、變化の産毛のやうに見える。

土地の者は、前記延寶の海嘯が、村の奥まで押込んだ、當時死人のあつた供養と、向後の高潮を禁厭ふために、件の塚を築いたと言ふ。然もあるべし。いづれ何時かは、海の潮か、浮世の波か、袋田へ浸入することがなくては済むまい。——地の理を思ふに、恰も襲はむとする波のために、天の設せる、緩慢な、稻妻形の塹壕に似た村であるから。

村人の心にか、田の上へか、潮が被つて、世が變り、畦を一つ／＼星が移つて、袋田の袋の灣となる時こそ、光を放つか、虹を吐くか、庚申塚は奇蹟となり、名所となり、然も、航海の船を覆す難所となるに違ひない。

此の塚は、疊屋の隠居所から、もの小半町隔たつて居るが、風が山を押揺る所爲か、透通つて蒼白い風の中に、浮上つて、一段と間近に見ゆる。

が、不思議や。

「ブツ、堪らぬ風だ。」と目を塞ぎ、

「ヤ騒々しい、」

で耳を壓へ、

「埃だ。」

と云つて目を擦るやうである。——風は削るが如く、石碑の面を打挫いで、吹き減らすばかり激いので、巖の膚が粉になるか、と村の片翼の空へ掛けて、朦朧として灰色の柱が擴がる。

其處で風に卷かれたため、向うの山の根へ切れようとして、中途で稻束の蔭へかくれたさうな、少い人は未だ出ない。

「爺さん、」

面をばつと吹拂はれつつ、急込んで言ひかけた。

「何だね。」

「然ういへば、何は、どうしたらう。今朝あの庚申塚の前に倒れて居たと云ふ……何よ、それ、

……」

「おう、奥の吉松が許の別嬪かね。」

五

今や庚申塚を見たに就いて、不圖其の事を聞出したが、話の機會が出来ただけで、思出すほど

過去つた事ではない。一體、此の日の明方は、海に面した邊より、袋田は一方口、一際朝靄が深かつた。

靄は晴際が大事とか。一齊に赫と上るとともに、此の南風になつたので、其までは、野山が呼吸を凝らしたやうに、平時よりも寂然として、雀の聲も籠つたのである。

明方些と過ぎた頃、其の靄の中を、町方の親類へ、煤拂の手傳ひに、早出をして、奥の方から生欠伸の呼吸を、丸く鼻の先へ漾はせながら、頬被りで出て来た……角と言ふお百姓が、庚申塚に差懸ると、路を塞いで、横に寝たものの姿があつた。

野良犬かと思ふと、否、棲をこぼれた紅で、婦人だと直ぐに知れた。

是は、と鬢の香を聞くばかり、近々と鼻を寄せて、熟と見ると、癩を惱んだやうに鳩尾を壓した、白やかな右手を、翳んで前髪がこぼれかゝる額に當てて、猿が碑の前に突俯した。が、取亂した形で、襟が逆つて、青い半襟が、美しい襟脚を抜いて、背筋の曲つた肩が外れて、襦袢の色もほんのりと、酔つた風情に靄が掛り、浅葱の麻の葉と黒縹子を打合はせの帯、引かけに結んだのが、細りした腰を落ちて、横状に地に敷いて居た。

俯突せの顔は、見ないでも直ぐに分る。

「やあ、吉松どんの姉はん、姉はんぢやねえか。え、！こりや何うだ。」

とひよいと退いて、きよとんと成つたが、一目散に取つて返した。

「お早う！大變だ。」

と三町、一呼吸、聲をはずませ、吉松が門へ喚込むと、大戸は未だ閉つて、取附きの縁が開き。春を待つため頃日貼替へた新しい障子に、爐に焚く櫓の影が透いたが、其處からは答へないで、

「こりやお早え。」

と横手の廊の前で答けた。是は御注進が（大變）だと言ふ、婦が家の吉松で、働盛りの若い者。律義で然も稼人、早や草鞋穿きの身拵へ、町方へ賣りに出る焚附の荷を着けようと、馬を曳出して居た處。

「來せい、來せい、疾く來せえ。こんの姉はんが、

庚申塚に倒れて居らあ！

「呀？おらあ又、朝飯前に例の柴疍かと思つた。」

と葱の色より蒼くなつて、驚いたわ、魂消たぞ、と直ぐに飛んで出る角の跡へ、追續くと、引出して綱を解いた艶の佳い黒馬が、ぶる／＼と鬘を振つたが、ふ／＼と地を嗅いで、大きくのそのそ、手綱を前脚の間へ長く、すらりと伸ばして、吉松の後を打つ。

「轉ぶなよ、確乎、

と振返つて、突のめらうとする吉松を呼んだ時、角は馬の其の黒い顔が、縦條に靄を破つて、道中へ出たのを見たが、兎角う言ふ暇はなかつた。

雖然、馬は心あつて飼主の力に成つたらしい。

頓て二人で驅着けると、爾時は最う石の上に起きかけて、顔は上げたが重さうに頭を垂れて、両手を石碑の前に支いて、帯も袖も、未だ崩折れた纖弱い姿。

縫り寄つて、物を言つても、一言には頷き、一言には頭を掉るのみ、恍惚と、直ぐにも目を塞ぎさうに見えるから、疾く内へ、と傍から角も勵すので、手を取つて肩にしても、膝が、がつくりと摺落ちる。

「角さん、大目に見てくらつせえ。」

ときよとくししながら、吉松は其の若い美しいのを背に負はうとしたさうである。

六

婦は吉松の肩へ、兩袖を捲いて、其の上へ肱を載せて、前髪を伏せて負背つた。腰を抱いて歩行かうとすると、わい。

「わあい。」と噓して、げら〜と唇の厚い音の、然も薄つぺらな聲を出したものがあゝ——二人

の小女郎——八十に瀧と云ふ妹どもで、背中の婦には何千疋の鬼に當る、評判の悪たれ阿魔、事こそあれ、と朝飯の味噌汁の椀を引被つて來たらしい、路を塞いで、笑ひつけて、兄者がはつ、と氣を打つて逡巡ぐ處を、

「可笑いなあ、」

「朝つから、わあい、」

と行つた。

馬が心あつて、飼主の手助けに來たらうと言ふのは此處で。

吉松は山の根へ、手を放した婦を、角が介添して、馬の背に搔乗せた。

「驢よ、頼むよ。」

と言つて、婦がともすれば鞍をはづす、力なげな足を、角と兩方から押へて持ち、馬の兩傍に引添つて、手綱は元の通りするりと下げて、漸とこのことで内へ運ぶと門の戸は開いて居たが、馬は縁側へ横づけに。周章して頓痴たものと見える、吉松が土足の草鞋で、縁の上へ、ひよこりと上ると、爐ばたの暗い中に目を白うして居た姑が、生命に別條とでも憂慮ふ事か。

「馬鹿野郎！」

と怒鳴りつけた。

吃驚敗亡、這下りる吉松より、婦の方が其時は最う確で、馬の背で裳を揃へて、すつと反身に縁へ下りたが、つかくと爐の周圍、姑の背後を通る。

又是に、角が呆氣に取られる中、婦はつかくと納戸へ入つて、嫁入りの一荷長持の前に、胸を切め、肩を抱いて、身をしめて坐つてしまつた。さあ、サシツレの差出口、寄つて集つて評議區々。

漸と口を開かした婦に聞く、と何にも知らぬ、夢を見たやうだ、とばかり。詰りは、激しく寝惚けた事になるが、其なり納まるか何うかは分らぬ——何時までも見て居られぬ——煤拂の手傳ひ。角は置放しの馬を厩へ引込んで、

「われえ、好くしたぞ。」

と吉に成かはつて、其の鼻頭を撫でながら、

「姉はんは身體が弱えだ。大事にさつせえ。晚げえ、又見舞ふだよ。」

で、町へ出しながら、——此家の前を通つて、土間に立つた爺様を見掛けると、十歩ばかりも葱畑を引込んだ處を、わざと入つて来て、先を急ぐと言ふ下から、

「まあ、聞かつせえ、それから何だ。」

と馬に饒舌つた挨拶までして聞かせて、

「爺様は、まあ、何と思はつしやる。」

ふん、と幾度も打傾いたが、

「夜さり、はあ、裸で手水に出たんべい。」

と言ふ。

「何故だえ。」

「何故でもよ、まあ、行つて來せえ、私らも後で見舞ふべい、又晩に逢ふだ。」

「そんなら、晚げえ。」

と分れて出た。

蚤起きをした爲に、此の話を傍聞きしたのは可いが、委しい事を——尋ねるより、實は炬燵に入つて、不性行者は、茫乎其となく婦の身を打案じつつ居たのである。

此の機會に言出すと、爺様は思出したか、

「其事だつて。お、丁度可え。吉松が姉さまを見舞がてら、今の少い人の様子を見べい。何、

こんな風に。私等あ足から村に生拔だ。」

と才槌を腰にさすと、腕組して、ぬつと廂をはづれた。凧の後姿、豆鼓に似たる哉。

「お、怪我をなすつたな。」

見ると額に血が染んだ——此の人は、萬平爺様が、庚申塚の前で、風にぐらぐらとなる體を固めて、及腰に畦の稲束の蔭を見込んだ時、猛然とした體で、飛んで舊の道へ翻然と出て、塚の前で、又ばつと吹立てられた、外套の裾を空さまに絞つた、と思ふと、爺様と擦れれに二人纏れて浚んで立つ中、颯と兩方へ吹立てられて、爺はひよろ／＼と向うへ行く。此は後歩みに風に乘つて、漸つと塚の前を離れる、と立直つて、隱居家の前の一條路を揉みに揉む、足が振れて、靴の尖がふは／＼軽い。少時して葱畠の前を通つて二歩ばかり出るや否や、哄と抉つて弓形に煽りつけた向風に吹戻されて蹣跚と成つたが、頭突きに奮發んで、胸を重壓に曳と堪へた、満身の力餘つて、身を支へた杖が内反に、撓んで翹々としたと思ふと、中ほどからぼつきり折れる、ト其の拍子に、鐙を前下りに壓へて居た手が外れて、薄色の中折帽が、ふツと空さまに舞上つて、忽ち手あつて叩きつけたやうに、地を擦つて、する／＼と葱畑を飛んで來たが、間近に轉がつて、うまく不行者の手に拾はれた。

主……は蒼白い顔をして、眉を擧めて見返つたまゝ、半ば手に残つた杖をブーン、水田の上へ投り出して、確乎と腕を抱き、風を突抜くが如く行かうとするので、もし、もし、と其の中折帽を手にしながら呼留めて、此方から持つて出ようとしたので、引返したが物も言はず——否、聲も出なかつたらう——打附かるばかりに一禮して受取らうとするのを、渡さずに……先づ休まれよ、遠慮はない、と帽を持つたまゝ、さつ／＼と引込むと、見るから疲れ果てた少い紳士は、渡りに舟の面色で、一議に及ばず——藁屋の下へ潛つて入つて、筵に躓いて、つか／＼と上を踏んで、失禮、とはじめて口を利いたが、聲が掠れて小さかつた。

其處で、どつかり、框の端へ腰を落した、腫も定まらず、頻に四邊を眺したのである。

炬燵で散かつた處より、却つて此處の方が、と思つて、行者は寛いで爐の向うへ坐つたが、すぶ濡れになつた如く、見るも傷ましい額に血潮……蹂り寄つて差覗いて尋ねたのであつた。

と自暴に横さまに引擦つたが、取つて見ると、掌には然うもなく、中指の腹に朱が染る。

「掠疵です。否、否、些とも痛くも何ともないです。」

と直ぐに衣兜へ手を突込む。未だ氣も落着かないと見え、手端が震へて、思ふやうに成らなかつた。

肩を擦つて、

「あゝ、何うも、しかし驚きました。」

つくづく言つて、落膽する。

「風向きの所爲と見えます。怪うして居ては然ほどでもありませんが、一步出ますと當てますよ。些と落着いていらつしやい。何しろお上りなさいませんか。さあ、何うぞ、」

と茶釜の下を不器用に搔廻しながら勧めると、些とも遠慮はしなかつた。

「お邪魔をします。」

と黄色いほど埃を浴びた、靴を氣味悪さうに踏脱いで、

「飛んだ厄介です。」

「其まゝ、」

と外套を脱がさないで、

「臺なし埃で。唯今敷物を上げます。」

「敷物なんぞ、幾度尻餅を支いたか分らんですもの。まるで手玉に取られたんだ——堪りやしません。難有う、」

と言つたが、品ある男の、(此の難有う)と軽く言ふのが、如何にも鷹揚のやうに聞えた。——
打解けた體で、

「御免なさい。」

と縞の筒服を、お平に、と言つた勧めに従ふ。

八

「難有う、漸と人心地になりました。實は何うしようかと思つたんです。」

又四邊を眺して、戸障子があり、爐を控へ、行者が差向つた背後には、衣服の色も映りさうな拭込んだ大戸棚の、天井を支へて光るのも、風を遮る鐵の楯、世にも嬉しげな顔したが、瞳の色が安らかでない。

茶釜の胴を撫で試み、

「大したお怪我でも無いやうです。最うそんなに血も出ませんな。」

「唯今御注意があつたんで、然う言へば些とひり／＼するやうだと思ひます位です。自分ぢや氣が着きませんでしたよ。」

「飛んだ御難儀をなさいましたね。」

「思ひも懸けません。是が親のためか、友達のために山越でもすると言ふんなら、張合もありま
す。其もです、家でも倒すほどの暴風でもあれば知らず。極りが悪い、まるで人間の鋸屑です
な。此邊等の海濱ぢや、此節は三日置ぐらるにや吹く風ですもの——馬鹿々々しい、散々です。」

すると、今日ばかり来た人ではなからう。

「矢張此の地方にお住居で、」

「何です……其の、」

と一寸考へたらしかつた……

「海濱に、眞個の眞似事のやうな別荘がありまして、其處へ多日來て居るんです。——貴下、此家が、」

と、此時はじめて不行者の狀を正視した。

「部屋借でございます。」

と袂をかさ／＼と遣つて、卷蓆の、些とひしやげた袋を出して、背屈みに吸ひつけたが、いや、我ながら此の體は、餘り風采の好いものでなかつた。

「最う學校はお休みですか。」

扱は准教員と思つたらしい。何うでも構はぬ。

「最う休みです。」

「今日は、ぢや、お一人、お留守居で。」

「否、享年六十七歳になります爺様と二人對向ひで、御覽の通り行ひ澄まして居りますが、貴下、

其處でお見懸けなさりやしませんか。奥の方へ、ひよこ／＼爺様の參つたのを、」

「はあ、」

と些と上の空——其癖、土間越に其方を見遣つて、空に爐の上へ翳した手の先が又戦く。

「あの、庚申塚の處で、」

「……だ然うです……猿の形は見て居たですが、何の塚だか氣にも留めないで居ましたつけ——昨夜、」

と言ひかけて不圖口をつぐんだ、ト顔を見合はせたので、寂しく笑つて、

「逢ひました、逢ひました。」

と聲を強めて續けざまに言つた。

「然うでせう、」

と何うでも可いやうな返事をしたが、實は、今（昨夜）で切つて、口籠つて、顔の色の變つたのが、尠からず氣に成つて、つい釣込まれて虚氣したので。

故とらしいが、何だか元氣づいたらしい態で、

「其です、其のために漸と腰が立つたんです。風は何も、此處ばかりと云ふんぢやない、宅を
出ます時から吹いて居ました。」

街道から折曲つて、此村へ入りましても、別段急に強くなつたと言ふんぢやありません。背後から吹くんですから、前へくと押出されるやうで、却つてすたく歩行いて、こりや愉快だと思ひました。」

と此處で又一口切つた。

「私は散歩に來たんです。」

と分けて言つたが、今の(昨夜)を確に耳にした身に取つては、何か仔細あつて、殊更に——でなくとも可い言譯をしたかの如くに聞えたのである。

然あらぬ體で、

「御散歩は、此處へは最初なんですか。」

九

「否、幾度も……と云ふんでもありません。一寸々々、ですから方角の分らない土地ぢやない、今落着きますと、何を、馬鹿な周章たんか、自分にも可訝いんですが。」

あの曲角まで行きますとね、突然哄と吹煽つて、引包んで、庚申塚の岩壘へ身體ごと撲き着けさうなんです。

引呼吸に成ると、腰が浮いて打倒れさうで、目も眩むやうぢやありませんか。

二三度ぐるぐる廻りました。

漸との事で、塚の前を前途へ一足抜けたんですがね、風は愈々強くなるし、こりや散歩處ぢやない。疾く歸らうと思つたですが、何だか、塚で渦を卷いてるやうで、今のを思出したんで、路を變へようと、それから、畦道を突切らうとした。酷い目に逢つたんです。足許が狭く、兩方が田で、吹倒されさうで、身體に横にして、傳つて行くと、ふらくする、非常な勢で、足を揃つて倒すんです。

弱つたのは、溝が一つありました。足を擴げりや何でもなし、一跨ぎツかないんですが、危いから飛んだです。

他愛もなく、膝を折つて土下座しました。

向うを見ると、

と居ながら、背後へ指をさして、

「向うの山の裾は、路が続いてるやうで、然うぢやありませんね。見た處は傾斜面の島になつて、わざと対込んだ大きな刺のやうな樹の株がばらばらあります。其を踏切つた處で、山の腹をなぞへに一つ傳はらないと、向う側の路へは出んです。不可ませんよ。どうして、溝一つ飛兼ね

るやうな風に、そんな崖の上の路なんざ傳へるものぢやありません。

詮方が無いから、引返さうとすると、最う氣が苛つて、詰らん、何のために、馬鹿な、こんな難儀をする！ 早く氣を弛めて休みたいと思つたんで、焦つたから又失敗りました。

今度はね、

と言つきも稍物馴れて、

「可厭と言ふほど田の上へ飛ばされました。見事に投倒されました。何をする、と對手でもあるやうに口惜くつて。……」

と言ふ、此がキリ、と動いた。まだ氣は平かにならぬと見える、何か、ものに激して居るやう。

「驚きますな。」

と此方は和げるやうに微笑んだ。

「驚きませう、」

と苦笑して、

「で、何です、躍上つたです、尙ほ悪かつた。

苛々して、魂が丁と据らんかつたと見えて、又突轉ぶんです。落膽して、はあ、と其處の稲束に撈りついて、やつと一呼吸吐きました、さあ、些と心が靜

まると、何故か急に心細くなつて來た。

風は酷いにして、恚うした晴天——然も暖い。勿論、私は絞るやうな汗びつしより。それだのに、畦にも樹の蔭にも、人ツ子一人、影も見えなからうぢやありませんか。

遠くに唯此のお宅の門と、間を置いて、隣の藁葺の屋根が見えるんです——奥へ行けば、八九軒農家のあるのを知つて居ますが、何にしる餘り寂寞だ。

來る時にも此の村へ入つてから、どんな人にも出撞さなかつた——何か、此の風は、袋田には特別の業風で、土地ツ子は、其を知つて門邊へも出んのぢやないか。

然うかも知れない……處ぢやない。臆病神に誘はれて居たんですから、確に然うだ、と極めて了つて、情なくなつて、荒海に漂つて浮木の切に絶つた氣がする。思切つて、聲を揚げて、人でも呼ばうかと思つたんです。

狂人の沙汰ですな。」

と又寂しく笑つて、

「お内のですか、……老人の姿を見ました。地獄で佛つて此の事だと思つたんです。

あ、やつて村の者が歩行くものを、と始めて夢が覺めたやうに元氣づいた。其の勢で塚の前を乗切つたんです——が、杖の挫折れたのに又挫折、此の前何うならうか、と思ひましたよ。御

深切で助かつた、眞個です。難有う、

と一呼吸に言つたが、強ひて口語數を多く、勤めて快活に饒舌つたらしい。

十

何故なら、顔色が陰鬱で、聲に力がない。張つた調子が時々弛んだ。何うも風に吹かれたばかりで、慙うまで屈托する法はあるまい。僻目かは知らぬが、前刻(昨夜)と言つたのを、追掛けて尋ねられまいため、故と立續けて紛らさうと勤めたのであらう。

聞いて見たくないではないが、人の祕事、強ひるに當らぬ。

其と無しに、

「それでは、此家の爺様も、深切が通つたのです。貴下が惱んでお在なざるのを、甚く案じて居ましたつけ……お知己でも無いのに、此方からお呼懸け申すも變だ。次手ながら御様子も見ようと言つて出掛けました。」

其が通るのを御覽なすつて、元氣着いたと仰有るんです。何でも老人の爲る事は卒がありません。本人今に歸つたら、嘸本懐で喜びませう。御緩りなすつて下さい。

些と横にでもお成んなすつたら何うです。こんな田舎屋、些とも御遠慮は入りません。」

「え、御厄介次手に、最う些とお邪魔をさして頂きますせう。今のに懲りて、外へ出る氣はしなです。考へると可恐いほどです。」

一寸目を塞いで、俯向いたが、

「庚申塚ですね、」

急に改まられたので、

「はあ、」

と居直る。

「彼處は何ですか。何か、あの塚に就いて、此邊の傳説でもありませんでせうか。」

「妙な事を聞くと思つた。」

「別に私も聞きません。——尤も信仰があつて立てたのでせうし、老人などは通りがかりにお辭儀をします。尾籠なお話ですが、あの桶ですね、肥料の——彼を貴下、引擔いで彼處の前を通る時、皆が皆でもありませんが、へい、御免なせえまし、と聲を懸けるのがあります。」

嘸笑ふだらう、と思ふと、案外、謹聽の狀して頷く。

聊か圖に乗り、

「は、は、扱て、改つて挨拶をする事になりますと、眞正面のなんざ、

鳥白焼

(や、臭いわ)——ツて、鼻を壓へた體です。申戯ですが。しかし見やうに因つて何うにも取れます。其の時、其の人たちの心々で。

此家の爺様なんざ、能く然う言ひました、而して信じて疑ひませんが、誰か酔つぱらつて彼處を通つて、蹠跟か、つて、手で正面の猿の顔を撫でると、噓をしたさうですよ、口を塞いだのが大きな聲で。又夜中に、大變な唄を歌つて通ると、行過ぎたのを、背後から、(騒しい)とやつた。是があつて、左手に耳を塞いで居るんです。

つい近頃、御存じの曲角の田へ向つて、突立つて——眞日中——怪しからん小用を達さうとして、廢せば可いに、ひよい、と見ると、右手の猿が、一寸手をはづして目を出した、あつと腰を抜くと、一寸、又目を隠した。其の疾い事……瞬きする間。

で、石に刻んだ小刀目の、あの頬邊を膨らまして、ぶツと笑つたやうだつた、と言つて震へたさうです。

何でも、御約束の、見まい、聞まい、言ふまいは、人間の目に宿つた、ほんの其時だけの像。人の知らない時は、潤と睨み、あんぐりと開き、兎のやうに動かしてござるのだつて爺様なんざ極めて居ます。……妙でせう。」

と笑つて言ふと、又思ひもよらず、眞面目な顔して、

「然うですか。」

と打傾き、然も謙つた風采で、

「貴下は、其を、何うお考へですか。」

不行者は面喰つた。

「え、」

「何うお考へなさいませう？」

何か傳説は無いかと言ふ尋ねに付いて、澁茶ばかりの饗應、風情のなさ。せめてものお伽のつもりで、ありのまゝに應へたが、扱更つて、然も慇懃に聞かれては、内の爺様や、今朝來た角を對手なら知らぬこと、風采恁の如き紳士に對して、然ん候は覺束ない。

十一

「否、そんな事より、此の奥の俗にナダレと言ひます、松山の崖の小松に留まつた、白い人形の愛神の矢が、此の風の勢で、何處かへ吹飛ぶのを待つて居ます。一層の事流矢でも可いから、内の屋の棟へ刺さるなんざ、願うてもないのですか。」

と話を外らして、

「唐突にこんな事を申して、貴下、御覽になりましたか何うですか、赤土山の小松の中に、汽車の窓からも見えますよ。海近ですから、鷗が群れるやうでもあるし、長閑な日なんざ、刷で霞を描いたやうです。」

「知つて居ます、ヴィナスの女神の像も建つて居ます。」

「何でも西洋人の持山に成つて、其が彼處を飾つたとか言つて、うつかり人を近づけませんから、下から見ては委しい事は分りませんが、成程——舶來の天人ですな。然うかと思ふと、五重塔のやうなもの、釣鐘の伏つた處、何うやら二三體羅漢らしいものもあります。」

「私なんぞ、素人了簡ぢや、樹林のまゝで飾りつけて、鳥の聲をあしらつて、まだ家を建てない處が趣向と見えます。中空に髣髴と極樂園を現して、廳で別荘を築上げようと言ふ腹らしい。」

「何にしろ、中にも高い松の枝へ、あの羽の生えたのを留まらせて、下界を望んで、矢を番へた處が嬉しいんです。」

「それに、名さへ袋田と云ふ村のどん底へ、白蠟製の龍宮のやうに糶上つたんですもの、村の者なんざ、あの矢が放れたら危かんべいなんて言つて、評議區々なんだから面白うございますよ。」

「不思議がつて居りませう。」

「人身御供以來の矢ですから。」

これで、一寸話が途絶えた。戸外の吹頻るのは却つて耳馴れたが、戸障子ががた／＼鳴つて、棟がギイと軋むので、夜のやうな天井を仰ぐと、自分言出した事ながら、愛神が其の翼を羽叩き、弓弦が且鳴るやうに思ひ遣られる。爾時恍惚となつて、

「花火の中から出たやうに、あの色々の像が、風に舞上つたら何うでせう。」

「私なんざ眞先に此の村を遁出しますね。」

「え、何故ですか。」

「海嘯か、大地震の前兆でせう——老人に聞きました。昔奥州三厩の海嘯の時は、七日ばかり前から、空中を煙のやうな色々の姿が飛んで、中には烏帽子素袍を着たのがあり、白い馬に乗られたのも見えたと言ひます。」

「おもしろい事を言ひますね。」

とはじめて心から微笑んだやうだつた。膝を寄せて、

「何ですか、此村に多日在らしつて、變つた話はありませんか。」

「今のナダレの女神像？」

「はあ、はあ、」

「庚申塚の噓。」

「成程。」

「貴下がお來でなすつた事なんぞ、村に取つては變つた事の一つでせう。」

「否、私なんぞ、他に……」

「然うですね。」

「何かありませんか、どんな事か。」

と、憊う胸の底がむず痒さうに、玉の釦を動かして聞きたがる。

「然うですね、別に……」

「最近に、何か——」

「昨夜ですか、」

不意に言つたが、……これは出來た。

「え、」

と少からず、動する處を、

「何、昨夜ぢやありませんか、今朝庚申塚の前に、」

と言ひも終らず、土間の筵が、虎の皮のやうに翻然と躍つて、なぐれに吹込んだ風が染みか、外套の裾が戦いた。

十一

「やあ、爺さんか。最う些と歸宅が遅いと、閉出しを食はせる處だつた。時々甚く吹込むから。爐の手前から仲上つて、紳士の肩越に聲を懸けた。

「え、閉めますまい、隠居屋だ。朝つからでも、はあ、構えごとねえだで。」

と疾く珍客を見て取つて、愛想ぶりに、がたくと大戸を閉めると、一齊に暗くなつて、影法師が這つて蹴り上る。

「爺さん、前刻の御方だ。大層何だよ、お前さんの志を喜んでお在だよ。」

「御しんせつに。又お邪魔を、」

と慇懃に言ふ。

「ひやあ、何ういたしやして。茶も、碌に湧いて居なかつたでがんせうの。えら、不調法でがんです。お前様ね。」

割坐で鼎の一脚、背ぐくまつて、顔を小さく一つ振つたが、隙間から射す日の光に、澁を塗つた顔色で、

「直に行つて、ちよつくら歸るべいと思ひましけ、然う行かねえだよ……吉松が許さ、思つたよ

り混雑が大えでね、

「吉松……」

慌しげに言を挟んだので、爺様と一所に両方から熟と瞻ると、少い客は狼狽へた調子で、
「吉松ツて……許へ行つたんですか。」

「へい、お民さんてえ、姉はんが、怪體な目に逢ひましての。今日の明方、何でがす、庚申塚の
前に倒れて、ぐつたり柔に成つとるで、馬に載せて歸つたと言ひましけえ、其を、はあ、見舞は
うとつて行つたでがんすよ。」

「騒ぎが大いって何うしたよ。姐さんはどつと寝たか。」

「いんね、お前様、どつとでも、そつとでも、寝るやうだと、未だ始末が可えがね、憑物がして

……」

と腰を擡げた、兩提げの粉煙草を横ちよで捻つて、

「私あ、何でも憑物がしたと思ふでがす。そんではい、氣が荒立つてね、蟲乎立つて驅出すだ：
驅出すは可えが、井戸さ突入らうと爲るでねえかね。」

「まあ、何うしたんだい。」

「其がね、憑物が爲せるでがすよ。尤もはい、評定區々でがんす。中にや可恐しく寐惚けたんべ

い、と言ふ者もあるだね。」

私等が行つた時に、近所隣家聞傳へて、どや／＼見舞に來をつたげ、孰も知つた顔が爐縁につ

らりと輪になつた。

門口も人集りぢや。良くねえ餓鬼等、可い事にして、吉が妹の小女郎ども……二人とも學校を
休みくさつた。内に居りや親どもに我鳴られるが、蝦茶袴穿いたなりで、木戸前見物に口上を陳
べてけつかる。否さ、旦那方の前だがね。

私を見ると、お前様、疊屋の爺様ア——言ふけえ、お、八十坊か、お瀧よ——嫂はんが何だ
つてな、鹽梅は何うだ、と聞けば、庚申様の罰が當つて、夜さり天道干になつたあよ——何と聞
辛かんべいがね。

嫂さんは、何でがさ、今朝角が來て言つた通り、長持の前に、可哀げな、前髪イぶら下げて俯
向いて坐つとる。

看病やら、お檢べやら、婆等は納戸に取巻いて詰懸けた。吉松は此方人等と同じ爐邊にきよろ
きよろして、私を見ても分らねえだね、突のめつて、お辭儀ばかりぢや。

何か、氣の毒での、更つて見舞も、はい言へましねえ。

ぱくり／＼煙草喫んで様子を見つげが、疊屋の、お前等は何と思ふ、と新屋のが小聲で言つて

ね。

私が申戯半分に、はあ、無え事ではねえ。一寸ら魔物に誘はれたんべい。平時も然う云ふこんだけんども、總別此の田舎家の外後架は、あれは良くねえ。藏立てる身上で、家の内へ拵えねえは何う云ふもんだ。分けても少い婦人などが、夜々中野雪隠へ出るは間違えの原だよ。お剰に、何だ、此處等ぢや寒の中も裸で寝べいが、お民さんも昨夜、へい、帯めねえで外へ出たらう。障子を開けて寝てせえが、可恐い夢を見る、其の所爲で、魔されたつべい。何でもねえ事、悪い夢を見こじれただ。よくあるこんだ、と取做す氣で、言つただがね、私あ、はあ悪い事を言つてえよ。」

十三

爺様は一寸句切つて、じろくくと二人を見る。白い眉毛を押被せて、伏目に成つて、掌でポンと拂き、しめやかな煙を吹いて、

「私あ、へい、大え聲でも言はなんだに、次の納戸に、お民坊を取詰めて、膝さ乗懸るやうにして、猫背で頤を突出して居つけえよ——吉松が阿母……姑でがす、」
と紳士を見返り、

「耳を押立てて聞着けたが、鎌首を持上げて、(あ、疊屋の、ござらつせえ。他所行が無ければとつて、裸で寝るやうな此家の姉やぢやござんしない。見さつしやいまし、丁と肌のもの着て居るだ。)とお前様、あの、脂だらけの、瞼の白く引轉覆つた、しよぼくした赤目を、嫁に擦着けて、じろり行つた。

お民さんは身をしめたが、婆め、悪いものを見つけただね。(え、やあ、此の燃えるやうな色氣は何うぢやい、主やこれ此の襦袢は、祝言の晩に着て來さしつて、葛籠に藏つた切のものぢや、一張羅を大事がつて、鎮守様のお祭祀にも着たことがねえに。フン、フン、魔が魅したの、化されたのと言つて、皆の衆の目を眩ますだ。主の方が、狐ぢやの。皆の衆、これ、屹と規法を立ててくらつしやい。夢も、夢ぢや、誰ぞ色男の夢を見て、夜中に駈落をしたに極まつた。はれもやれも可恐しい。足留の呪詛もせんが、神佛の御罰が當つて、磔の釘に刺されたぢやる。五逆罪ぢや。)と何が早や、聞取法聞の利口交りに捲立てると、姉はんは、何と、顔を赧うしたでねえか。見て居られましねえ。お婆々、然う一概に言はつしやんな。寐魔れて鬼になり、夢中で屋根を歩行く話もあるわ。どんな事で、着物を着替へめえもんでもねえ。お民さんもお民さんぢやが、まあ、此方も氣を鎮めさしやいよ、と誰だか一人、其の膝を掴み立てる婆々の手を放さうとする、(駈落の對手は己れか。さあ、對手を吐かせ、)と其のまんまお民さんの鬚を引摺んだ。」

「お、お、」

と紳士は思はず聲を出した。

「痛々しげに眉を擧めて、仰向けに……咽喉が白い。」

(存じません。)ツた切、緊乎と口を切るだ。

(其は悪い、言譯さつせえ、)

(そんな口を利かつしやると、親類の端くれ、此方人等も黙つては居られねえ。)と男どもが突懸るだね。

(さあ、御亭主、第一主が黙つて居る法はあるめえが。)と爐端でも突き始める。や、早や、黒雲蔽ひ重るだ。

こりや、何うなるべい、と私等も手を束ねて、唾を呑んで居たでがす。

すると、はあ、魂消たつてば、聞かつせえまし。吉松が這出して、爐邊から納戸へ橋に懸つて、うじくしつけ、矢鱈棒鱈這面の汗さ撫廻はかいて、言ふのを聞くと——其が、何と、お前様、吉松が爲た仕事だつてば、呆れもしねえ。」

「何だ、吉松が連出したのか。内が辛い、二人で何處かへ遁げようとして。」意外であつた。

爺様は、雁首こつつり。

「處が然うでねえだてね。私もはい、愈々解せねえ事になつたが、何うして夜中に内を出て、庚申塚で倒れて居たか、そりや吉松にも分らねえ、第一本人が夢中と言ふ。」

が、其のお前様、襦袢の緋の一件だよ。

何と、町方や、海岸さ、邸方の奥様だ、別荘の嬢様が、紅え裙をひらくくさして歩行かつしやるで、吉の奴あ、へい、」

と小鼻を撫上げ、

「それが羨しくてなんねえで、何時の間にか、葛籠の底から掴み出して、密と隠して居たもんだね。汝が懷中で温めて持つて居て、豆洋燈を消さねえ前に、内證で着て見せてくれつて、納戸の隅で頼んだてえばの。」

男どもは堪へかねて、皆一齊に笑ひ出した。はッはッはッ。」

十四

「處が、はい、笑ひ事ぢやがあしねえ。哄と笑ふと、吉松は眞赤になつた——と見る内に、お民さんは蒼く成ると、長持の暗い上へ、すつと細りした綺の着物の肩が立つたと思はつせえ。つい

と出て、納戸の横縁から背戸へ飛ぶ、此の風だ、ばつと煽つて、大波に乗つかるやうさね。ぐるりと、あのナダレの下の、小川のふちの柳の樹を廻つて、目高、小鮎でねえ事にや飛込めねえ水だもんだで、横手へすたく切れると、わあと云ふ間に、井戸端へばつたり膝あ折つた。

石疊の縁へ掴まつて、背中あ波打たして又立たうとする處を、一人、背後から、え、と抱いた。抱いたけど、いや危えだよ。勢で打附かつた發奮に然うして井戸端で打坐つただが、はあ、一思ひで、逆に飛込む處よ。

抱いた奴は抱いた奴、最う一人は、下水溜へ踏込んだで、ばつちやり鼠色の水さ煙を吹いて風に舞ふだに、其ま、手を擴げて、躍る體で、短氣、短氣——とばつかし喚く。

(これ、まあ、飛んでもねえ、)と、抱いた奴が背後へ素引くと、

(放してッ)ツてお前様、ぶるツと肩を振つたつけ、一生懸命豪え力だ。

と爺様我の折れた面をして、

「ぐら〜と成つて、あの長え眞黒な髪が、ざらりと懸ると頸筋へ擲んで、へい、生首さ宙を飛ぶやうに揺ぶれる。

其の勢で、振放して、今度は、はい、縁側へ腰を掛けて、せい〜呼吸ばかり吐いて居つけ、吉松の前を筋違に戸外へ駈出さうとすると、小女郎はじめ其處に溜つて、呆氣に取られて居た徒

が、ひやあ、と我鳴る。

と氣の毒よ、壓へても引いても揉み立てる、婦の袂が——此の風に堪らんで、お民さんは辛かつたか、たじ〜と吹戻されて、廊の中へ遁込んだわ。

衆な動揺々と押寄せたるのが、馬の奴あヒイ、ンと嘶え上つて、長面あ振廻す、がた〜と横木を蹴る。

怪我を爲せるな言ふと、こんな時は重寶よ。直ぐに一人鬘を擦つて飛込んで、隅ッ子さ壓へる、と横へ抜ける、前へ廻りや、背後へ蹲む——

(厭、厭、厭ですよう。)ツてお民さんは遁げ廻るだ、右を追や、左へ喃、旦那。

婆様が、べた〜と草履で出て来た。での、三途川が指圖と成ると見た目が惨い。尻尾で拂ふ、四脚をすたばた荒れる。秣がばら〜、濕ッばい暗え中を、お民さんが半狂亂、裾をめら〜と炎か絡むだ、牛頭馬頭に追はれる形ぢや。

聽て吉松が潜込んで、ふツ〜云つけ、馬の鼻息の下で、漸と、お民さんを掴へた。……最うはあ、理も非も辨えねえ。死にてえだか、活きてえだか、唯慙うなつちや、大勢の前で押掴まつたのが口惜げぢやつた。(實家に對しても生命は大切、然う手足を悶えさしては怪我するで、縛らつしやい、)と婆々殿が指圖でござる。

亭主の吉松も考へたが、こりや成程、と合點したか、馬の手綱引かなぐつて、何うやら手だけ引縛めたがの。

小女の餓鬼め、さつくと出しやばつて、馬の口をはづしたよ。どつこいしよ、と手傳ひの男がお民さんを引抱いた。

(殺して、殺して、)ツて身を揉みながら、帯も袂もするくと、廐から仰向けに、宙を煽られて出て来たが、風の勢に其の重荷ぢやで、抱いた奴あ、ひよろくとなつて、縁側へどざりと尻を支いた。

(婆様よ、何うしべい。)

(其まんま、納戸へ寝かさつしやい、今に御祈禱でもして貰ふべいさ。)

と其處でへい、仰向けに、打倒して、天窓から蒲團を被せつけえよ。

(甚い恥搔きな狂人ぢや、へい、見る物ぢやござらない、最うお見舞にも及びましねえ。)

憎まれ口イ利きやあがる。

(枕をさせさつしやい、逆上たたら、尙ほ血が上つて悪かんべい)と私あ一式の事に喚いての、一先づ、歸つて来ただがね。婆奴等は、今に始まつた事ではねえが、お民さんの様子も、へい、合點がいかねえだ。緋縮緬さ脛に突嵌めた事は解せたが、前後の鹽梅が何うも些と取逆氣て居る

やうだね、私が目にも、何うもはい、

と腕を組んで一人で頷き、

「何しろ、魅込まれたに違えはねえだ、村には美しさが過ぎたもんだで。」

十五

「何でも甚太く寐魔れて、夜中庚申塚くんだりまで、地から三尺高え處を、何か目に見えねえもの手に引張れた……と、まあ思はねえぢやなりましねえね。

そんで、其の塚の前で、明方まで打轉げて、氣さ遠くなつて居る處を、馬の背へ乗せられて、内へ連れて歸られると、わいくと寄つて集る。

これぢや、へい、誰が茫とならずに濟まう。酒に酔つて正體が失くなつて、ひよいと、目い覺める、馬の上では、私だつて引轉覆るだ。

其處へ、其の小恥かしい、紅え襦袢の一件だで、いや、泣くより笑ひ、氣の毒な中にも腹筋でがんです。野郎どのが懷中に持つて居て、お民さんを頼んだ圖が思はれるでねえかね。發頭人は男でも、婦人は受身ぢや、満座の中で赫となつて、氣が狂つたに違えねえだよ。

豫て病身の處へ、お前様、息も精も續くことか、連枷で粟を拂くつても、優しい男が對手でねえ、

婆々殿が肌脱ぎで、五十年來鍛へた腕ぢや、小休みもせず、びしりと行る。堪つたもんけえ。鍛冶屋の小僧でも向槌ぢや音を上げるだに、あの又挾團扇で、小糠をばたくと煽ぐたつても、旦那方の前がすがね、左の手で使ふやうな見た目の樂なもんでねえだよ。

植附けた、田の草取だ、それ、風が吹く、麥が溢れる、雨が降る、稲穂が落ちると、びしよ濡れに成つたり、空風に吹かれたりよ、塙へ鶏を追込むたつて、十羽上では一仕事だね。

合間小間にや洗濯だ、張物だ、繕ひだ。聞かつせえまし、如何な事でも、姉はんが始めて、三十年目に夜具の裏返をさせられたと云ひます。

で、其に又、小姑めが大概のいけずかい。まだく、茲に面倒なは、最一人の弟だね。此奴が名代の極道で、兄哥が羊なら狼ぢや。血氣盛で飢ゑた奴が、あの美しい嫂と一ツに住んで、村中の嫌はれ者、相手が無えだけに始末が悪い。お剰に絲工場の職工だよ。

が、方便なもんだてね。此奴夜明の三時に起きて、工場へ通つて、夜も遅くでねえと歸らねえだで、些とは息が吐けるけども、其代りにや、退場を待つて熱い茶を沸して置く。夜中の二時にや、最う起きて、飯を焚く、辨當拵へ、これが不殘嫂の手汐ぢや。年に一度も寝忘れて、出掛けに冷飯でも食はしますかい、茶漬をがつと口に含んで、其處等へ飯粒の霧を吹くだね。

此頃は夜業があるで、時々は工場廻りの安宿へ泊るさうな。昨夜も今朝も居なかつたてよ。あ

の騒ぎに、居合はせて、奴が廠へ追込んだとして見さつせえ、あの眞白な嫂の腕さ、引捻つて、生血を出さずにや濟まなかんべい。

可恐しい。

そんな、こんなに氣い使つて、心が弱つて、體の疲れて居る處ぢや。魔も魅すつらあ、上氣せねえでよ——

さあ、取逆氣た、と成つて見ると、醫者の手ぢや駄目なこんだて、酷く、はい、募らねえ内に、瀧へ浸けるが可かんべい……と——

「瀧へ、」

と言ふ、紳士の聲は急込んだ。

「瀧、瀧、瀧とは。」

「御坊の瀧——此の山奥に、へい、寺があつての、其の崖を落ちてるだ。から人間界離れた處、唯さへ氣が寂と靜まるでね、其の一軒家の御坊へ宿を取つて、巖を削つた石段から抱下しては、病人を瀧壺へ浸すだよ。」

澤山は來ましねえが、そんな、はい、夏向は二組三組、御坊を宿に取つて、養生に來て居るだが、邊鄙で食べるものも何も無えから、稗の飯に味噌汁ばかり。自然と其の、附添ひのものま

で精進に成つて、御利益があるでがす。

けれども、はい、暴れる奴を引縛つて、瀧に押浸すだで、天窓から剣だね。私も遠い縁類の看病に頼まれて、一頃行きつけ。夜中には尙ほ利くちゆつて、裸身にして高い崖を引き下ろすだ。きやつと言ふと、瀧が颯と懸つて、眞蒼なお月様に絡んだ處は、八寒地獄劍の山だで、や、一日で逃げて来たよ。思ひ出しても悚然とするだあ。」

「が、そりや夏に限るだらう。此の寒空に、まさか、お前、」

「否、お前様、逆せ上つた當人にや、火も水も分ちはねえだで、吝な婆々だ、衣服さ引剥いで、あのまんま胴縛りにして浴びせべいよ。あ、其を思ふと、堪んねえだね。」

「爺さん、」

と、客は屹となつた。

十六

「實に飛だ我儘を言つて、爺さんを酒買ひに出して遣つて、貴下を差置いて、怪しからん出過ぎた事を——無禮な奴だ、とお思ひでせう。

其に、爺さんだつて、内の隠居です。一家の老人を小使ひに使ふ、……私今、濟まんが酒を買

つて来て下さらんかつて言つた時、老人に妙な顔をされたには、冷汗を流したです。」

と尙ほ其の額を拭ふのであつた。

「御心配には及びません。失禮ですが、何か内々で私に御話でもありさうにお見受け申しましたから。」

「あ、目顔で知らせて下さつた、知つて居ます。」

「爺様も何うか其の心を得て出て行つた様子です、御遠慮はありません。」

と言ふ内も、頻りに心の急ぐ風で、今金を渡して、其のま、膝の上を摺つたなり口の開いて居る紙入の中の、挟んだ物から、見得もなく名札を取つて出して、慌しく又押込んだ。

此の時知つた名は言はぬ。が、伯爵家の世嗣の君——何う云ふ因縁だつたか、奥の袋田の其の吉松の背後の山一つ買占めて、不思議な女神像愛神などを、すく／＼と据置いたのは此の伯爵家だ、と一頃甲乙に言傳へたのが、つい頃日になつて、否、違つた、何某と言ふ西洋人だ、と漸と分つた……其の家の、此が世嗣である。

此の日の様子は、争はれぬは品格ばかり。容子も風采も散々で、關ヶ原の戦ひ敗れた浮田中納言秀家卿、野武士の宿に潛んだ姿、雨に惱んだ人ならねども、蓑參らせたき風情である。

此の時、血が颯と顔に出た、額の疵が燃えるやうに殷紅の色を呈したが、

「何うぞ、何うぞ……願ひます、此のまんま私を縛つて下さい、」

「……………」

「縛つて、而して、引立てて吉松ン許へ連れて行つて、あの、お民の繩を解いて下さい。一生の
お願ひです。歎願します。」

と太く激した状で、思はずじり、と寄つて来る。此方はどつかりと腰を落して、

「まあ、氣をお鎮めなさいまし、解りました。仔細がおあんなさるんでせう。が、貴方は最う先
刻から何うかしてお在なさる。不躰ですが、氣が上ずつてお在なさいます。」

でなくつて、幾干猛烈に吹けばつても、此の位な風に、貴下、躓いたり、轉んだりなさるつて
事はありません。

御覽なさい、怪我さへして居るぢやありませんか。

始めから然う思ひましたが、まるで顔の色なんぞ御病人だ。今にも倒れてでもお了ひなさりさ
うな御様子です。其に太く疲勞していらつしやるやうだから、貯があれば、茶のかはりに一杯も
清涼劑に差上げたい、と思ひましたが、御覽の通りの體裁で、其も生憎。

ですから、差出たやうでしたけれども、爺さんには、葡萄酒の良いのをつて、然う言つて遣つ
たんですよ。

今に歸りませう。他に聞くものがあつてお可厭なら、何うにも成ります。酒でも飲つて確乎な
さい。」

と鐵火箸をぐつと灰にさして、

「一體何うなすつたと言ふんです。」

「は、」

と引呼吸に落膽して、

「お茶を一口、」

「召飲れ、」

ぐつと干して、

「あ、今になつて動悸の甚いのが分ります。」

と胸を撫でようとする、其手も据らず、押込らして、膝を掴んで、

「お民は、そんな目に逢つて、何うして居ませう。」

十七

此方は故と事もなげに、

「大丈夫、親類も附いて居れば、人目もあります。如何に邪慳だつて、打ちも撲きもしはしますまい。其に、貴下は然う仰有る——どんな事情だか知りませんが、狂氣扱ひにしたのは、勿怪の僥倖ぢやありませんか。」

と宥めるやうに云つたけれども、其もよくは耳にも入らぬ様子で、

「瀧へ、其の瀧へなんぞ連れて行かれちや大變です。」

と寒さうな身震する。

「今や直ぐツて事があるものですか。又いざとなれば、お民さん當人も、事實狂人でないことを證據立つて見せませうから。」

「しかし、しかし、聞いたやうな様子ぢや、單に扱はれるばかりぢや濟まないで、眞個に氣が違ふかも分らんですよ。ねえ、何うか縛つて引立てて、私を彼處へ連れて行つて下さい。」

「飛でもない事を、引立てるのツて、は、は、は、」

と何がなしに笑つて見せて、

「申戯にしました處で、行がかりの事は兎も角、今、貴下が、其の亂脈の中へ顔をお出しなすつちや、第一御身分に、」

と皆聞かないで、これは又潔く薩張としたもの言ひだつた。

「否、身分なんか、身分、もしあれば名譽だつて、家だつて構やしないツて、あの婦にも言つたんです。私だつて、實際決心して爲た事です。勿論、近頃父が亡くなつて、家でも何でも、私の自由になるやうになつたんですから。——私馬鹿ですから、學校も碌に出来ず……此の海岸の別荘へ怠けに來ちや、網なんか打つて歩行く、と其處等の漁師等が、通掛りに畚の中を覗いて、鱒や鯛の滿と漁れたのを見ちや——殿様は御前だが、若様は漁師だ——つて笑ひました。其の通りです、眞個なんです。」

罷違へば漁師になる氣で、あの婦を連出したんです。」

言葉はしどろで、取留めは無かつたが、其の一大事は能く聞える。

「お連出しに成つた、」

「……………」

とさすがに俯向く。

「昨夜！」

「實は……………」

扱こそ（昨夜）の意は是である。——

鳥白痴
「まあ、何うしてね、」

と思はず隔てもなくなつて、此方も眞顔に摺寄つた。

「一所に馬車に乗つて歩行かうと言つて、」

「お約束が出来て、」

「え、」

「ぢや、豫てあの婦とはお知己で……尤もお知己でなくつては、こんな事にも成りますまいが。」
「知己……知己つて言や知己ですが、何も前方が知己と言ふんぢやない……んです、……私の方で、無理に知己にしてつたんです。」

ですから、昨夜の事なんぞも、決して婦から進んで出たんぢやありません。爲せたんです、強ひたんです。強請つて、無理に誘ひ出したんです。」

ね、ぢや、お民に罪はないぢやありませんか。其を婦ばかり縛らせて置く法はない、助けて下さい。私が皆背負つてるんです——婦に過失はありません。」

「お待ちなさいよ。然うして家出をした上は、罪が無ければ無し、あればあるで、何ち道、貴下ばかりの過失と言ふんぢやありません。」

貴下にも罪があれば、無論婦にもあるんです。婦に罪が無いんなら、貴下にもそりや無い。何しろ、緩りお話をなすつて下さい。お心置きなく、可うございますかね。」

と熱心に言つて、額かせて、

「而して、一所にお連れ出しなすつたのが、可訝いぢやありませんか。お民さんは今朝明方霧の中、一人で庚申塚に倒れて居たと言ふんですよ。」

すると、何う云ふ事になつたんでせう。」

手の汗を拭ひながら、押揉んで居た手巾を、はたと落して、
「あ、茫として私にも分らないで居ました。恚うです、まあ、聞いて下さい。」

十八

「最初、此の袋田の事を知つて、遊びに來ましたのは、去年の夏で、其時は朋友と三人連れ。」

打明けてお話しするのに、恥も外聞もありませんから申しませう。遊びに來たつて言へば、唯散歩にでも参つたやうで穩ですがね、其の實は、奥へあの美人を見に來ました。」

私より前に朋友が見つけたんです——何でも私の別荘の庭へ、草取りに雇はれて來た時に見たんださうで、恐らく此の邊ぢや見懸けないと言ふ。」

例の誇張したらうが、何も損はない。行つて見ろ、行つて見ろ、處は知つてゐるかつて聞くと、其の後、千菜物の籠を背負つて、町の八百屋へ賣りに來た處を、晩方見つけて、林檎を買ひなが